

八尾市文化財調査報告29
平成5年度国庫補助事業

八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書 I

1994. 3

八尾市教育委員会

はじめに

八尾市は奈良と大阪を隔てている生駒山系の高安山の西方に位置しており、古くは旧石器時代より人々の足跡が刻まれてきた土地であります。弥生時代から古墳時代にかけては、平野部には大きな集落を、山麓には群集墳を形成し、また奈良時代には由義宮の所在地として『続日本書紀』にも登場しています。

このような歴史の豊かな土地であるだけに開発事業に先立つ遺構確認調査は増加の一途を辿っております。近年、発掘調査の記事が新聞紙上を賑わすことが多くあります。しかし、その影には遺構確認の調査の積み重ねのあることも忘れる事はできません。

本報告書は平成5年度の遺構確認調査をまとめたものであります。これらの成果によって八尾市の歴史をわずかでも垣間見ることができると思われます。それゆえにこの報告書が多くの人々に活用されることを願って止みません。

最後になりましたが、調査に御協力いただいた方々、関係者各位に深く感謝いたします。

平成六年三月

八尾市教育委員会

教育長 西谷信次

例　　言

- 1、本書は、平成5年度に八尾市教育委員会が国庫補助事業として、八尾市内で実施した遺構確認調査の報告書である。
- 2、調査は八尾市教育委員会文化財課（課長　田中弘）が事業者に協力を求めて実施した。
- 3、調査は八尾市教育委員会文化財課の米田敏幸、道斎、吉田野乃が担当し調査にあたった。
- 4、本書には、巻末に記載した調査一覧表のうち、特に成果のあった調査について、その概要を収録した。
- 5、古墳の石室石材については、市立曙川小学校教諭奥田尚氏より、玉稿をいただいた。
記して謝意を表したい。
- 6、本書の作成にあたっては、道斎、吉田が執筆・編集を行なった。

本文目次

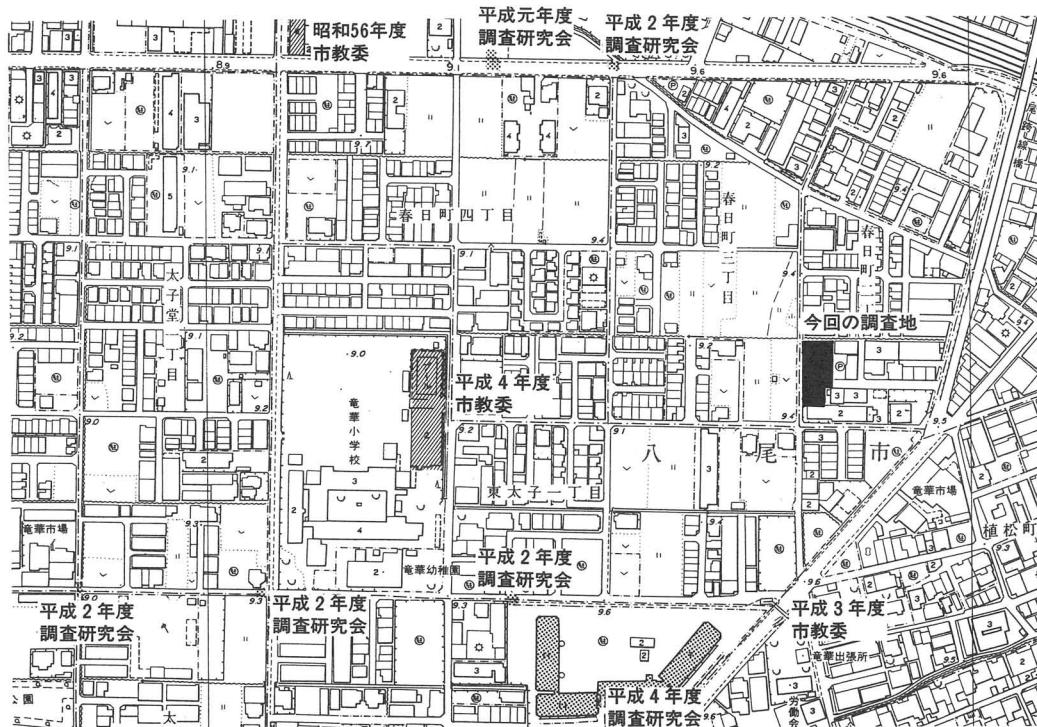
1. 跡部遺跡（92-623）の調査	1
2. 老原遺跡（93-260）の調査	9
3. 太田遺跡（92-585）の調査	13
4. 太田遺跡（93-081）の調査	19
5. 恩智遺跡（92-640）の調査	23
6. 久宝寺遺跡（93-054）の調査	27
7. 郡川遺跡（93-075）の調査	29
8. 神宮寺遺跡（92-307）の調査	31
9. 高安古墳群（93-70～73）の調査	34
〔付論〕 195号墳の石材について	
10. 東郷遺跡（93-278）の調査	45
11. 東郷遺跡（93-279）の調査	47
12. 東郷遺跡（93-524）の調査	49
13. 中田遺跡（92-645）の調査	51
14. 中田遺跡（92-007）の調査	54
15. 水越遺跡（92-602）の調査	56
16. 竜華寺跡（93-177）の調査	76

図版目次

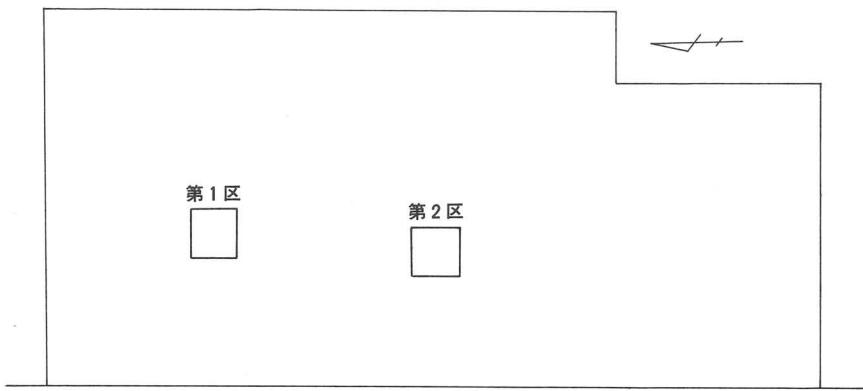
- 図版1 太田遺跡（92-585） 井戸（南から）
郡川遺跡（93-075） 調査地全景（南から）
- 図版2 高安古墳群（93-70～73） 石室全景（南西から）
奥壁
- 図版3 高安古墳群（93-70～73） 右側壁
左側壁
- 図版4 高安古墳群（93-70～73） 石室全景（西から）
石室全景（東から）
- 図版5 高安古墳群（93-70～73） 第2トレント
裏込め除去後
- 図版6 水越遺跡（92-602） 調査地（南から）
SK02（北東から）
- 図版7 水越遺跡（92-602） SK01水差形土器出土状況
SK02土器出土状況
- 図版8 中田遺跡（92-645） 出土遺物
跡部遺跡（92-623） 弥生土器
- 図版9 跡部遺跡（92-623） 古墳時代遺物
- 図版10 跡部遺跡（92-623） 石器
恩智遺跡（92-640） 出土遺物
神宮寺遺跡（92-307）
- 図版11 太田遺跡（92-585） 出土遺物
- 図版12 水越遺跡（92-602） SK01 土器
SK02 甕
- 図版13 水越遺跡（92-602） SK02 壺
SK02 底部
- 図版14 水越遺跡（92-602） SK03 甕
SK03 甕・壺
- 図版15 水越遺跡（92-602） SK03 底部
- 図版16 水越遺跡（92-602） SK03 底部他
SK01 砥石
- 図版17 水越遺跡（92-602） 出土土器

1. 跡部遺跡（92-623）の調査

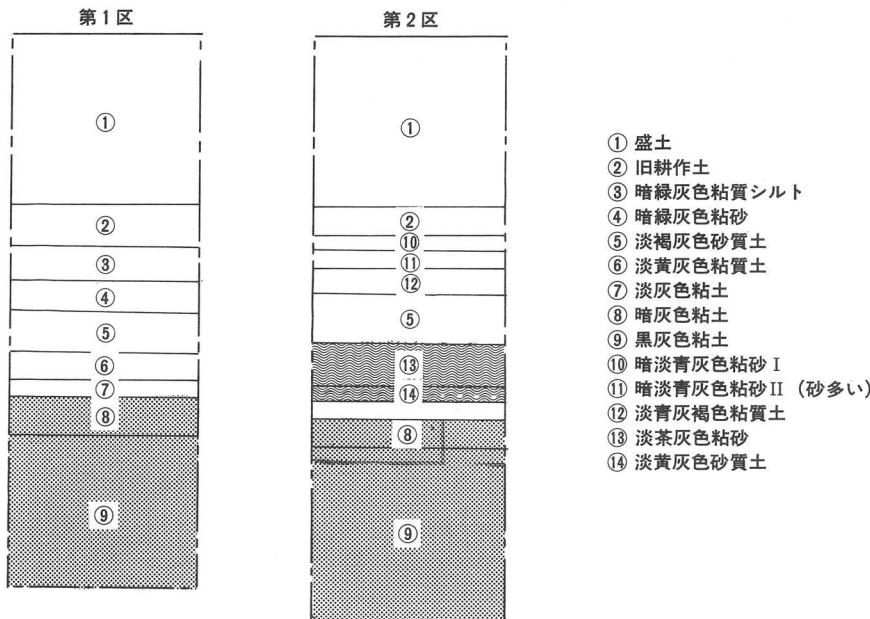
1. 調査地 春日町2丁目35-1, 35-2
2. 調査期間 平成5年3月19日
3. 調査契機 共同住宅建設
4. 調査方法 2.5m×2.5mの調査区を2ヵ所設定し、各々地表下3~3.5m前後まで掘削を行った。
5. 基本層序 第1区—現況はテニスコートとして使用されていた。約1mの盛土を取り除くと旧耕作土が現れる。GL-1.7mには第2区で確認された遺物包含層（土器集積か）が見られず、淡黄灰色粘質土があり、これが6世紀後半の遺構面となる可能性がある。そしてGL-1.9m前後の暗灰色粘土（層厚約0.2m）とその下部層である黒灰色粘土で弥生時代前期新段階から後期にかけての遺物が出土している。黒灰色粘土層は1~1.3mの層厚があり、幾層かに分層されると思われるが、調査区の規模、深度から遺物の確認のみに留まざるを得なかった。



第1図 調査地周辺図 (1/5000)



第2図 調査区設定図 (1/400)



第3図 基本層序模式図 (1/40)

第2区 - GL - 1.6 m 前後の淡茶灰色粘砂と淡黄灰色砂質土（併せて層厚 0.22 m）では 6 世紀後半の遺物が出土している。掘方が確認できなかつたが、西壁付近で土器が集積している状態で見つかっており、遺構の一部である可能性が高い。GL - 2 m 以下では第1区と同様に暗灰色粘土と黒灰色粘土から多量の遺物が出土している。

6. 遺構・遺物

第2区の西壁付近出土の 6 世紀後半の遺物をここでは土器集積（1～28）として扱い、他を包含層出土遺物（29～38）とした。また第1・2区の暗灰色粘土・黒灰色粘土からの遺物を包含層出土遺物（39～71）と

して取り扱う。

土器集積では杯（1・2）、把手付鉢（3～5）、鉢の把手部(6)、壺（7・8）、甕(9)、鉢(10)、土釜（11・12）などの土師器と杯蓋（13～15）、杯身（16～19）、有蓋高杯（20～23）、壺（24～26）、甕（27）、鉢（28）などの須恵器が出土している。杯（1・2）はそれぞれ口径12.2 cm、13 cmで、(1)は器高4.5 cmを測り、2段にナデを施し、下半部に指頭痕が残る。（3～5）は平底と断面円形の把手を有する。これらは同一規格で作られており、（3・4）の口径はいずれも〔反転〕13 cm、器高9.6 cmで、底径も6 cm前後である。外面にはハケナデがみられる。杯の把手部(6)は内面に横方向のイタナデを行っている。鉢(10)は推定口径14 cm、器高7.1 cmで外面にイタナデを行い、内面には放射線状の暗文を施す。土釜（11・12）はそれぞれ口径19.8 cm、26.6 cmで、内面に横方向のハケナデを施している。胴部は長胴とみられ、菅原氏によって分類された河内A型に属する。

須恵器杯蓋（13～15）は稜線はほとんどみらず、凹線によって表現されているものとヘラケズリによって稜の痕跡を表しているものがあり、口縁端部は丸くおさめている。杯身（16～19）は底部は浅く、たちあがりは短く内傾し端部は丸い。ヘラケズリも1/2前後である。有蓋高杯（20～23）の杯部は蓋杯に準じ、脚部は長脚2段スカシで3方に配置している。壺（24・25）はいずれも体部から底部にかけて丸く、カキ目を施す。（24）の口頸部は外上方に伸び端部は下方し肥厚している。（25）は上外方に伸びるとみられる。甕（27）は口縁部のみであるが外上方に伸びた後屈曲して外反する。端部は平面を成している。器台（28）は外面にタタキを行い、斜行文を施す。

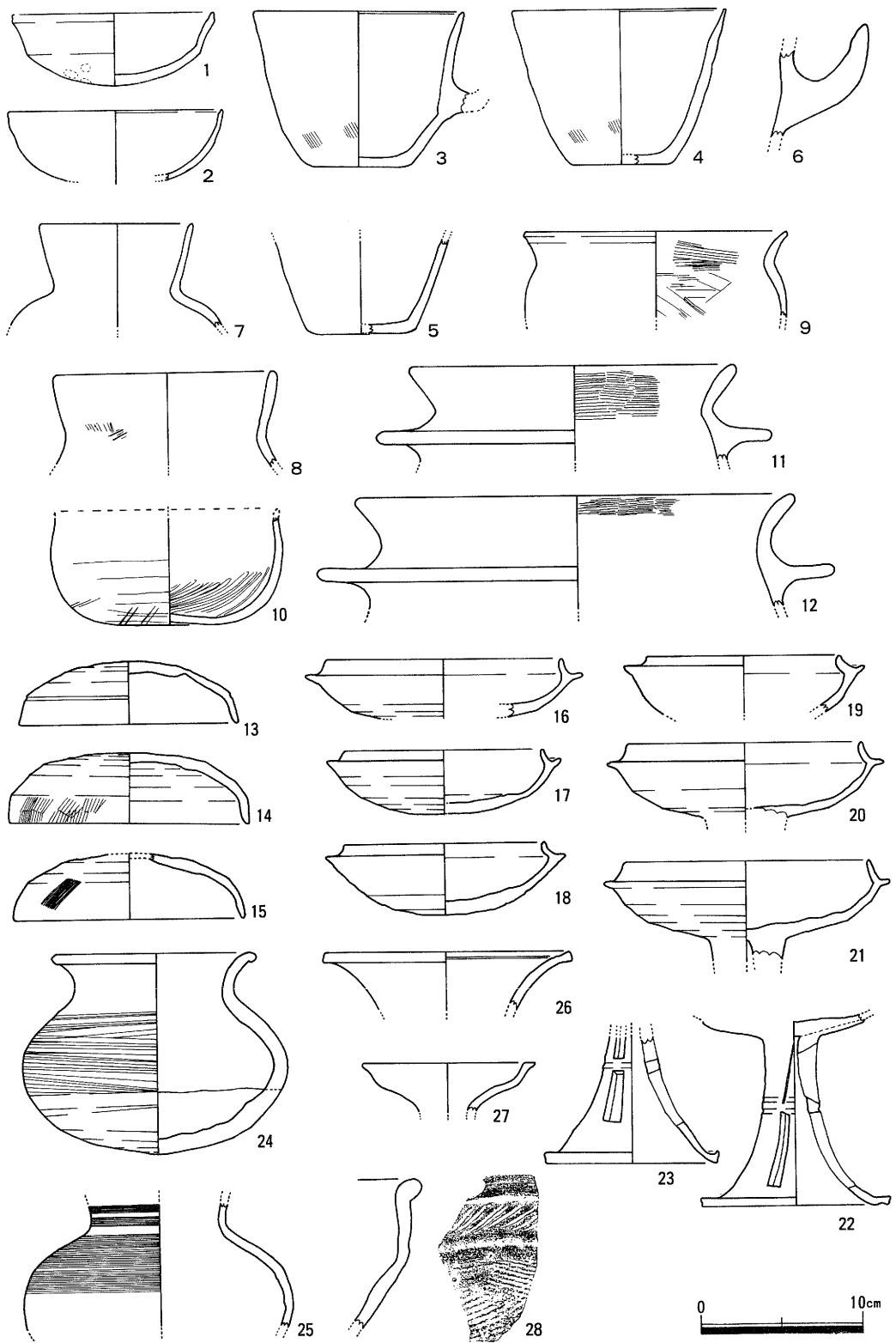
次に包含層出土遺物（29～38）をみていく。（29～35）が土師器で、（36～38）が須恵器である。土師器は杯、甕、壺、高杯が出土している。高杯（34・35）は脚部が下外方にゆるやかに下るもので身入り・筒状の2種類がある。須恵器杯蓋（36・37）は稜線の痕跡はみられず、天井部は丸い。

以上の遺物を編年のはば確立されている須恵器を軸として位置づけを行う。これらの遺物の特徴は長脚化した高杯の存在と、既に記述したように丸い口縁端部と形骸化した稜線を有する蓋杯である。このような特

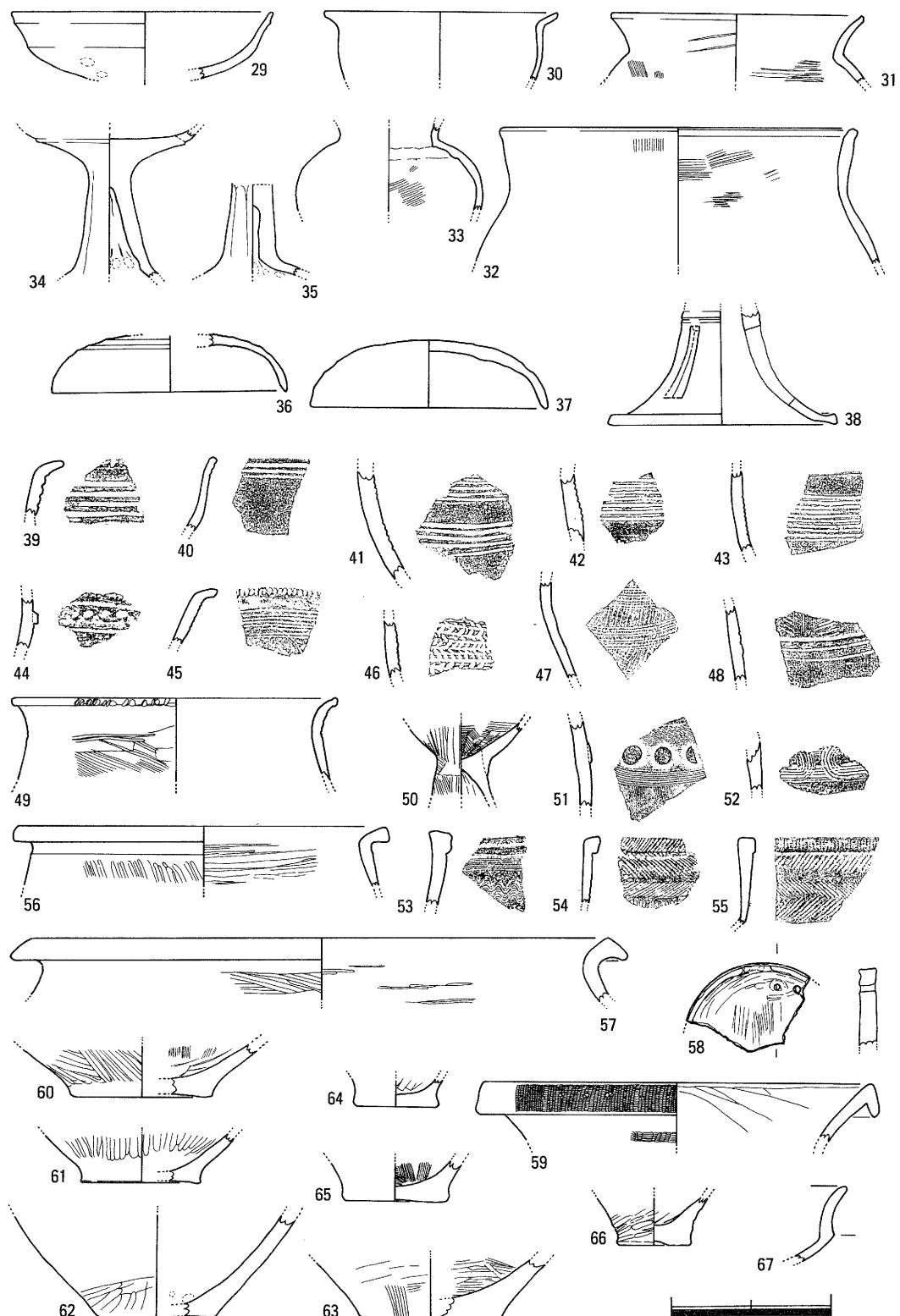
徴からTK43～TK209に概ね該当し、6世紀末に位置づけらる。これは土師器でも杯Cとみられる土器が存在することからも裏付けられよう。

次に第1・2区の灰色粘土・黒灰色粘土出土遺物（39～71）についてみていく。（39）口縁端部にキザミ目を施し、4条の範描沈線による条文帯をもつ甕、（40）口縁に3条の範描沈線による条文帯をもつ鉢。（41）5条の範描沈線を2帯以上有する壺、（42）7条以上の範描沈線をもつ土器片、（43）10条の範描沈線をもつ壺、（44）布巻棒状圧痕をもつ土器片、（45）口縁端部に細かいキザミ目を施し、8条の範描沈線をもつ甕、（46）綾杉文をもつ土器片、（47）縦方向の櫛描沈線の後に横方向の櫛描沈線の条文帯を3帯以上もつ土器片、（48）3条の範描沈線の上部に綾杉系の文様をもつ土器片、（49）口縁端部にキザミ目を施し、外面をハケナデした後ヘラミガキを行っている広口壺、（50）外面にハケナデの後ヘラミガキを行い杯部内面はハケナデをしている高杯、（51）幅広の波状文、櫛描直線文、狭小の波状文を施し、円形浮文をもつ土器片、（52）流水文をもつ土器片（53）口縁部下に櫛描直線文、波状文を施す鉢、（54・55）口縁部に簾状文、刺突文を施す鉢、（56・57）内外面にヘラミガキ行う甕、（58）2孔をもつ円形の土製品で厚さ1.15cm、端部はやや肥厚している。黒色を呈し全面にヘラミガキを施している。焼成は非常に堅致である。（59）口縁部に簾状文を施した壺、（60・61）壺底部、（62・63）甕底部でとくに（63）は（58）と同様に黒色を呈し、内外面にヘラミガキを施し、磨かれたような状態で、焼成も堅致である。（64・65）壺あるいは甕底部、（66）外面にタタキを行う甕底部、（67）高杯

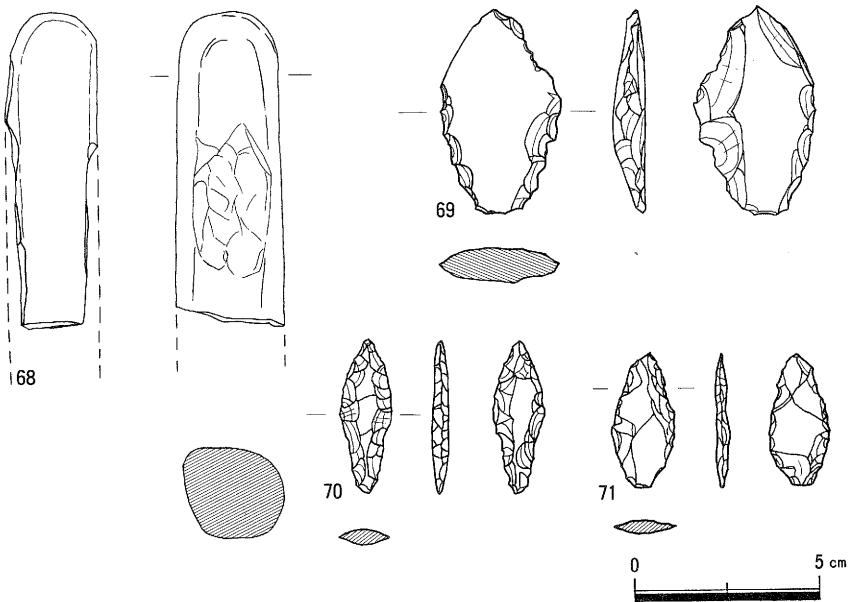
これらの遺物の時期についてであるが、範描沈線少条（40）や綾杉系の文様（48）など前期中段階後半部分に含められる可能性をもつものもあるが主体となるのは範描沈線文多条による帶条文様（41～43）、布巻棒状圧痕（44）、10条前後におよぶ範描沈線（45）など前期新段階の形式に含まれるものである。また簾状文、波状文など中期に盛行する文様（52～54・58）とともに後期のタタキ調整を行うもの（66）も散見されることから、弥生時代前期新段階から後期にかけての遺物を包蔵するも



第4図 出土土器実測図 (1 / 4)



第5図 出土土器実測図 (1 / 4)



第6図 出土石器実測図（1／2）

のである。

最後に石器を見ていく。細かな剥片は多くみられるが、ここでは（68）の石棒状石器、（69）スクレイパー、（70・71）石鏃の4例を掲げておく。（68）は砂岩製の石棒の一部で、側面は若干磨かれており、また裏面に孔を穿ちかけた痕跡があり、未製品とみられる。（69）サヌカイト製のスクレイパー、（70）はサヌカイト製の有茎式石鏃で全長4.1cm、鏃身2.6cm、茎1.5cm、幅1.35cm、重さ2.25gである。（71）サヌカイト製の凸基I式石鏃で全長3.5cm、最大幅1.65cm、重さ2.5gである。

7. 備考

跡部遺跡ではこれまで当教育委員会と(財)八尾市文化財調査研究会で数次の調査が行われ、弥生時代前・中期の遺物もわずかであるが出土しており、また方形周溝墓も確認されていた。また平成元年には銅鐸が出土しているが、集落域については判明していなかった。しかし、今回の調査地はその遺物の出土量からみてもその中心であると推定される。また(財)八尾市文化財調査研究会によって今年度に近辺で行われた調査でも同時期の遺物・遺構が検出されており、弥生時代前期から古墳時代前期の集落が遺存していることは確実であろう。また、跡部は物部氏の一族である阿刀氏の本拠地であるとされており、6世紀後半の遺物につい

ではそれらとの関連も想定される。

(道)

石鏃の形態分類は以下によった。

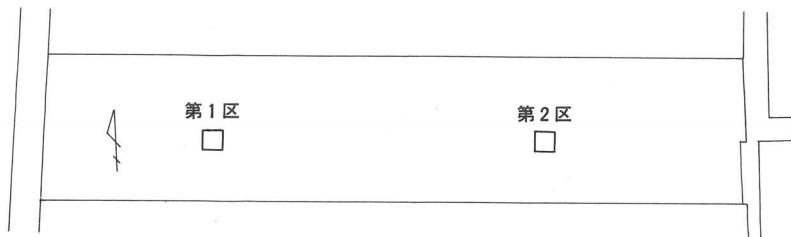
松本武彦「弥生時代の石製武器の発達と地域性—とくに打製石鏃について—」『考古学研究』第35巻第4号 1989年

2. 老原遺跡（93-260）の調査

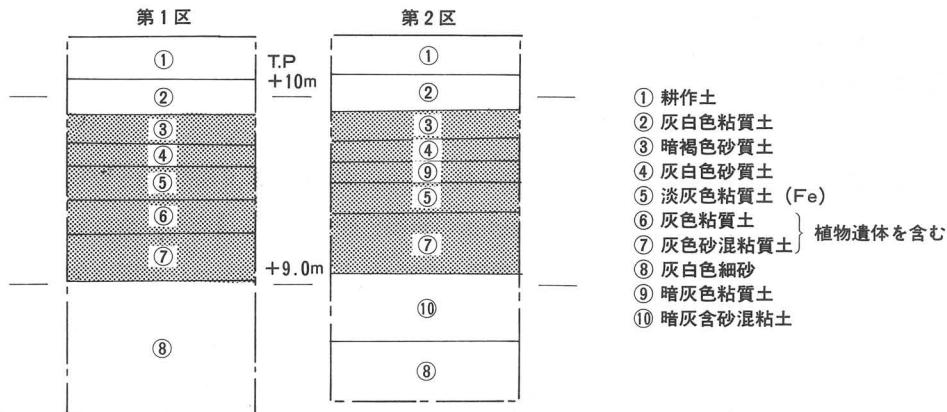
1. 調査地 老原1丁目91番の一部
2. 調査期間 平成5年10月14日
3. 調査契機 共同住宅建設
4. 調査方法 事業計画地に3m×3mの調査区を2ヵ所設定し、地表下2m～2.5mまで掘削、調査した。
5. 基本層序 現況は水田として利用されており、道路地盤より約0.6m下がっている。
第1調査区－地表下0.4mの暗褐色砂質土から遺物がみられるが、最も多く出土しているのは地表下0.58m（TP+9.73m）の灰白色砂質土以下であり、多量の瓦器椀と土師皿が出土している。地表下0.85m～1.3mでは植物遺体が含まれている。
第2調査区－地表下0.55m（TP+9.77m）の灰白色砂質土から約0.7mの厚さの堆積層から遺物が出土している。この第2調査区では第1区と比較すると瓦器椀よりも土師皿出土の割合が高い。しかし、いずれの



第7図 調査地周辺図 (1/5000)



第8図 調査区設定図 (1/1200)



第9図 基本層序模式図 (1/40)

調査区でも水田よりの流れ込む水と湧水のために遺構の検出はできなかった。

6. 遺構・遺物

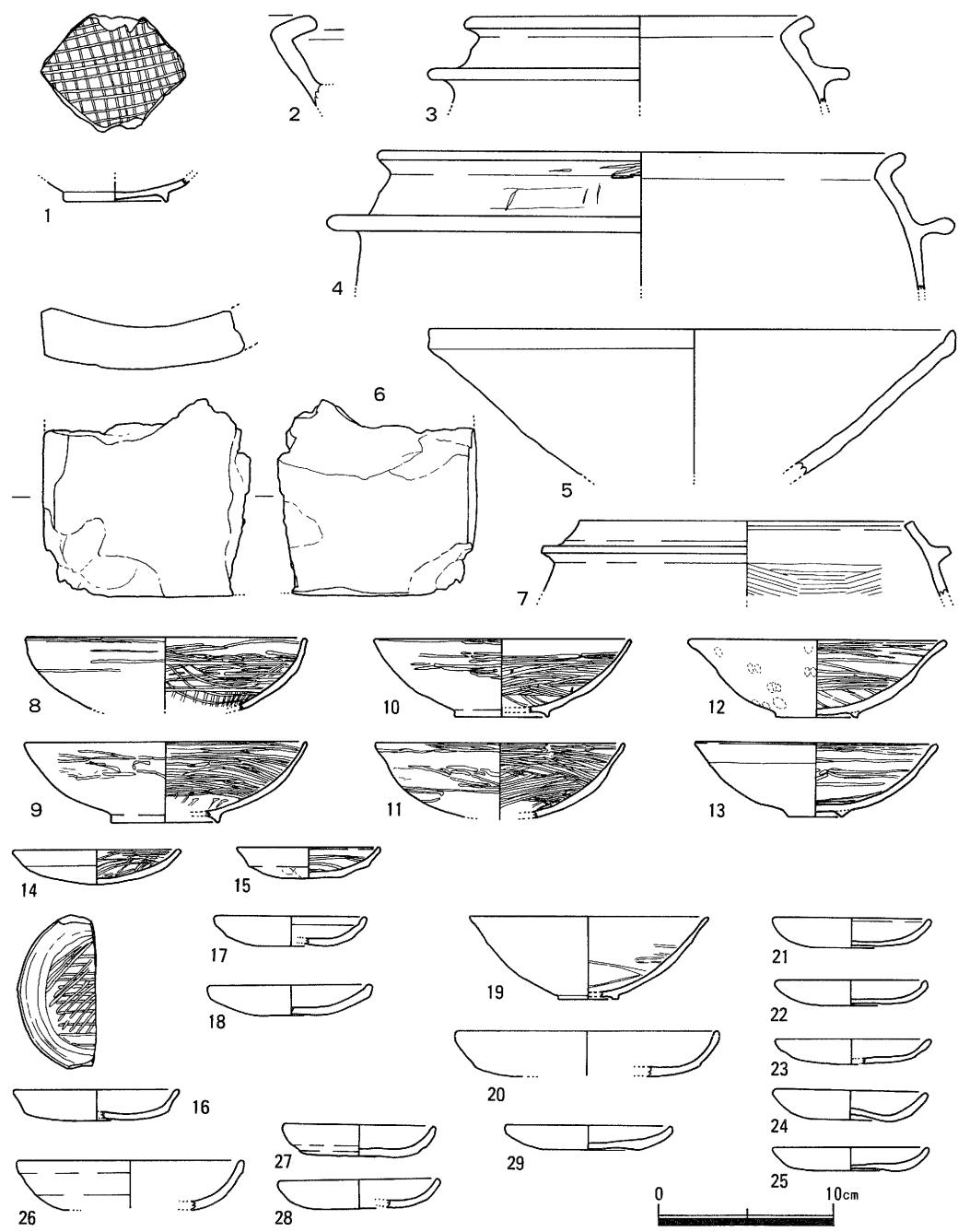
遺構は検出できなかったが、土層の堆積状況から、とくに植物遺体を含んでいる層がみられ、またいずれの層よりも時期差がない遺物が出土していることから堀、あるいは溝などの遺構の存在を推定することができよう。出土遺物については前述したように第1調査区では瓦器椀の出土が顕著であり、第2調査区では土師皿が大半を占める。(1~15)が第1調査区から、(16~29)が第2調査区から出土したものである。

第1調査区では(1)の瓦器椀と(2)の土師質の羽釜は③層出土、(3~6)の羽釜、擂鉢、平瓦は⑤層出土、(7~15)の三足釜、瓦器椀、瓦器皿は⑥~⑦層出土である。(3)は口径(反転) 19.9 cm、「く」の字状の口縁をもち外面はナデを行う。(4)は口径(反転) 30.3 cmで、内外面ともイタナデを施す。(6)は側面に布目痕が残っており、一枚作りの平瓦である。瓦器椀は外面の中位を数条ヘラミガキするのみで、(12·13)はそれさえも行っていない。内面は中位を非常に密にヘラミガキを施しているものが多い。また破片が多く明確ではないが見込みの暗文も平行線の

ものが目立つ。口径は反転復元も含めるが（8・9）が16cm、他は14cm～15cmで、器高は4.2cm～4.7cmである。

第2調査区は（16～18）の瓦器皿、土師皿は③・④層出土、（19～25）の瓦器椀、土師皿は⑨・⑤層出土、（26～29）土師皿は⑦層出土である。土師皿は口径8.8cm～9.6cmの小型のものと口径（反転）12.8cmと15cm等の大型のものがある。

7. 備考 本調査地の南東約270m、奈良街道から田井中への分岐点にはかつて奈良時代の軒丸瓦などが採取された五条宮とよばれる場所がある。その性格などは判明しておらず、廃寺址とされている。今回の調査はその近辺に位置することから奈良時代の遺構、遺物が出土することが期待されたが、残念ながらその時期に関連するものは見つかず、鎌倉時代前半の多くの遺物と溝あるいは堀と推定される遺構が検出された。しかし、八尾市内の古代寺院は奈良時代にその姿を消し、鎌倉時代の新仏教の広まりとともに再興されたものもあることからそのような可能性も考えいかなければならない。
(道)



第10図 出土遺物実測図 (1 / 4)

3. 太田遺跡（92-585）の調査

1. 調査地

太田3丁目179番地他

2. 調査期間

平成5年5月10~21日

3. 調査契機

共同住宅建設

4. 調査方法

1次調査では3m×3mの調査区を3ヵ所設定し、各々地表下2.5m前後まで掘削を行った。その結果第2・3調査区で表土直下でやや磨滅していたが須恵器や瓦器等の碎片が出土した。このため2次調査として6m×30mに調査区を拡張して再度実施した。

5. 基本層序

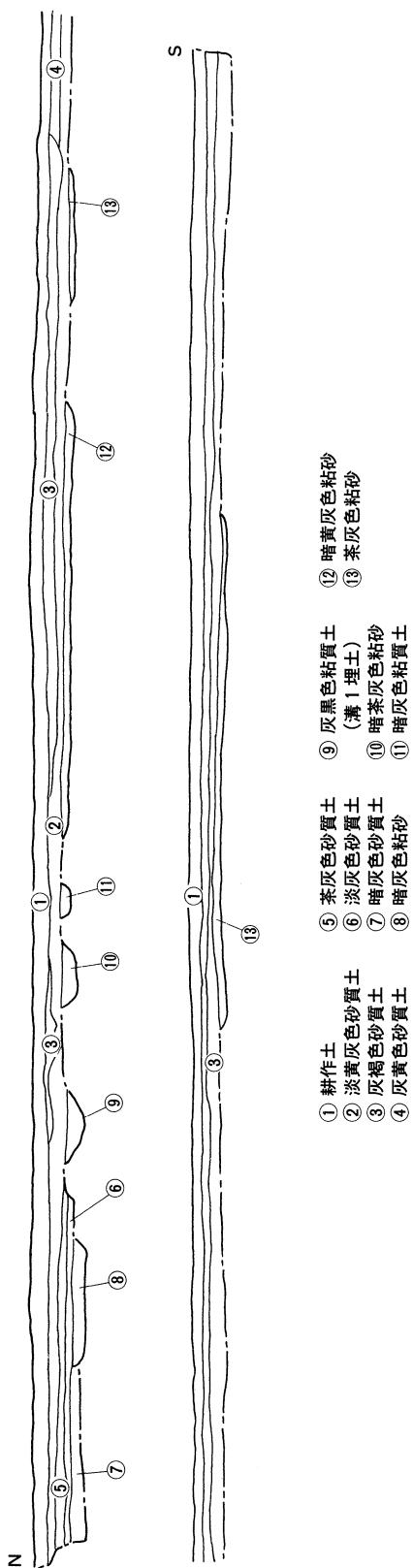
第1層=耕作土（層厚約0.15m）現在、畑として使用されていた土層。

第2層=灰褐色砂質土（層厚0.1~0.15m）上面に近世の南北方向の耕作溝がみられる。北側では磨滅しているものの須恵器、土師器、瓦器などの碎片を多く出土する淡黄灰色砂質土が堆積する。

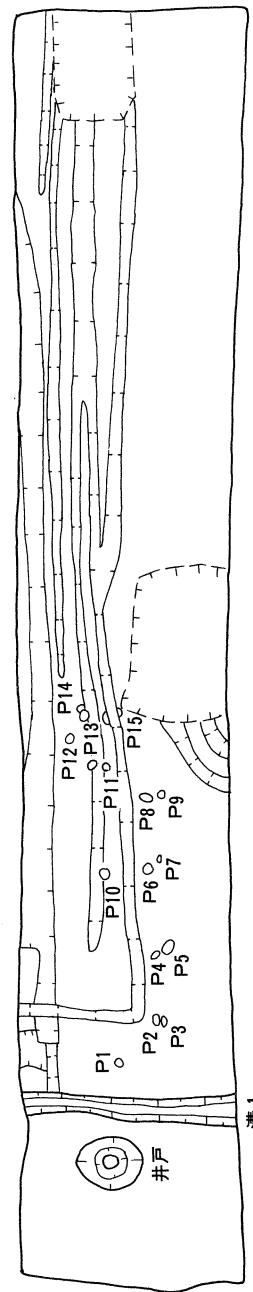
第3層=茶灰色砂質土（層厚約0.1m）羽釜、三足釜、瓦器、須恵器、土師器等を含む中世包含層であるが、調査区北端でのみ遺存していた。



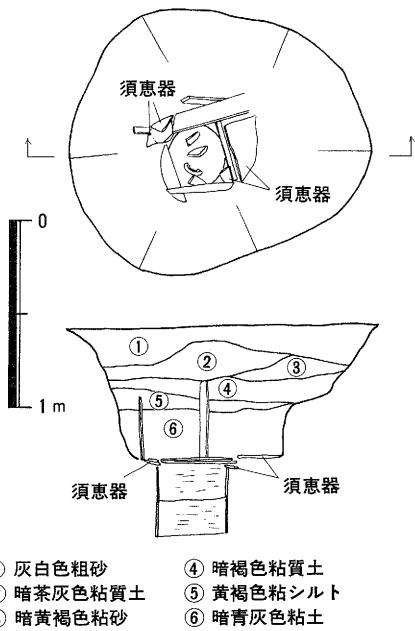
第11図 調査地周辺図 (1/5000)



第12図 東壁土層断面図 (1/80)



第13図 調査区平面図 (1/200)



第14図 井戸実測図（1／40）

第4層=淡灰色砂質土 平安時代後半の遺構面となる。しかし遺構が明確に遺存していたのは北側のみで、溝1を境として明確な遺構はみられなくなり、南北方向の近世の鋤溝が検出される。

6. 遺構・遺物 近世の耕作溝と思われる南北方向の溝はおよそ10条検出しているが、ここでは11世紀末期～12世紀初頭に位置づけられる井戸および溝と明確な時期は不詳ではあるが調査区の北半分で検出されたピットについて述べていく。

[井戸]

調査区北端で検出した。平面形は橢円（1.6 m×1.4 m）で、底までの深さは約2.2 mである。0.7 m下には曲物（径約0.37 m）を2段に重ねており、曲物の上部には水を呼び込むように須恵器の大甕と思われる破片

を周囲に配置していた。また曲物の隅には直立した板材があり、回りにも板がみられることから井戸枠があったと推定される。井戸内部より土師質の甕（1・2）、黒色土器A類（3）、片口をもつ土器片（4）、土師質の羽釜（5～9）、砥石（10）、平瓦（11）のほか須恵器甕などが出土地している。（1）は口径（反転）18.6 cmを測り、口縁から頸部にかけてユビナデを行い、胴部はイタナデを施しているが指頭痕が残る。内面はハケナデを行う。（5）は暗茶褐色を呈し、口径（反転）24.8 cmを測る。鍔から内傾し、緩やかに外半する。胴部内面は指頭痕が顕著にみられ、口縁部はイタナデを施す。（7）は暗茶褐色を呈し、口径（反転）27.2 cmを測る。口縁部は「く」の字状に鋭く外反する。内面はイタナデを施し平滑に仕上げている。（12）は呼び込み板として使用されていた須恵器の一部である。これは焼き損ないの須恵器を適当な大きさに分割し、曲物の周囲に配置していたものである。

[溝1]

井戸の南約1.5 mで検出した。東西に伸びる溝で、検出長5.8 m、幅0.75 m、深さ0.25 mを測る。埋土は灰黒色粘質土で、瓦器椀（13～19）、土師質の甕（23）、杯（20）、土師皿（21・22）などが出土している。瓦

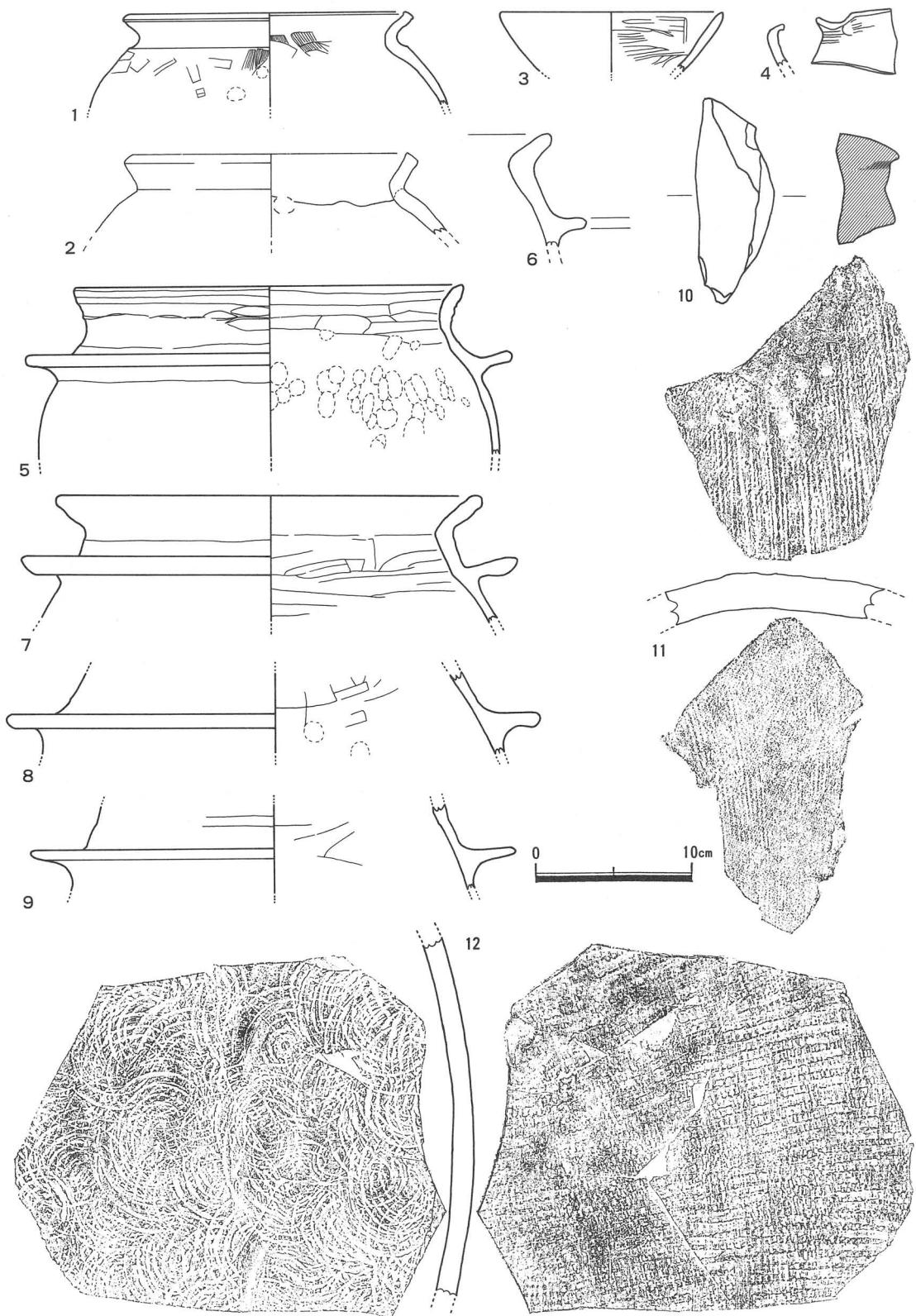
器椀（13）は高台指数45.3で、外面はヘラケズリを行った後にヘラミガキを施しており、またナデも用いられているが、全体にヘラケズリの痕跡が明瞭にみられる。内面はミガキが密にほどこされており、見込み部分には短いミガキが平行に僅かに行われている。色調は全体に灰白色を呈し、外面下半部は白色である。（14）も同じタイプの瓦器椀であるが内外面と調整は不明瞭である。高台指数43。（15）は砂粒を含む粗い胎土を用い、ヘラミガキは口縁部付近にしか施されず、炭素が吸着しておらず内外面とも淡灰白色である。（16）は外面上部はナデ、中位以下は指押痕が顕著にみられ、内面はナデのみで仕上げており渦巻き状の記号がみられる。ヘラミガキは施されず、やはり炭素はまったく吸着していないが、これは（15）と異なりナデも行っておらず、色調は灰茶褐色を呈している。

〔他の遺物〕（24）はピット2より出土した土師器杯で口径（反転）15.4cmを測り、内面に過熱痕がある。（25～27）は包含層出土の瓦器椀である。

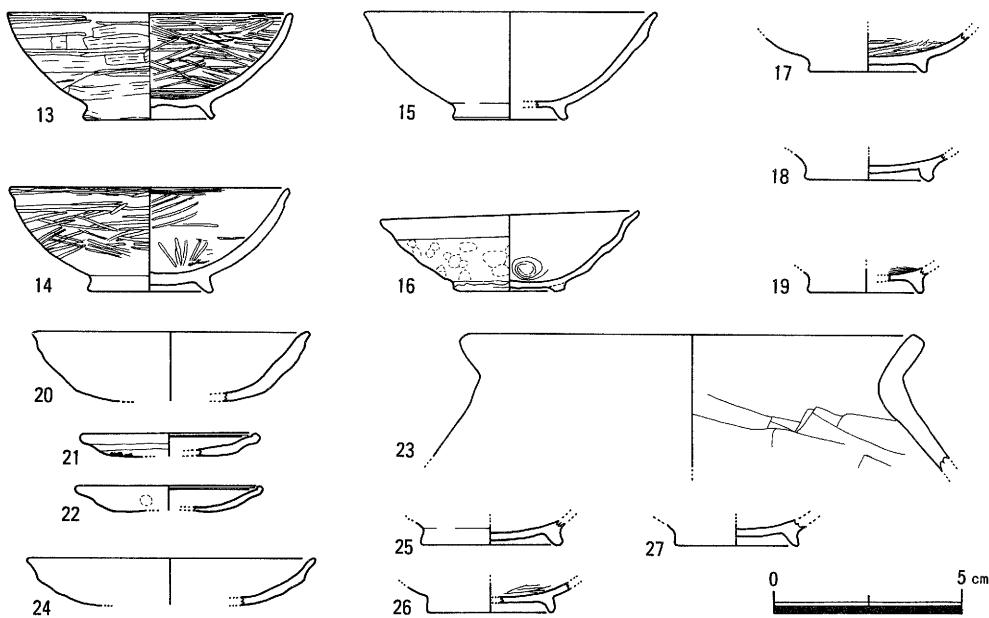
〔ピット〕

番 号	平面形	径 cm	深さ cm	埋 土	出土遺物・他
P - 1	円形	20	15	灰色粘砂	須恵器甕、土師質釜
2	楕円形	20～27	13	灰色粘砂	瓦器、土師器
3	楕円形	22	7	灰色粘砂	瓦器
4	円 形	23	21	淡灰色粘砂	土師器
5	楕円形	22～33	10	灰色礫混粘砂	根石あり
6	半円形	26	7.5	灰色粘砂	耕作溝により一部削平
7	楕円形	33～44	6	淡灰黒色粘砂	
8	半円形	23	12	灰色粘砂	耕作溝により一部削平
9	円 形	22	14	淡灰色粘砂	
10	円 形	26	13	淡灰色砂質土	土師器
11	円 形	1	10	黄褐色砂質土	
12	楕円形	30～24	5	灰茶色粘砂	
13	円 形	25	5	灰色粘砂	
14	円 形	18	25	淡緑灰色粘砂	
15	楕円形	62～50	10	黒灰色粘砂	瓦器

これらのピットは前述したようにいずれも明確な時期は不明であるが、



第15図 出土遺物実測図 (1/4)



第16図 出土遺物実測図（1／4）

出土遺物より中世以降と思われる。その性格についても建物を構成するものであるのかも判然としないが、2～8のピットと3～9のピットは平行に並んでおり、建て替えが行われたと推定される。

7. 備考 今回の調査では地表下約0.3 mの地点で平安時代後期の遺構を検出した。現在の耕作土直下のためその多くは耕作溝などで削平されたと思われるが深く掘られていた井戸、溝などが確認できた。これらのことから調査地付近には当該時期の居住域があったことが判明した。 (酒)

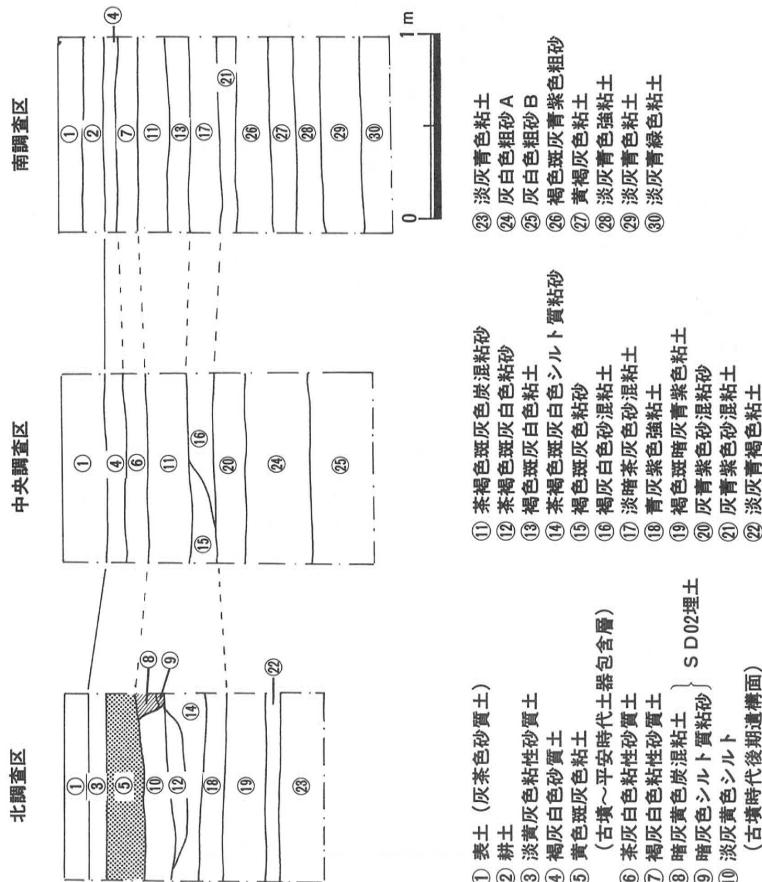
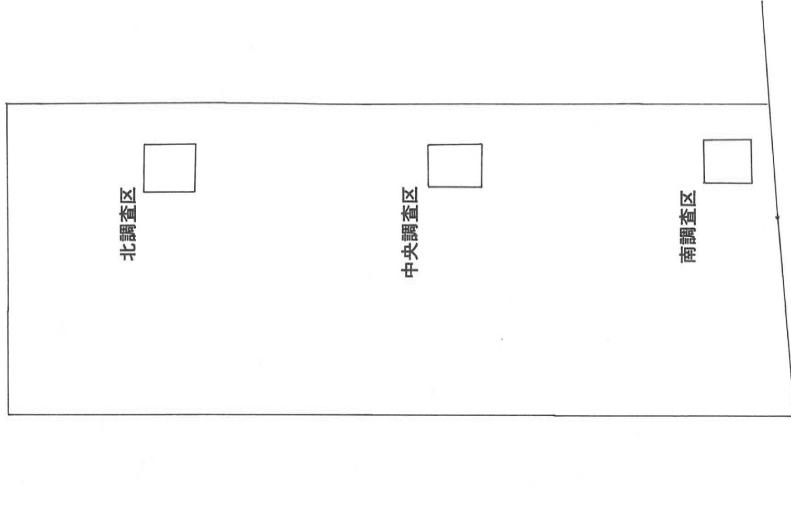
4. 太田遺跡（93-81）の調査

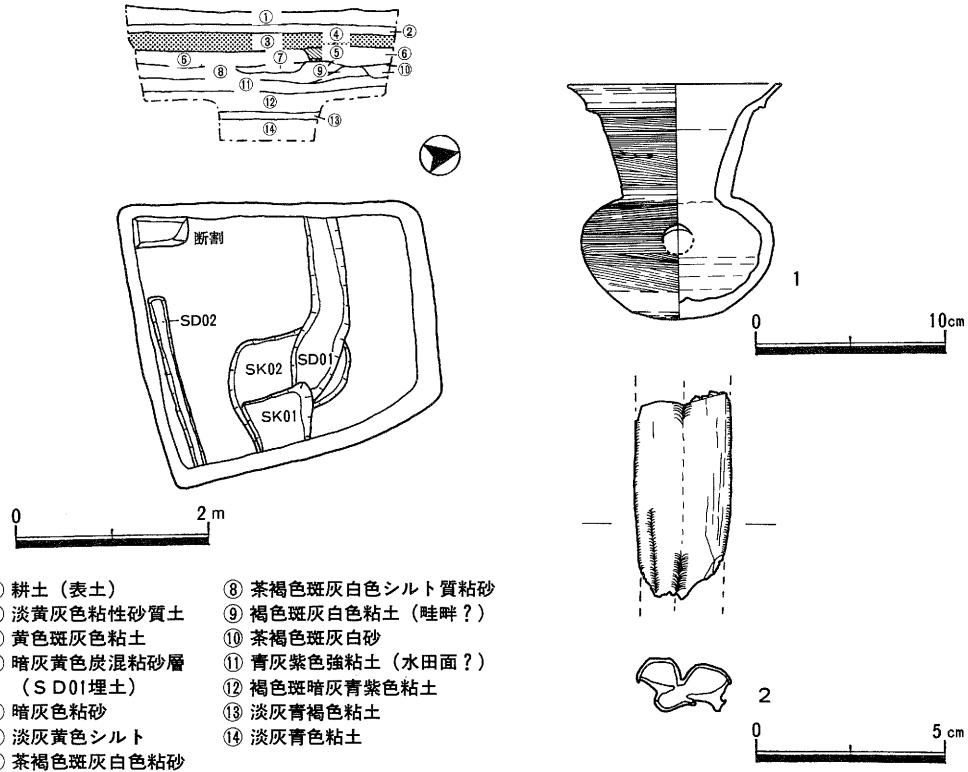
1. 調査地 太田3丁目139
2. 調査期間 平成5年5月24、25日
3. 調査契機 共同住宅建設
4. 調査方法 下水道管敷設部分に3m四方の調査区を3ヶ所設定。北調査区では地表下1.4mまで、中央調査区では地表下1.7mまで、南調査区では地表下1.8mまで、重機と人力を併用して掘削。
5. 基本層序 北調査区では、地表下0.4mの淡灰黄色シルト層上面で、古墳時代後期の遺構面を検出した。この層は中央区、南区では茶褐色斑灰色粘砂層に対応する可能性があるが、遺構は検出できなかった。北調査区ではこの下の地表下0.8mの青灰紫色強粘土層上面で畦畔状の高まりを確認しており、水田面になる可能性がある。これに対応する層は他の調査区でも確認している。これ以下は、灰青色系の粘土層が堆積するが、中央区では地表下1.0m以下で自然流路と思われる灰白粗砂層を確認している。



第17図 調査地周辺図 (1/5000)

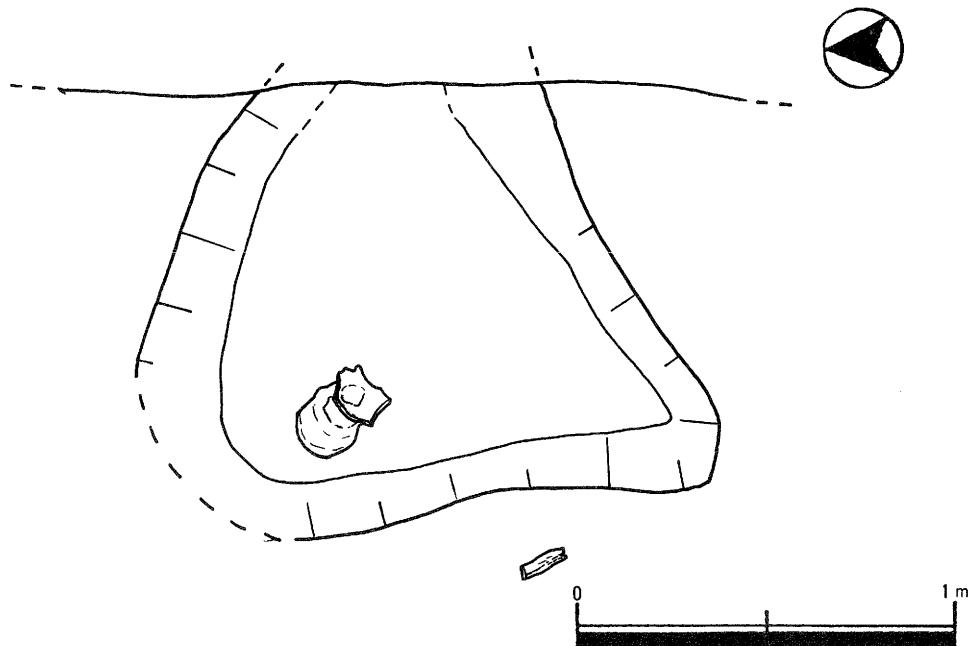
第19図 調査区設定図 (1 / 40)





第20図 北調査区平・断面図 (1/40)

第21図 出土遺物実測図 (1/4)



第22図 SK01遺物出土状況図 (1/20)

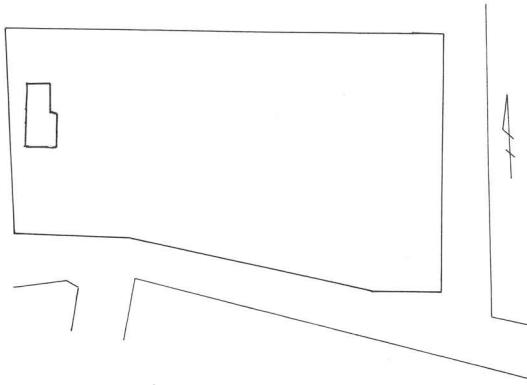
- 6. 検出遺構** 北調査区では淡灰黄色シルト層上面で溝2条、土壙2基を検出した。この遺構面の上には平安時代を下限とする土器を包含する黄色斑灰色粘土層が堆積していた。S D01は東西方向の溝で最大幅0.4m、深さは最も深い部分で0.18mをはかる。東端はSK01によって切られている。埋土は暗灰黄色炭混粘砂層である。S D02は調査区南端で検出した東西方向の溝で、最大幅0.16m、深さは最も深い部分で、0.13mをはかる。埋土は暗灰黄色炭混粘砂層、西側で途切れる。SK01は不整形台形を呈する土壙で、最大辺長0.85m、最大の深さは0.2mをはかる。埋土は暗灰茶色粘砂層、SK02、SD01をきっている。この土坑の底面で須恵器の躰が口縁を上にして出土した(1)。SK02はSD01、SK01にきられた不整形の土壙である。最大径1.2m、深さは最も深い部分で0.04mをはかる。埋土は淡暗灰色粘砂である。SK01寄りで草食動物の歯と思われるものが出土した。SK01から出土した躰は口縁部のほとんどがきれいに欠けた状態であり、人為的に打ち欠いたものと考えるのが自然である。草食動物の歯の出土していることも考えあわせると、水に関する祭祀の行なわれていた可能性も考えられる。
- 7. 出土遺物** 遺構面直上の包含層、黄色斑灰色粘土層からは、須恵器片(MT15~TK10型式)、土師器片、黒色土器片が出土した。遺構ベース面である淡灰黄色シルト層及び各遺構内からは、須恵器片(MT15~TK10型式)、土師器片が出土した。須恵器はTK10型式のものが多い。出土土器はほとんどが細片である。1はSK01の底面より出土した躰である。肩はやや張る。頸部はそれほど伸びない。口縁部と頸部の間に明瞭な段がつく。頸部から体部の外面はカキメを施す。MT15型式前後に位置付けられる。2は淡灰黄色シルト層上面付近から出土した草食動物の歯かと思われるものである。
- 8. 備考** 本調査地の周辺では、調査例が乏しいが、西へ1キロ程隔てた八尾南遺跡では、古墳時代後期の方墳などが検出されており、これらとの関連を含め、今後、周辺の古墳時代後期の遺構の拡がりに注意していく必要がある。
(吉田)
- 9. 参考文献** (財)八尾市文化財調査研究会『八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度』 1988年

5. 恩智遺跡（92-640）の調査

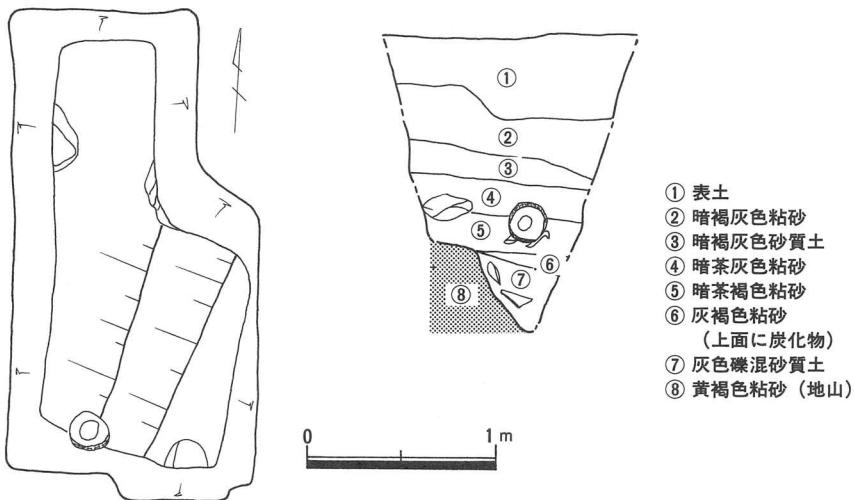
1. 調査地 恩智中町3-65
2. 調査期間 平成5年5月19~21日
3. 調査契機 専用住宅浄化槽設置
4. 調査方法 浄化槽部分に約1.5 m×0.7 mの調査区を設け人力により掘削を行った。また遺物が確認できた時点で調査区をやや拡張し、約2.4 m×1.3 mの調査区とした。
5. 基本層序 調査地はこれまで宅地として利用されており、また付近の人の話では戦争中に防空壕が掘られたということであったが、調査区は西端付近に設定したためかそれらしき痕跡はみられなかった。G L -0.65mの暗茶灰色粘砂以下が弥生時代の包含層になる。この下部層である暗茶褐色砂質土では子供の頭大の礫が多くみられ、その下には土器が潰れた状態で出土している。G L -1.1 mには地山と思われる褐色礫混粘砂がみられた。



第23図 調査地周辺図 (1/5000)



第24図 調査区設定図 (1/300)



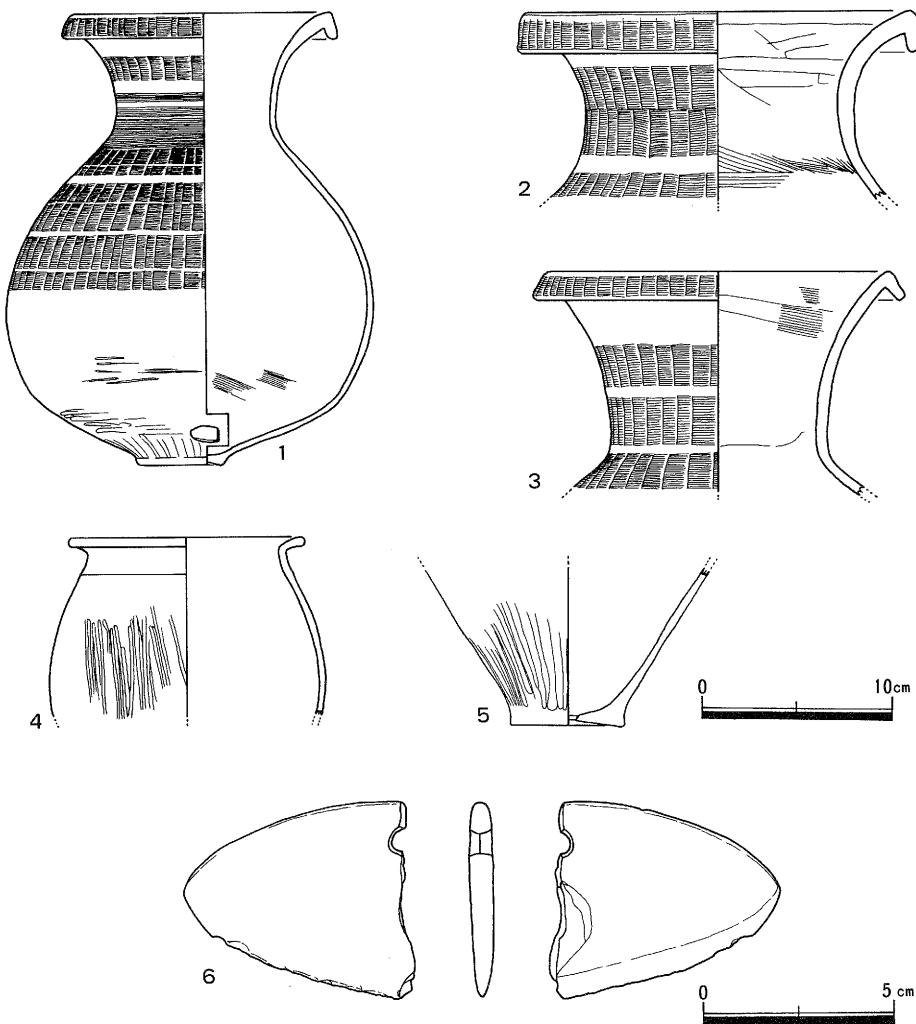
第25図 平面図及び南壁土層断面図 (1/40)

6. 遺構・遺物

GL - 1.1 m の地山で西側への落ち込みを検出する。埋土上面には炭化物を含む灰褐色礫混粘砂が堆積しており、下部には灰色礫混砂質土が堆積している。遺物はいずれの層からも出土している。しかし、調査区が小さいこともあり、その性格は明確ではない。

(1) は暗茶灰色砂質土上面の礫の下敷きになっていたもので、色調は暗茶灰色を呈し、生駒西麓産と呼ばれるものである。器高23.9 cm、口径14.4 cm。口縁部から体部にかけて11条の簾状文を施し、下半部に横方向のヘラミガキを行う。しかし簾状文は明瞭ではなく、浅く施文されており、直線文と見違う程である。内面は一部にハケナデが残るが、丁寧にナデ消されている。底部やや上部に1孔を穿っている。

(2) は暗茶灰色砂質土で出土。色調は明茶褐色を呈し、口径は21 cmを測る。外面には簾状文を施し、内面は口縁上半部にはイタナデを用い、



第26図 出土遺物実測図 (1／4)

下半部はハケナデを行う。

(3～5) は落ち込みの下層である灰色礫混砂質土からの出土している。(3) は暗茶褐色を呈し、口径19.4 cm(反転)を測る。外面には簾状文を施し、内面にはハケナデを行う。

(4) は暗茶灰色を呈する甕で、過熱された痕跡がある。口径12.4 cm(反転)を測る。外面は縦方向のヘラミガキを、内面はナデを行っている。(5) は甕の底部で暗茶褐色を呈する。外面は縦方向をヘラミガキを行っており、底部にもヘラミガキを施している。底径6 cmで、また焼成前に穿孔したとみられる円形の小孔を1ヶ穿っている。

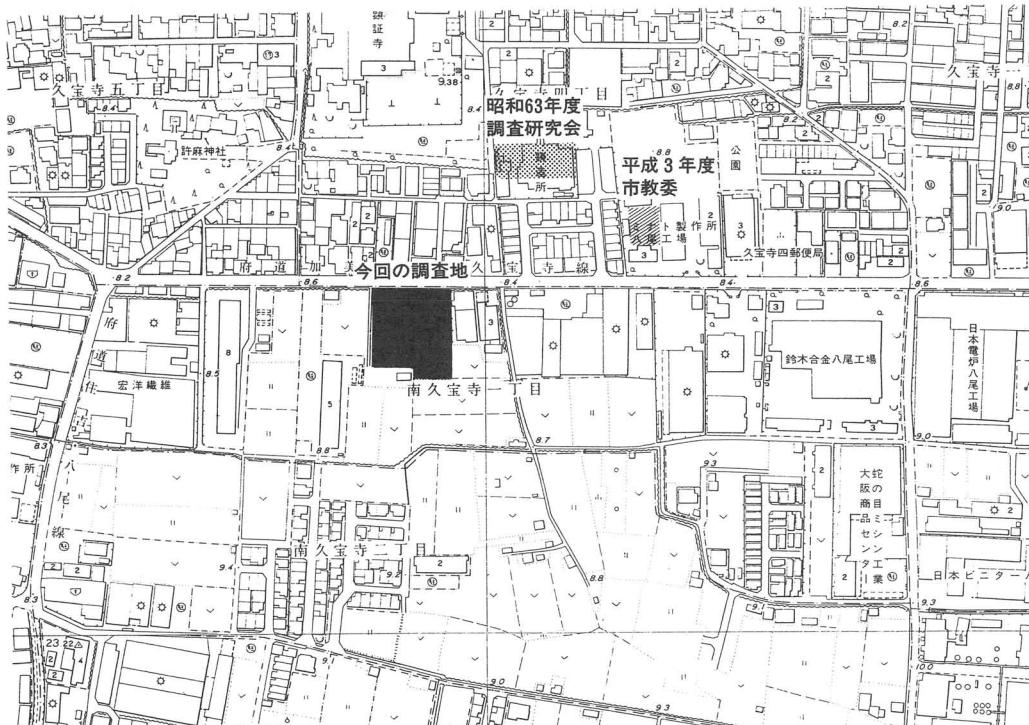
(6) 暗茶灰色粘砂出土の石包丁で、玄武岩質凝灰岩変岩を用いてい

る。紐部中央部分から破損しているが、杏仁形に復元できる。片刃で、使用痕は背面に認められる。幅6cm、長さ（残存）5.3cmである。

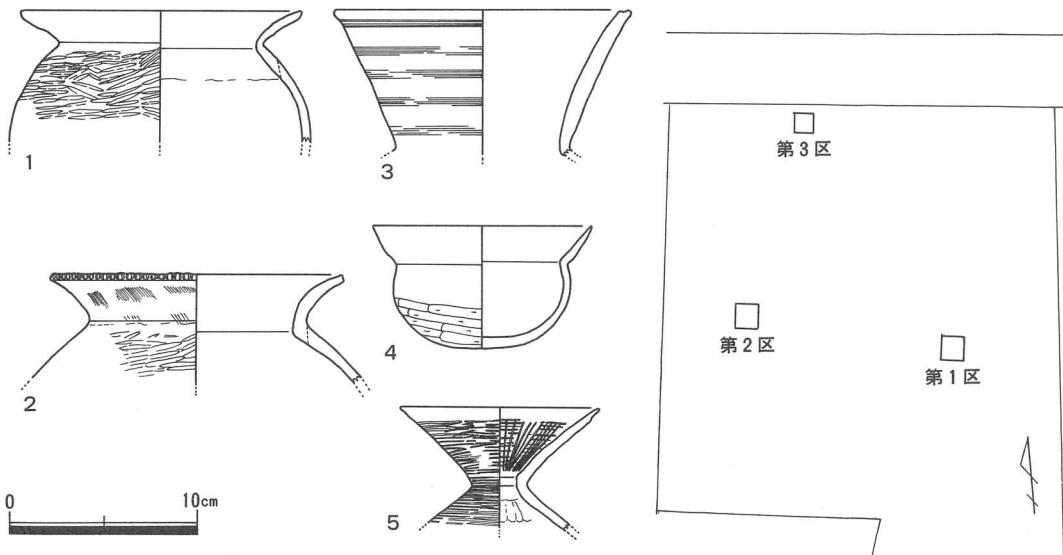
7. 備考 今回は浄化槽部分のみの調査ということもあって遺構の性格等は不明であったが、恩智遺跡の弥生時代集落に東への拡がりを確認できた。付近は旧村落の内であり、今後も注意を要すると思われる。 (道)

6. 久宝寺遺跡（93-054）の調査

1. 調査地 南久宝寺1丁目40番地
2. 調査期間 平成5年7月6日
3. 調査契機 遊戯場建設
4. 調査方法 3m×3mの調査区を2ヵ所設定し、各々2~3mまで掘削、調査を行った。また、一部開発工事に伴う下水道工事のピット（第3区と仮称）においても断面観察を実施した。
5. 基本層序 第1区・第2区では地表下1.8m前後で植物遺体を含む粘土層がみられ、この下部、地表下2.1m前後の暗緑灰色粘土～暗灰色粘土で庄内式期の遺物が出土している。第3区では地表下1.3m前後で湧水層である灰白色細砂があり、約1mの厚さで堆積している。この下部層である暗灰色砂混粘土よりV様式後半～庄内式期の遺物が出土している。

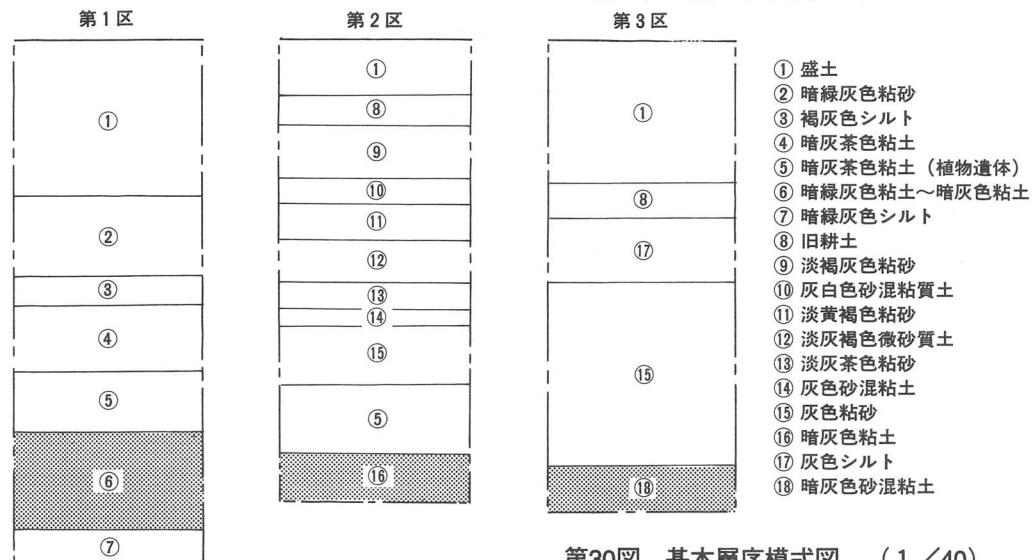


第27図 調査地周辺図（1/5000）



第28図 出土遺物実測図 (1/4)

第29図 調査区設定図 (1/1000)



第30図 基本層序模式図 (1/40)

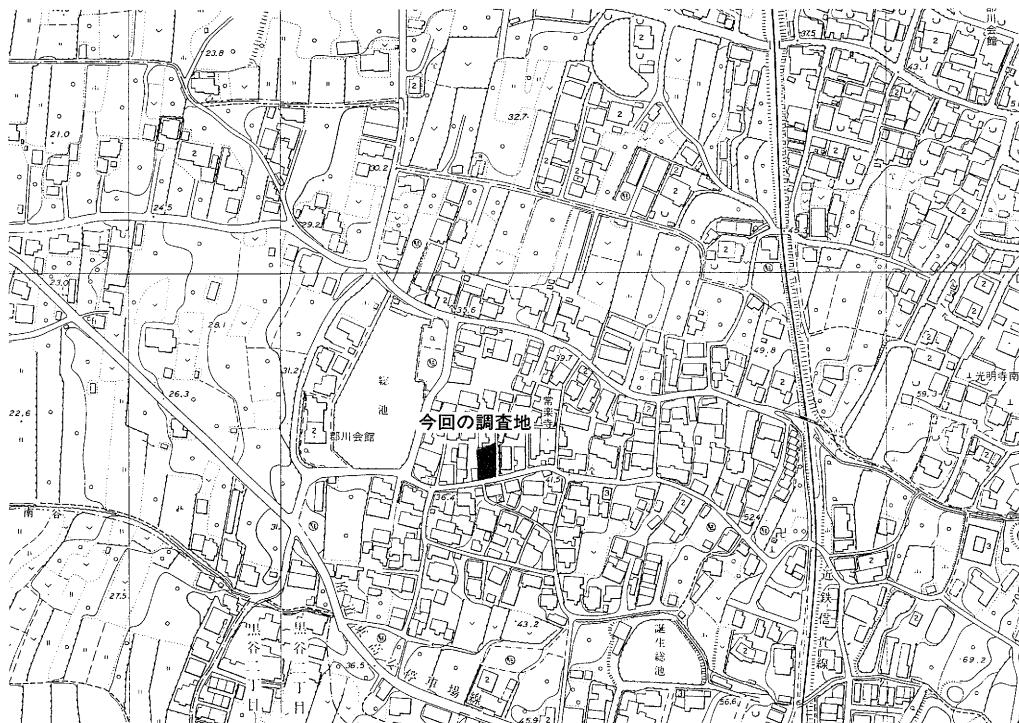
6. 遺構・遺物

第1・2区では破片が多く図化できるものはなかった。ここでは第3区の暗灰色砂混粘土より出土した遺物を掲げておく。(1・2)はV様式系の甕でいずれも淡乳灰色を呈し、1mm前後の砂粒を多く含む。(2)は口縁端部にキザミメを施し、口縁から頸部にかけてはハケメが残る。摂津産。

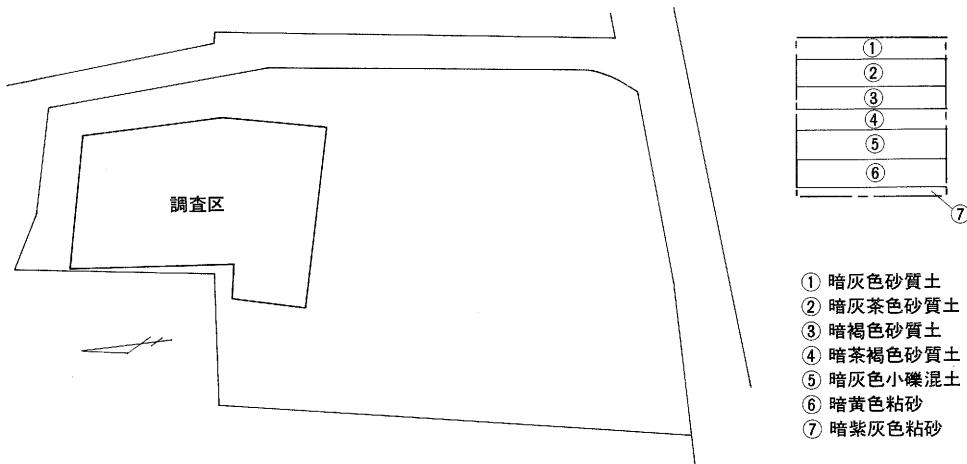
(3)は直口壺の口縁部で口径(反転)15.4cmで、淡茶灰色を呈する。(4)は小型壺で淡乳橙色を呈し、下半部にヘラケズリを施す。(5)は小型の器台で、口径10.4cm、淡橙褐色を呈し、内外面に細かいヘラケズリを施す。出土遺物はいずれも布留式古相に比定できるものである。(道)

7. 郡川遺跡（93-075）の調査

1. 調査地 郡川5丁目160,161,163の一部
2. 調査期間 平成5年7月20日、8月4,5,6,9,11日
3. 調査契機 共同住宅建設
4. 調査方法 事業計画地に1.5m×1.5mの調査区を2ヵ所設定し、地表下1.4～1.5mまで掘削、調査した。その結果、地表下0.35m～0.5mで土師器小皿、瓦器が多量に出土した。また地表下0.8～1.1mでは弥生後期の遺物が出土した。このため申請者と協議し、日を改めて、調査区を25m×15mに拡張することになった。
5. 基本層序 ①層は表土、②層・③層は近世の遺物包含層になる。④層は13世紀から14世紀にかけての遺物包含層であり、⑤層の暗茶褐色砂質土が遺構面になる。⑥層が弥生後期の遺物包含層である。⑦層では遺物は確認していない。

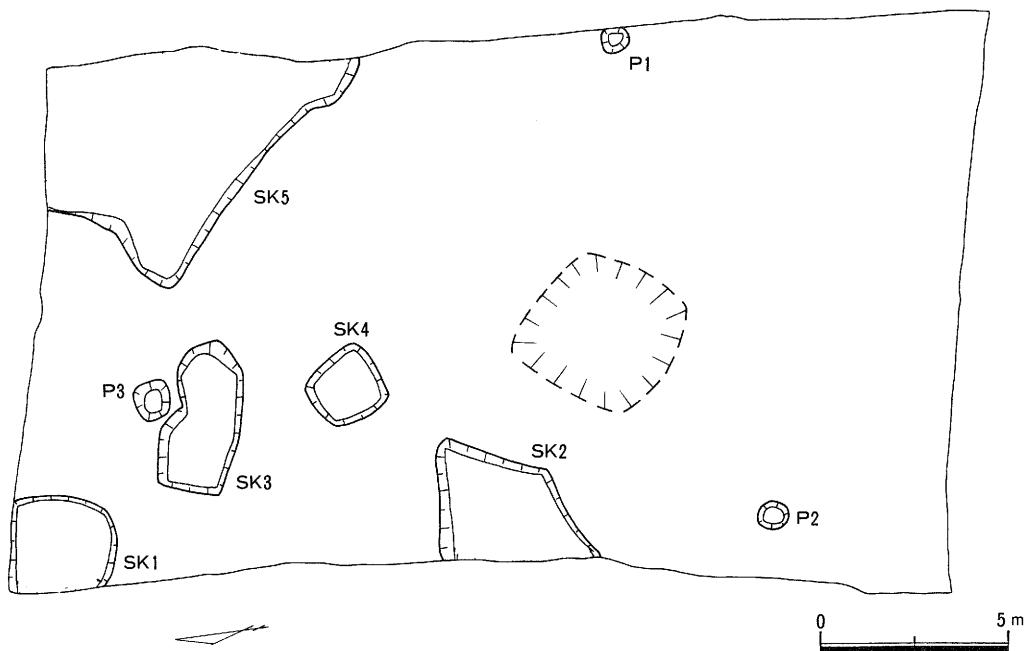


第17図 調査地周辺図（1/5000）



第32図 調査区設定図 (1/400)

第33図 基本層序模式図 (1/40)



第34図 調査区平面図 (1/200)

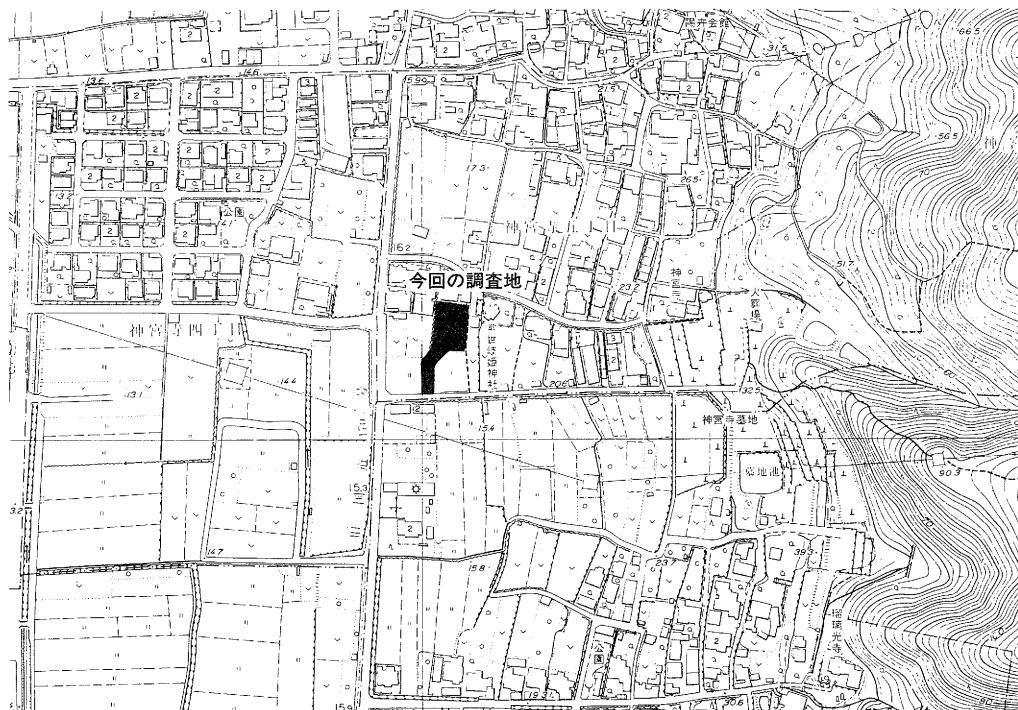
6. 遺構・遺物

近世では土坑2基（SK1・2）を検出している。いずれも磁器の碎片や瓦片が出土している。中世ではピットを3基（SP1～3）と土坑を3基（SK3・4）を検出している。時にSK3では土師質の羽釜・土師器皿・瓦器椀など14世紀中葉～後半に比定できる遺物が多量に出土している。

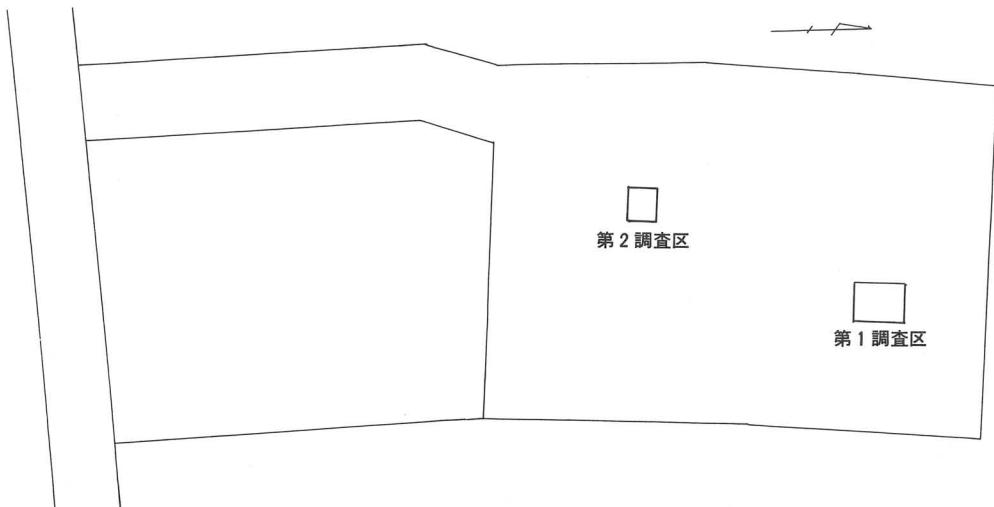
(道)

8. 神宮寺遺跡（92-307）の調査

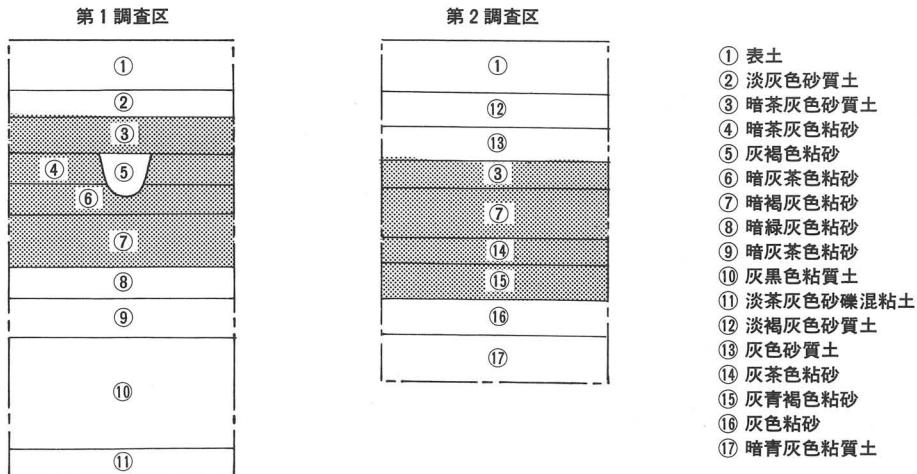
1. 調査地 神宮寺5丁目179の一部、180
2. 調査期間 平成5年3月5日
3. 調査契機 共同住宅建設
4. 調査方法 事業計画地の北側に2m×2.25mの第1調査区を、南側に2m×2mの第2調査区を設定し、GL-1.75m～2.3mまで掘削、調査した。
5. 基本層序 第1調査区—現況は耕作地として使用されている。遺物はGL-0.4mの暗茶灰色粘砂質土からみられ、GL-0.6mの暗茶灰色粘砂上面では円筒埴輪片が2ヵ所で固まって出土しており、またピット2基を検出しているこの暗茶灰色粘砂と下部層である暗灰茶色粘砂では埴輪に混じって須恵器の高杯片や弥生土器片を含んでおり、古墳時代後期の包含層とみられる。そしてGL-0.92mの暗褐灰色粘砂（層厚約0.25m）が弥生時代の遺物包含層となり、暗緑灰粘砂上面が弥生時代遺構面になるとみられる。この暗緑灰粘砂以下では遺物は確認できなかった。



第35図 調査地周辺図（1/5000）



第36図 調査区設定図 (1/600)



第37図 基本層序模式図 (1/40)

第2調査区 - GL - 0.3 m の淡褐灰色砂質土では瓦器、羽釜などみられ中世の包含層が存在する。GL - 0.48 m の灰色砂質土と下部の暗茶灰色砂質土では土師器、須恵器などを含む古墳時代後期の包含層になる。そして GL - 0.76 m の暗褐灰色粘砂（層厚0.27 m）では最も多くの遺物が出土している。遺物は弥生時代後期の高杯、甕などである。この下部の灰茶色粘砂と灰青褐色粘砂は第1調査区ではみられず、遺構の埋土を掘削している可能性がある。

6. 遺構・遺物

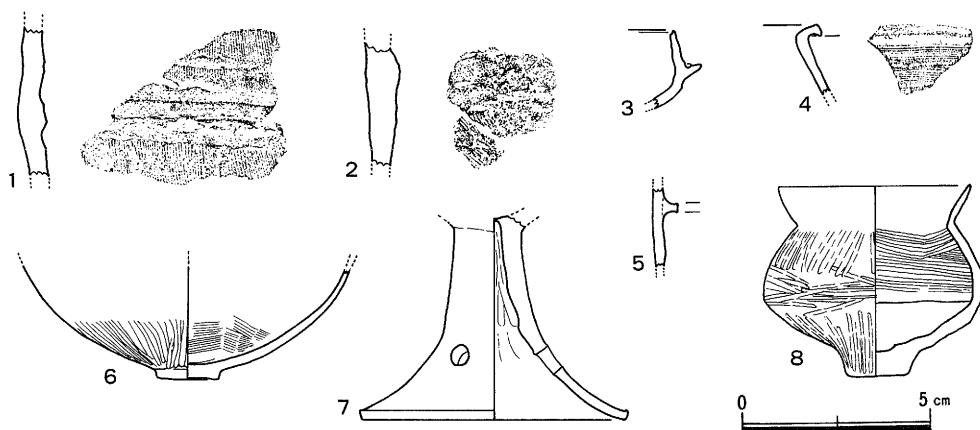
(1～5) は第1調査区から、(6～8) は第2調査区から出土した。(1, 2) は埴輪片で、タガは不整形で突出度が低く、外面調整が

1次調整のみで川西編年のV期に相当し6世紀前葉に比定できる。(3)は須恵器の杯身でTK23~MT15に相当しやはり6世紀前半に位置付けられよう。(4)は弥生時代中期の小型の壺口縁部で、赤褐色を呈し、(7本/1条)の櫛描文が2条施されている。(5)はタガ状の突出をもつ遺物であるが、厚みがなく硬質である。外面はナデ、内面はハケ後ナデで仕上げている。(6)は壺の下半部で茶灰色を呈し、内面はハケナデ、外面はミガキを施して器壁を薄く仕上げている。(7)は高杯脚部で中空で3孔を穿つ。灰白色を呈す。(8)は小型の甕で外面は3分割のヘラミガキを行い、内面は下半部はナデ、中部はハケナデをほどこしている。暗灰褐色を呈す。(6~8)は畿内V様式後半に位置付けられる。

7. 備考

本調査では古墳時代後期と弥生時代の遺構・遺物を確認した。古墳時代では6世紀の埴輪や土器が出土していることから、調査地周辺に古墳が遺存していた可能性を示唆している。また弥生時代では後期の遺物が多く出土しており、完形の土器がみられることから集落に関連する遺構があると推定される。これまで神宮寺遺跡では弥生時代の明確な集落は確認されておらず、今回の調査ではその可能性を示す遺物が見つかったことは大きな成果である。

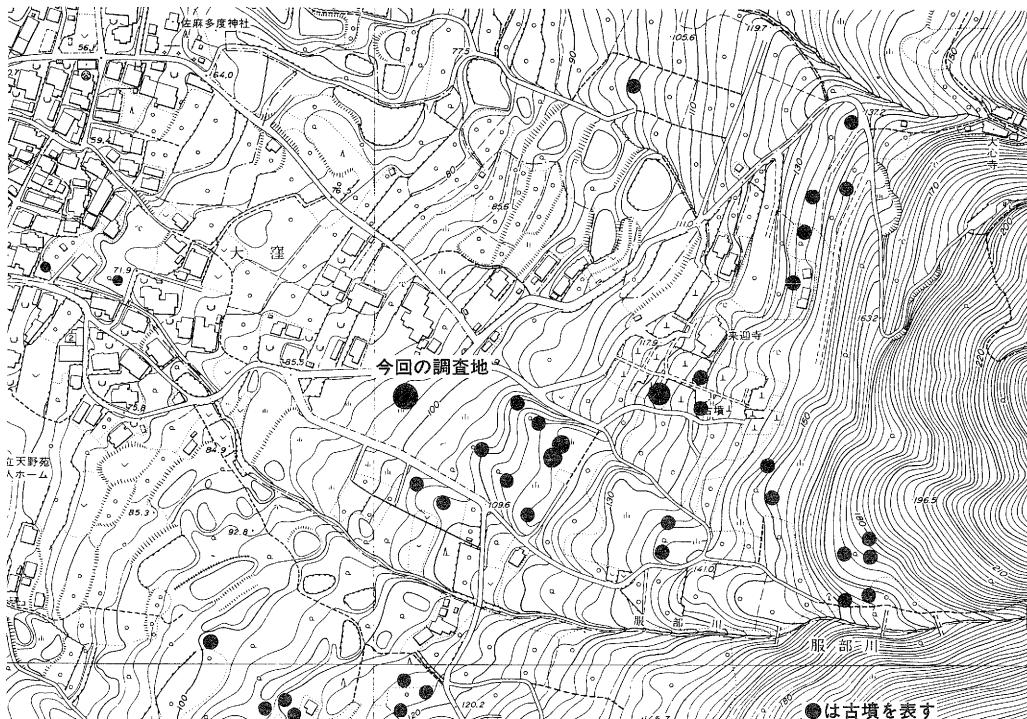
(道)



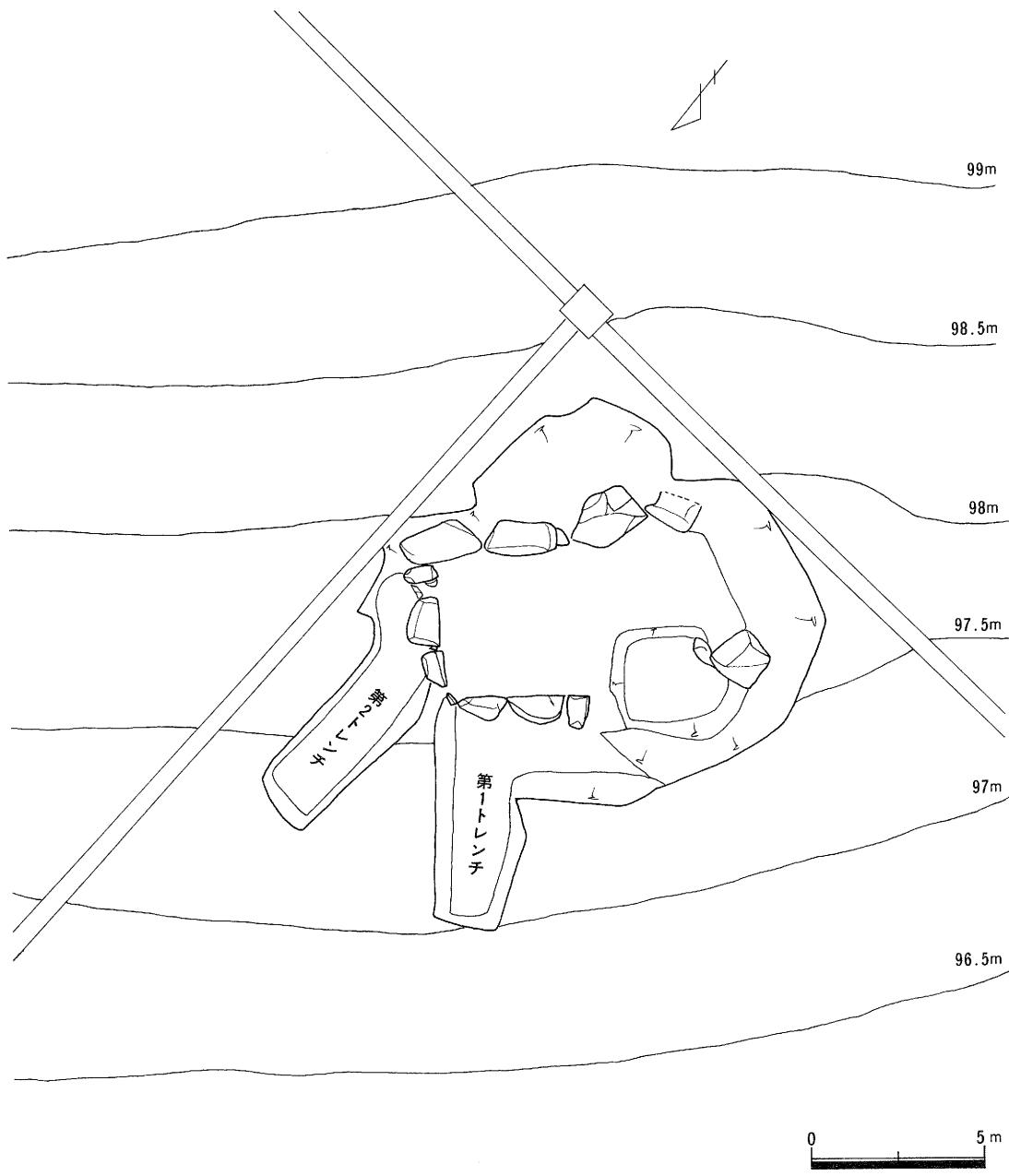
第38図 出土遺物実測図 (1/4)

9. 高安古墳群（93-70～73）の調査

1. 調査地 山畠407-2、1260-2
2. 調査期間 平成5年5月28日～6月17日
3. 調査契機 専用住宅建設
4. 調査方法 調査地は高安山の標高97m付近に位置している。周辺一帯は高安古墳群とよばれる古墳時中期末から終末期にかけての群集墳が分布している。本調査地は昭和40年代に既に開発工事が行われており、なだらかなスロープ状の更地になっていたが、周辺には8基の古墳が確認され、また調査地においても古墳に使用されていたと思われる石材が散乱していた。このような状況から墳丘は認められないが石室は残存している可能性が考えられるため、およそ1m幅のトレンチを東西方向に2本平行に設定し、掘削を実施した。その結果南側のトレンチで石室の一部確認したためその周辺の拡張を行い、石室の検出に努めた。また西壁と奥壁の裏込めの状態と失われた墳丘を確認するためにトレンチを2本設定した。



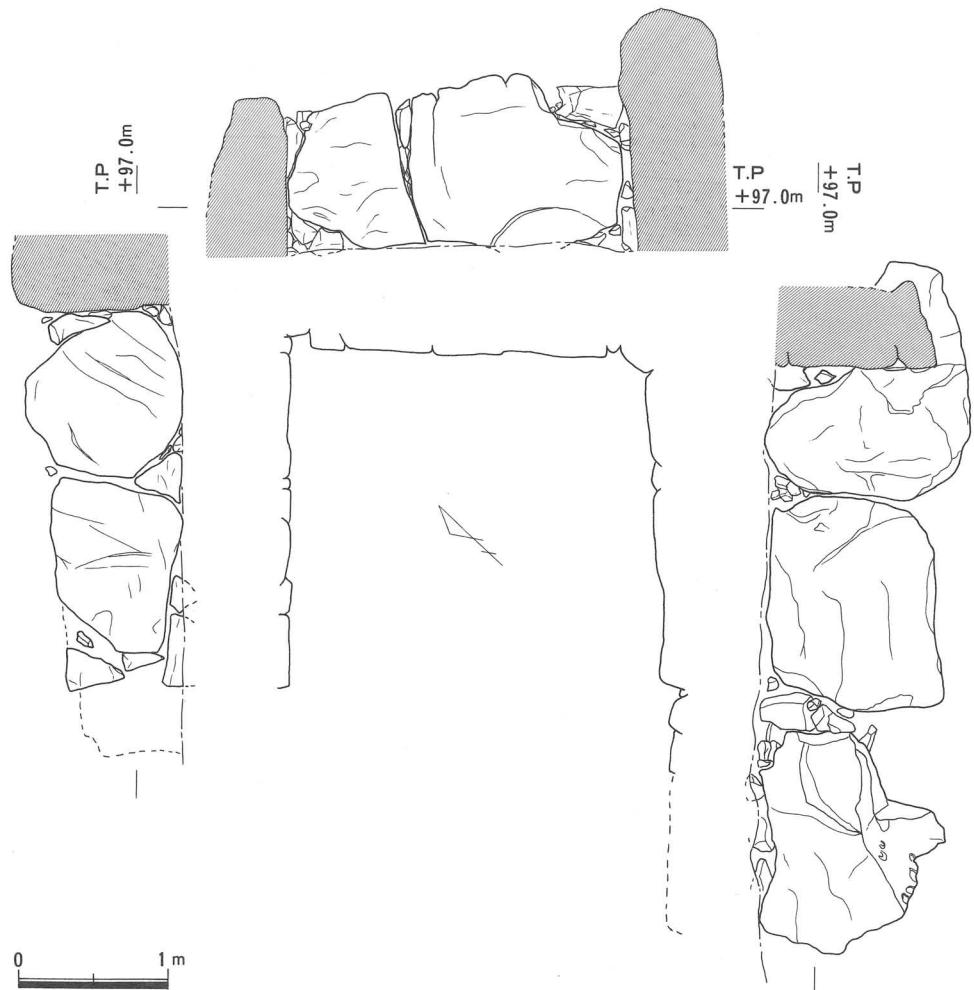
第23図 調査地周辺図（1/5000）



第25図 付近地形図（1／800）

5. 周辺の古墳 について

高安古墳群は府下最大規模を誇る群集墳であり、奈良と大阪を隔てる生駒山の西麓に築かれている。古墳は北端の楽音寺から南端の恩智に至る斜面に分布しており、中心は高安千塚と呼ばれている。今回の調査地はその千塚の一部にあたる。高安千塚は服部川周辺に最も密集しているが、尾根筋毎に一つの単位が想定される状況にあり、調査地は服部川の



第41図 石室平面プラン及び立面図（1／50）

最密集地から川筋をはさんで南約160mに位置する支群に包括されるとみられる。現在確認されている古墳で大まかなグルーピングを行うとこの支群はおよそ20基の古墳で構成される。

6. 調査前の状態

調査地は扇状地のなだらかなスロープになっている。昭和30年代には畑として利用されていたが、40年代に開発工事が行われ宅地と利用するために更地にされたようで既にU字溝が設置されていた。八尾市が昭和60年に写真測量から作製した1/2500の地図ではこの地点の等高線に高まりをみることができる。しかし現地では石材は散乱していたが墳丘らしき高まりは全くみられなかった。僅かに奥壁の一部が20cm程度地表に露出していたのみであり、その回りにはU字溝がT字状に巡らされていた。

7. 石室内の状況 天井石は既に失われており、石室内には土砂が堆積していた。そのほとんどは開発工事時に埋められたと思われる。礫とともに須恵器や土師器の碎片が若干含まれている。床面から約30cmは古墳が遺存していた時に流入したとみられる礫の全く混じらない暗黄茶色の微砂質土が堆積していた。この土層からも遺物は碎片が出土する程度であった。奥壁付近の床面直上では炭化物がみられたが、石棺及び副葬品を確認することはできなかった

8. 石室の構造 石室は横穴式石室である。開発工事やそれ以前の石の抜き取りによってかなりの破壊を受けており、石室は羨道部はみられず玄室の基底部のみが遺存している状態であった。主軸は南西方向（W-44°-S）に持つもので袖部の有無に関しても既に石材が原位置を保っておらず不明である。奥壁は2石、右側壁は2石、左側壁は3石（内1石は原位置を保っていない）の巨石が残存している。

石室の規模は検出部分で長さ2.6m～3m、奥壁の幅は2.3m、玄室最大幅は2.5mを測る。これから玄室の平面形は長方形あるいは正方形を呈すると推定される。床面は礫敷ではなく、小礫を混ぜた暗茶灰色粘砂が固く締まった状態であった。

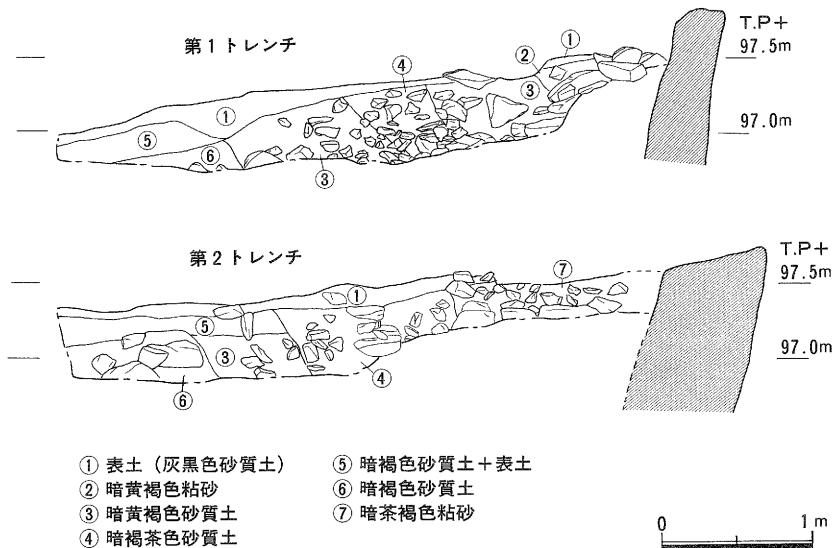
基底部はいずれも上面が平坦に保たれているがこれは小さめの石を巨石の下に噛ませることによって成っている。また奥壁と右側壁は基底部上面はほぼ同じレベルになっているが、左側壁はそれよりも約30cm意図的に高く配置されていることが分かる。なお右側壁が谷側に、左側壁が山側に当たる。内部は石の平坦面を石室内側に持ってきており、大きな凹凸ができるないようにしている。これは図版2・3を参照していただきたい。また右側壁の羨道部寄りにある石は下部に石を組み合わせているのではなく、暗茶灰色砂質土を盛ってこの位置を保っている。（第42・43図のこの石を取り囲む破線の部分がそれである。）これは既に周辺の石が抜き取られたためにこのようになったのか、築造時からこのようであったかが問題であるが、ここでは築造時の状態としておきたい。なぜなら、第1に右側壁の他の2基の石とレベルのうえで大きな破綻を見いだせず、上面も平坦面を保つようにされている。第2に他の2基の石と同様に周囲に裏込め配している。以上の2点からである。

9. 裏込めの状況 右側壁は検出部分のすべてで、奥壁裏側は掘削に制約があったが少な



第42図 石室検出状況図（1／50）

くとも約1／2については裏込めに石を用いていることが判明した。このためその状況を確認するため、右側壁の裏に第1トレーナーを、奥壁裏に第2トレーナーを設定した。その結果、石壁の背後には長軸40cm、短軸30cm、幅10cm前後の偏平な石を階段状に重ねる様に積み上げ、隙間にはやや小振りな礫を用いて補強していた。また石と石を固定するためにその間にセメントの如く暗黄褐色～茶褐色粘砂や暗黄褐色砂質土を詰め安定さ



第43図 第1、2トレンチ土層断面図（1／40）

せていた。このような裏込め石は石室から離れるにしたがい状況が変化し、大きな偏平な石を使用せず、拳大の礫を暗褐茶色～暗褐色砂質土に混入するようになる。そしてさらに暗褐色砂質土を用いて裏込めを行い、墳丘を形成している。なお左側壁では裏込めに石は使用されていない。昭和60年度に当教育委員会で発掘調査した垣内1～3号墳においても黄褐色系の土を用いて裏込めをしており、その共通性を見いだすことができ古墳築造の方法、あるいは集団の成り立ちを考える上で興味深い結果となった。

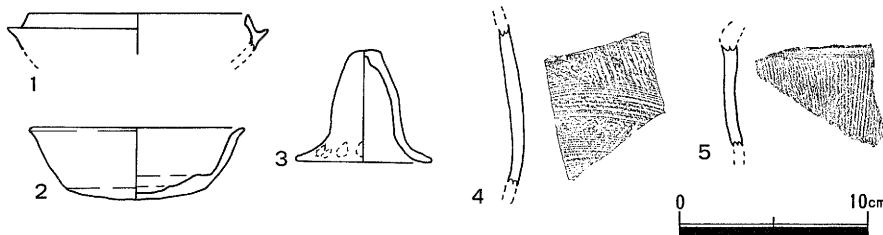
10. 出土遺物

徹底的に盗掘あるいは破壊を受けており、副葬品は皆無であった。また土器についても碎片ばかりであり、まとまったものはなかった。ここでは図化できた5点の土器を挙げておく。（3）を除いて石室内の流入土から出土したものである。

（1）須恵器の杯身で口径（反転）11.7cmで、立ち上がりは低くやや内傾している。TK43～TK217の範疇に属する。

（2）須恵器の杯Cで口径（反転）11.2cm、体部から口縁部にかけては外上方にのびやや外反し端部は丸い。底部は平らに近い。TK217～MT21に属する。

（3）用途不明の土師質の遺物で、奥壁と左側壁の接点部分に先端部を突っ込む様な状態で出土した。完形で、色調は茶褐色を呈し、焼成是非



第44図 出土遺物実測図（1／4）

常に堅致である。やや丸みを帯びた先端部より下外方に下ったのち裾部で水平に開く。裾部に指壓さえが残り、他の部分はナデである。

(4) 須恵器の甕の体部で、平行タタキを行った後にカキ目調整を施している。

(5) 土師器の甕の口頸部で、外面にハケメ調整を施している。

さてこれらの遺物の時期的位置づけであるが、2種類の杯が存在することによってそのおおまかな時期が比定できる。前述しているように(1)はTK43～TK217に、(2)はTK217～MT21に比定できることから7世紀前半から中葉を与えることができる。しかし前述しているように流入土出土の遺物であり、これがそのまま古墳の築造年代あるいは埋葬年代と考えることが妥当ではないが、周辺の古墳をも含めた築造及び埋葬年代を考える上での指針となるものであろう。

11. まとめ

今回は専用住宅建築に伴う緊急調査ということで、補助員諸氏によつて掘削を実施した。そのため現場での調査・検討が十分には行えなかつたが、それでも高安古墳群の形成を考えるうえで僅かでも材料となると思われる。高安古墳群は個人あるいは団体により分布調査が行われており、大正年間年に岩本文一氏は500基以上の古墳を確認したといわれている。しかし戦後に行われたいくつかの踏査では半壊あるいは全壊を含めても200基前後とその1/2以下に激減している。

本古墳も既に墳丘が削られていたため、その正確な大きさは分からぬ。しかし、トレントの土層断面から半径5.75 m以上の墳丘に復元できる。この古墳の周辺に現存する7基の古墳の直径はおよそ6.95 m～17.6 mで平均12.1 mである。これから墳丘径はこの支群の平均あるいは平均以上の墳丘径値を示している。平面形は確認されていないものも多く、比較の範囲を拡大し、この尾根筋の古墳のグループで検討する。周辺の古墳で玄室幅のわかる古墳は20基中11基で最低は120 cm、最大は210 cmで、

平均175.5 cmである。玄室長は20基中10基がわかつており最低335 cm、最大470 cm、平均379.5 cmである。本古墳は玄室長の正確な数値は不明だが300 cm以上とみられ、幅においては最も大きい250 cmである。このように玄室幅のみに限れば本古墳はこのグループの中核的な存在であるといえよう。

高安古墳群の総数は年々減ってきてている。現在八尾市教育委員会では昭和30年代に沢井浩三氏が行った踏査資料をもとに分布調査を実施している。その結果30年代に遺存していた古墳が半壊あるいは全壊していることがしばしばある。今回調査した古墳も195号墳という名称を残してそのような一つになってしまった。今後ますます増加するとみられる東部山麓の開発に対して抜本的な対策が必要であろう。 (道)

〔付論〕195号墳の石材について

奥田 尚

1. はじめに

古墳の玄室の基底石のみが観察できた。いずれも表面が磨滅し、角が少しとれた谷川に点在するような石である。自然石の平坦面を巧みに利用しており、且つ、石と石の噛み合わせ方も一段しか残存しないが、みごとである。一部の石に矢穴が残るものもあり、古墳の石が再利用されていたことが伺える。矢穴は石の目に沿って数個あけられている。城郭の築城時の矢穴のように一列に規則正しくあけられているものではない。

使用されている石材を裸眼で観察した。

2. 石材の種類

使用石材の石種は角閃石閃緑岩、片麻状黒雲母花崗岩、片麻状斑状黒雲母花崗岩である。片麻状黒雲母花崗岩の長石がよく発達すれば片麻状斑状黒雲母花崗岩になると考えられる。

角閃石閃緑岩：色は暗灰色で、粒状の黒雲母が目立つ。長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径2～5mm、量が多い。黒雲母は黒色粒状、粒径が2～5mm、量が多い、角閃石は、黒色粒状、粒径が2～4mm、量が僅かである。

片麻状黒雲母花崗岩：色は灰白色で黒と白の縞模様が顕著である。黒色部にはレンズ状に細粒の黒雲母が集合している。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1～1.5mm、量が多い。長石は白色、粒径が0.5～1.5mm、量が多い。黒雲母は黒色板状、粒径が0.5mm以下で、量が多い。

片麻状斑状黒雲母花崗岩：色は暗灰色～灰色である。前述の縞模様をなす片麻状黒雲母花崗岩の長石が大きく発達して斑晶をなしている。黒雲母はレンズ状に集合している。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1.5～2mm、量が中である。黒雲母は黒色板状で、粒径が0.5mm以下、量が多い。長石は白色で斑晶をなすものと基質部のものとがある。斑晶をなす長石は粒径が3～5mmで量が中である。基質部の長石は粒径が1～2mm、量が中である。

3. 石材の採石地

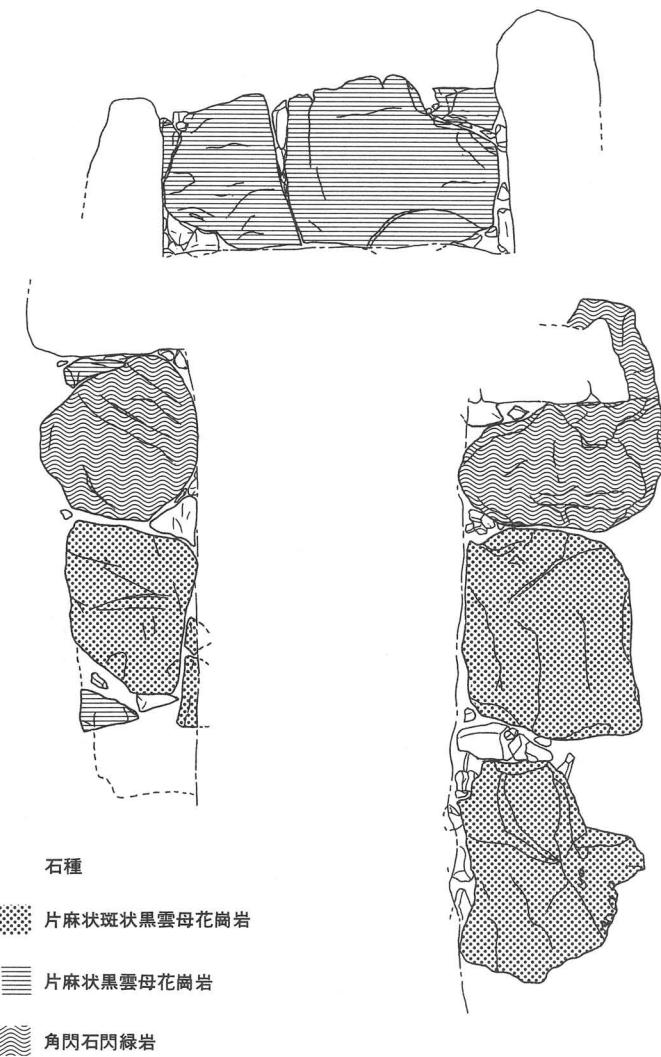
古墳の造営地付近で石材を得ようとすれば、造営地付近から東方の生駒山地が近距離である。生駒山地の岩石分布は場所によりかなり変化がある。水呑地蔵尊付近では弱片麻状を示す黒雲母が少ない黒雲母花崗

麻状黒雲母花崗岩が分布する。頂上部の一元の宮付近には黒雲母が多い閃緑岩が分布する。また閃緑岩の周辺部に斑晶をなす片麻状黒雲母花崗岩が分布する。

石室に使用されている石材の石種は角閃石閃緑岩、片麻状黒雲母花崗岩、片麻状斑状黒雲母花崗岩である。角閃石閃緑岩は中粒で黒雲母が多いことから一元の宮付近に分布する角閃石閃緑岩に、片麻状黒雲母花崗岩は縞状をなし、細粒であることから大窪から服部川にかけて分布する片麻状黒雲母花崗岩に、片麻状斑状黒雲母花崗岩は角閃石閃緑岩の周辺の岩相の岩石にそれぞれ岩相的に酷似する。これらの石種の礫は当古墳東方の山地の谷に見られる。石材の表面が谷川や川原の石の様相を示すことから谷に転がる礫を探取したと推定される。当古墳東方の谷付近が石材の採取地と推定される。

4. おわりに

楽音寺の大石古墳の石室材には主として斑櫛岩の石材が使用され、寺池の古墳の石材には斑状黒雲母花崗岩が使用され、法藏寺付近の古墳には縞状をなす黒雲母花崗岩が使用されている。このように生駒山地の山麓に分布する古墳の石材は各々地域により石種が異なり、岩石分布にはほぼ対応がつく。古墳に使用されている石室材は石材となりうる礫が分布する近距離の地点から運ばれていることが推測できる。今回の古墳に使用されている石材の石種は3種類であり、これらの石種は東方の谷に見られる。古墳の造営により少ない労力で構築していたことが伺える。



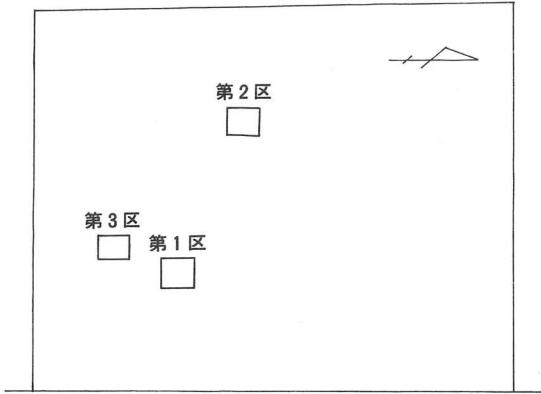
第45図 石材種別図 (1 / 50)

10. 東郷遺跡（93-278）の調査

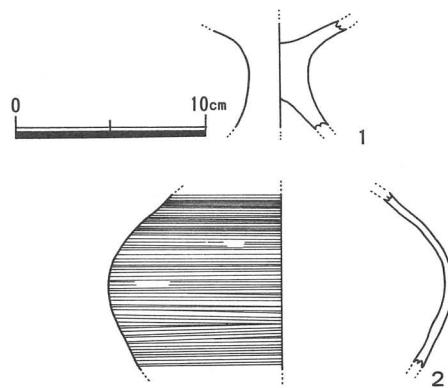
1. 調査地 荘内町1丁目
2. 調査期間 平成5年8月30日
3. 調査契機 共同住宅建設
4. 調査方法 事業計画地に2.5m×2.5mの調査区を3ヵ所設定し、地表下2.7m～3mまで掘削、調査した。なお第3区については攪乱されていたためGL-1.4mで掘削を中止した。
5. 基本層序 第1区—GL-1.2m前後の褐灰色粘質土～褐灰色粘質シルトから灰褐色粘質土の約0.45mの厚さの土層で古墳時代前期の遺物が出土している。
第2区—この調査区では古墳時代前期の包含層は確認することはできなかつたが、GL-1.1m前後の灰白色粘質土より須恵器片が出土している。
6. 遺構・遺物 前述したように本調査地では古墳時代前期遺物包含層と須恵器を含む土層を確認した。（1）は高杯で脚部が杯部からゆるやかに開くものである。（2）は須恵器壺で体部にカキメを施している。（道）



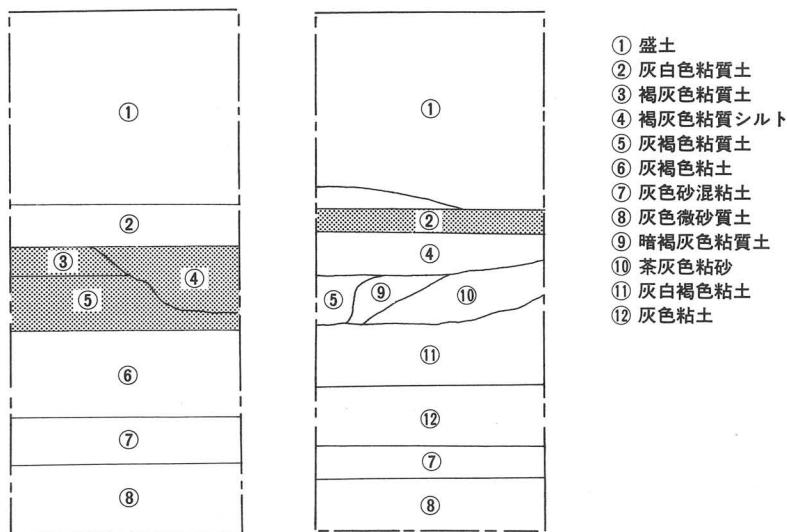
第46図 調査地周辺図（1/5000）



第47図 調査区設定図 (1/600)



第48図 出土遺物実測図 (1/4)



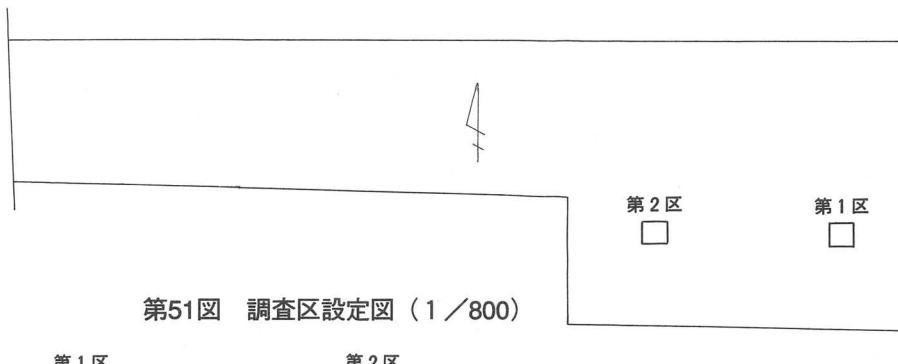
第49図 基本層序模式図 (1/40)

11. 東郷遺跡（93-279）の調査

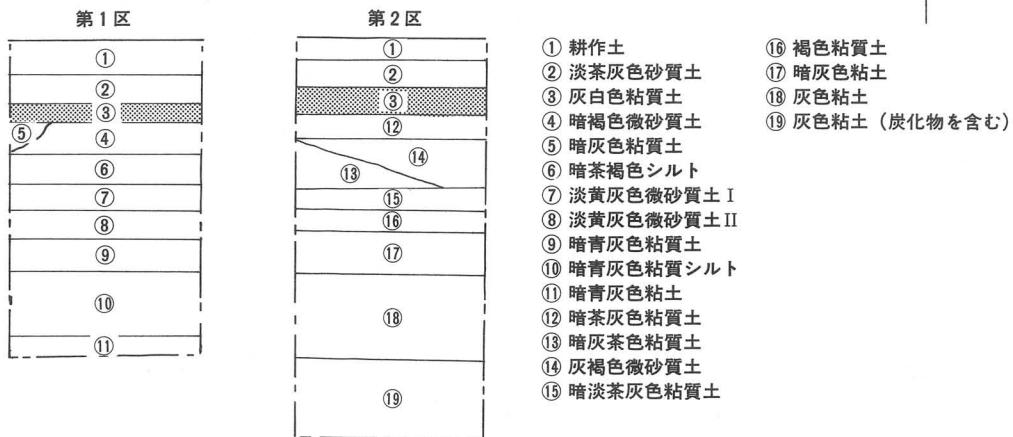
1. 調査地 荘内町2丁目15~18
2. 調査期間 平成5年8月31日
3. 調査契機 共同住宅建設
4. 調査方法 $2.5 \times 2.5\text{ m}$ の調査区を2箇所設定し、重機と人力を併用して地表下2mまで掘削を行った。
5. 基本層序 現況は道路面より0.6m下がっており、耕作地として使用されていた。遺物包含層は地表下0.3~0.35mの灰白色粘質土で、0.8m~0.15mの厚さで堆積している。この下部層上面が第1区では遺構検出面となり、第2区では中世の水田相当層となる。いずれの調査区でも地表下約1m以下では暗灰色~青灰色の粘土が堆積していたが、遺物等は出土していない。
6. 遺構・遺物 第1区－暗褐色微砂質土上面でT字形を呈する溝を検出する。最大幅1.16m、深さ0.13mを測る。



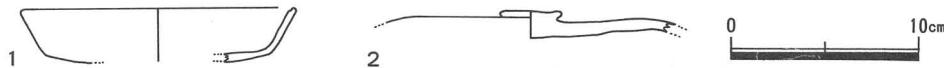
第50図 調査地周辺図（1/5000）



第51図 調査区設定図 (1/800)



第52図 基本層序模式図 (1/40)



第53図 出土遺物実測図 (1/4)

第2区—地表下0.25 mで遺物包含層は確認するが、第1区でみられた暗褐色微砂質土がみられず、暗茶褐色粘質土が堆積している。

出土遺物は瓦器、土師器、須恵器などが出土している。時期幅は大きく古墳時代から鎌倉時代にいたるものである。ここでは（1）土師器杯と（2）須恵器杯蓋を挙げておく。（1）は口径（反転）14.4 cm、器高2.8 cmを測る。（2）は偏平につまみが付くもので残存径（反転）15.2 cmを測る。いずれも8世紀に比定されよう。
(道)

12. 東郷遺跡（93-524）の調査

1. 調査地 桜ヶ丘3丁目45、49番

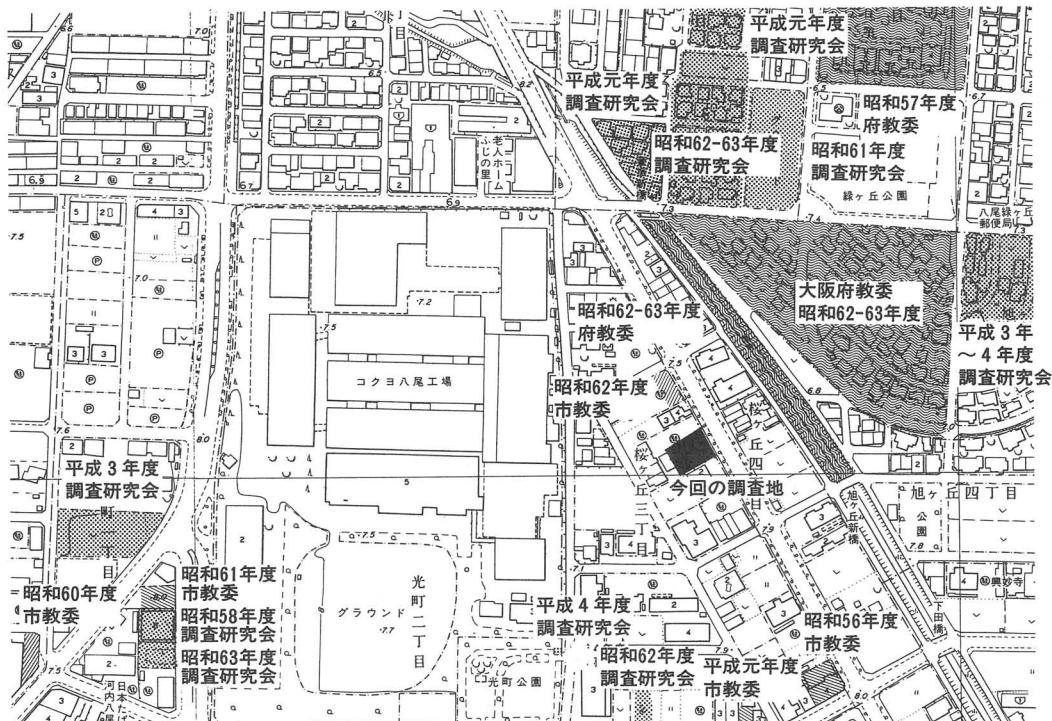
2. 調査期間 平成6年1月14日

3. 調査契機 共同住宅建設

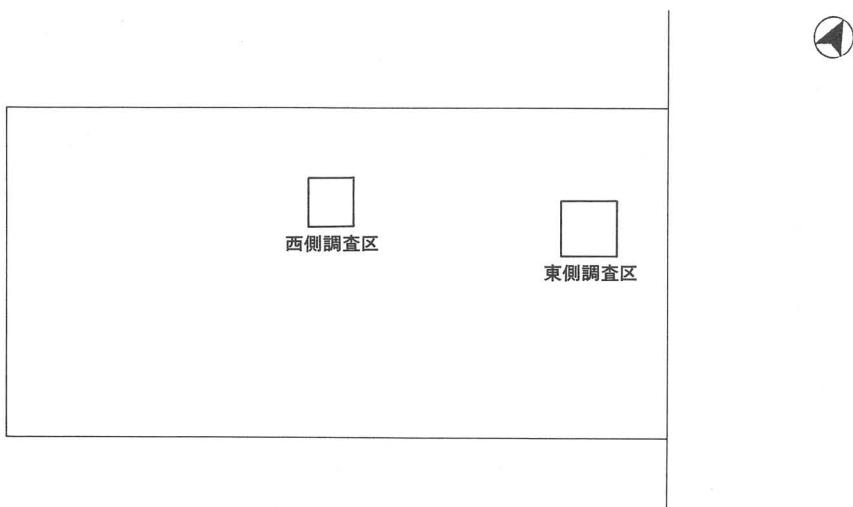
4. 調査方法 施工予定地の東側に約3m四方の調査区を、その西側に約2m四方の調査区を設定。地表下3.0m前後まで重機と人力を併用して掘削。

5. 調査概要 東側調査区では、地表下1.4m～1.84mで土師器片を含む灰白茶色粘砂層、暗灰白茶色小礫混粘砂層を確認した。また、地表下2.25m以下で庄内式土器小片、弥生式土器底部片を含む明灰色粗砂層を確認した。西側の調査区では地表下1.64m～1.92mで須恵器片、土師器片を含む明灰茶白色粘砂層を確認した。須恵器は6世紀前半頃に位置付けられるものである。この層が東側調査区で確認した包含層と対応する可能性がある。また、西側調査区では、地表下2.1m以下で灰白色粗砂層を確認した。

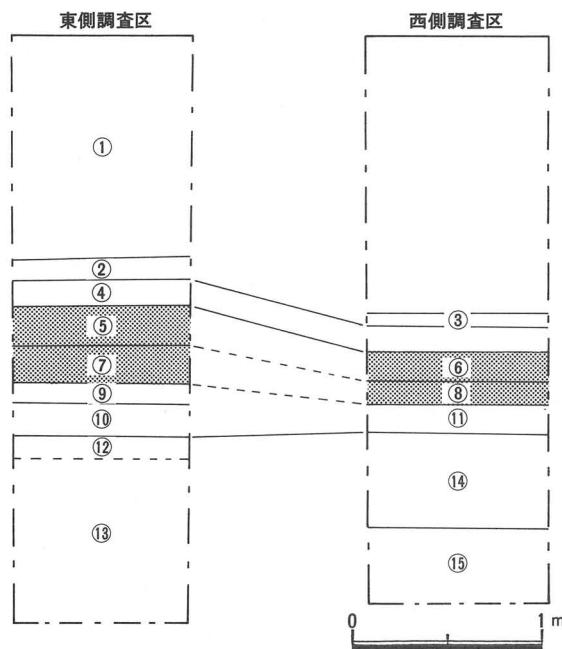
（吉田）



第54図 調査地周辺図 (1/5000)



第55図 調査区設定図 (1/400)



- ① 盛土
- ② 耕作土
- ③ 緑灰色粘砂層
- ④ 明灰茶色粘性砂層
- ⑤ 灰茶白粘砂層 (土師器片)
- ⑥ 明灰茶白粘砂 A 層
(古墳時代後期包含層)
- ⑦ 暗灰茶白色小礫混粘砂層 (土師器片)
- ⑧ 明灰茶白粘砂 B 層 (砂多い)
(古墳時代後期包含層)
- ⑨ 灰白褐色粘砂層
- ⑩ 灰色砂層
- ⑪ 灰茶色砂質土層
- ⑫ 灰紫色粗砂
- ⑬ 明灰色粗砂層
- ⑭ 灰色粗砂層
- ⑮ 明黃灰色粗砂層

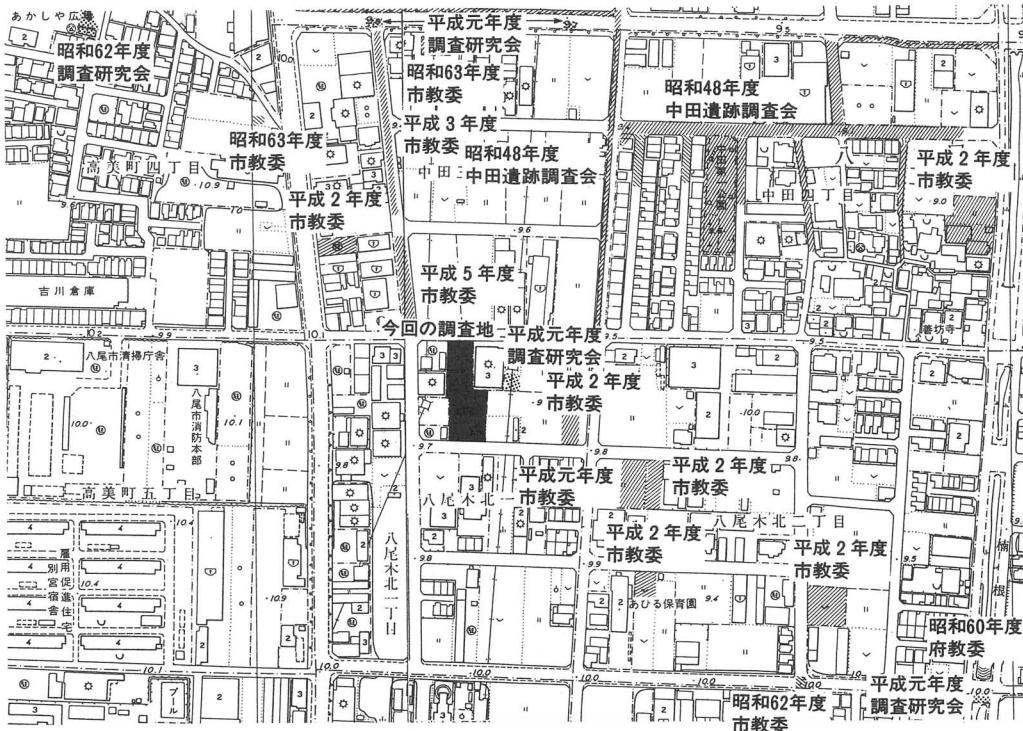
第56図 基本層序模式図 (1/40)

13、中田遺跡（92-645）の調査

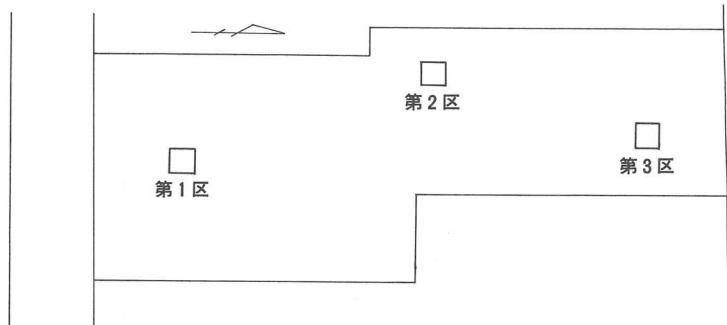
- 1.調査地 八尾木北1丁目33、34
- 2.調査期間 平成4年4月6日
- 3.調査契機 共同住宅及び倉庫建設
- 4.調査方法 2.5m×2.5mの調査区を3ヵ所設定し、各々約2mまで掘削し、遺構・遺物の有無を確認した。
- 5.基本層序 現況は水田として利用されており、道路面より0.6～0.7m低くなっている。

第1区－遺物は地表下約1mの暗灰色砂混粘質土、暗灰青色砂混粘質土、暗青灰色粘砂の3層で出土している。層厚約0.45mで、時期は布留式期である。

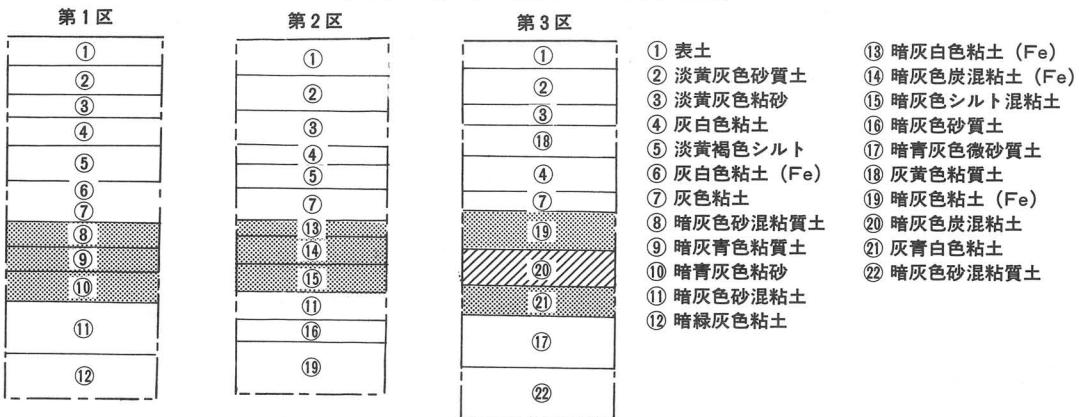
第2区－地表下0.95m前後の暗灰白色粘土（F_e）、暗灰色炭混粘土（F_e）、暗灰色シルト混粘土の3層で遺物が出土している。このうち



第57図 調査地周辺図（1/5000）



第58図 調査区設定図 (1/600)



第59図 基本層序模式図 (1/40)

暗灰色炭混粘土 (Fe) で遺構を検出している。また暗灰色シルト混粘土の下部層である暗灰色砂混粘土上面で炭化物を確認している。

第3区—地表下0.95 m前後の暗灰色粘土 (Fe) 以下3層で遺物が出土している。遺物は庄内式新相から布留式期に至るものである。このように第3区でも遺物・遺構がみられたが、後の調査では地表下1.1 m前後で、全容は明らかではないが方形状で一辺が4 m以上、深さ0.15 mの土坑を検出しておらず、本調査においてその土坑を掘削していたことが判明した。今回の調査では暗灰色炭混粘土層がその土坑の埋土であり、灰青白色粘土上面に炭化物がみられ、ここが底と推定される。また地表下1.5 mの暗青灰色シルト上面でも遺構を確認している。

6. 遺構・遺物

第1区では(1～4)の遺物が出土している。(2)が暗灰色砂混粘質土以外はすべて暗青灰色砂混粘質土から出土している。

(5～7)が第2区出土遺物である。ここでは暗灰色炭混粘土 (Fe) で南西への落ち込みを確認しており、布留式古相の甕(5)が出土して

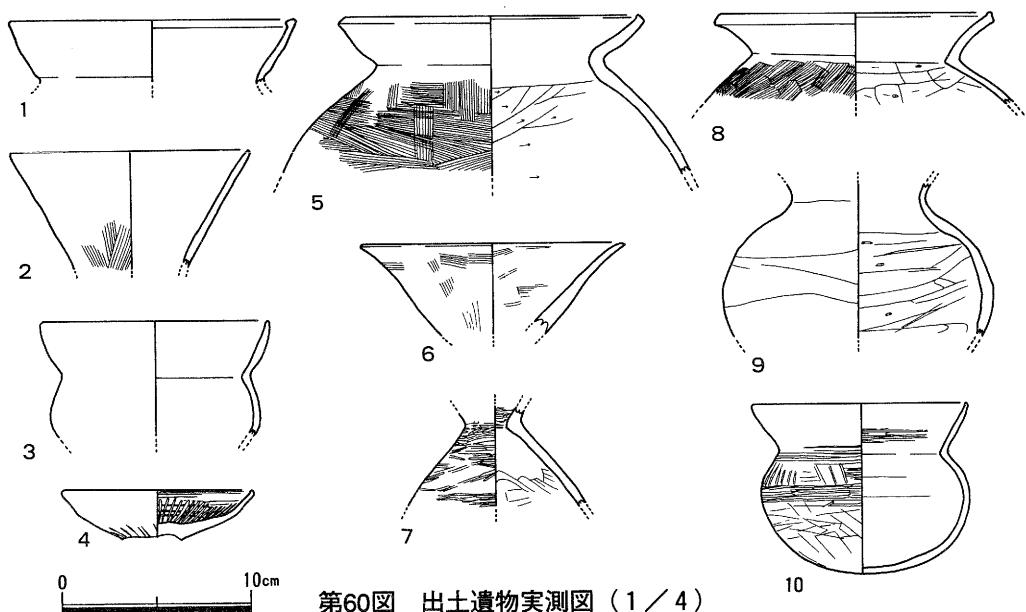
いる。

第3区は先述のように土坑のほぼ中心を掘削していたが、ここよりも遺物（8～10）が出土している。土坑の埋土と思われる暗灰色炭混粘土層から出土しているのは（8）の庄内甕である。また土坑の底と推定されるところで長辺16 cm、短边10.9 cm、厚さ1.2～1.7 cmの絹雲母片岩（図版-8）が出土している。これについて曙川小学校の奥田尚氏に鑑定していただいた。以下その結果を記述する。「白雲母（絹雲母）が1.5～2 mmに及ぶことから変成のかなり高い場所のものである。付近では紀伊の点紋帶の石であると考えられる。片理に沿って板状に割れ、断面は節理面で顕著に残っていることから露出する石を探石したのであろう。」またこの絹雲母片岩はこれまで中田遺跡でも数点確認されているが、その用途は不明である。（9・10）は灰青白色粘土から出土しており、小型丸底壺（10）より庄内式新相に位置付けられる。そして暗青灰色シルト上面で長径0.52m、短径0.36 m、深さ0.14 mの礫敷遺構を検出した。礫は川原石と思われる丸い石を用いて作られていた。

7. 備 考

今回の調査では布留式期の遺構を検出した。中田遺跡では庄内式新相の時期から布留式期にかけて集落の規模を拡大していることがこれまでの調査で判明しつつあるが、本調査もそれを裏付ける結果となった。

(消)

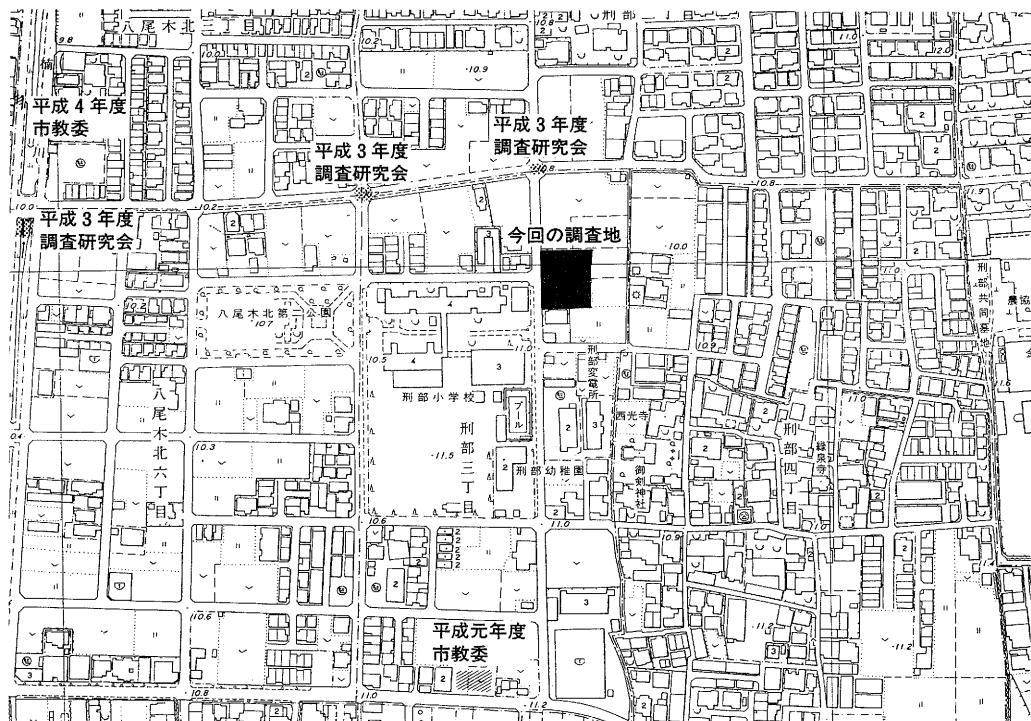


第60図 出土遺物実測図 (1/4)

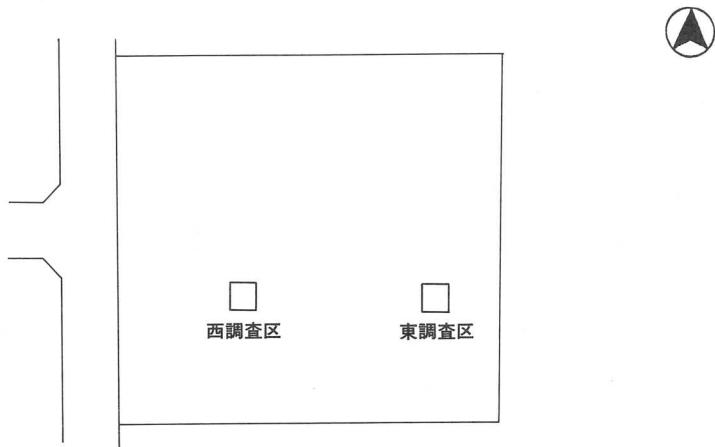
14. 中田遺跡（93-007）の調査

1. 調査地 刑部3丁目82-2
2. 調査期間 平成5年4月27日
3. 調査契機 共同住宅建設
4. 調査方法 約3m四方の調査区を施工予定地の西と東に2ヶ所設定し、地表下2.5m前後まで重機と人力を併用して掘削した。
5. 調査概要 東調査区では、地表下0.8m～1.1mの灰茶色粘土層他2層が、古墳時代後期の須恵器、瓦器片を含む層であることを確認した。西調査区では、これに対応する層を地表下0.85m～1.25mで確認した。また、西調査区では、さらにこの下の地表下1.6m～2.0mで古墳時代前期の包含層である褐色斑灰白色炭混粘土層を確認した。東調査区では地表下1.5mの褐色斑灰色シルト層がこれに対応する可能性がある。東調査区では地表下1.66m以下で、西調査区では2.44m以下で湧水層である褐白色粗砂層を確認している。

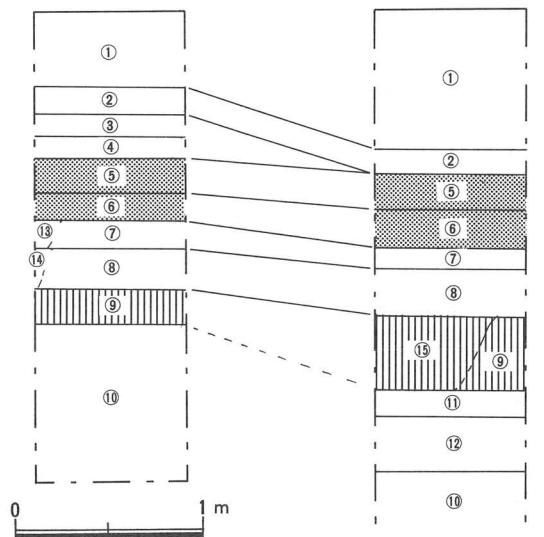
（吉田）



第61図 調査地周辺図（1/5000）



第62図 調査区設定図 (1/600)



- | | |
|---------------------|------------------------------|
| ① 盛土 A | ⑨ 褐色斑灰色シルト |
| ② 盛土 B | ⑩ 褐白色粗砂 |
| ③ 耕作土 | ⑪ 褐色斑灰色微砂質シルト |
| ④ 茶褐色斑灰色粘砂 A | ⑫ オリーブ灰色微砂質シルト |
| ⑤ 茶褐色斑灰色粘砂 B (色調暗い) | ⑬ 灰茶色粘土 |
| ⑥ 灰茶色砂混粘土 | ⑭ 灰色粘土 |
| ⑦ 褐色斑淡灰茶色砂混粘土 | ⑮ 褐色斑灰白色炭混粘土層
(古墳時代前期包含層) |
| ⑧ 褐色斑灰色シルト質粘土 | |
- 須恵器 瓦器含む

第63図 基本層序模式図 (1/40)

15. 水越遺跡（92-602）の調査

1. 調査地

千塚2丁目106

2. 調査期間

平成4年12月21日 平成5年1月8・9・11～13・16・18・19日

3. 調査契機

工場建設

4. 調査方法

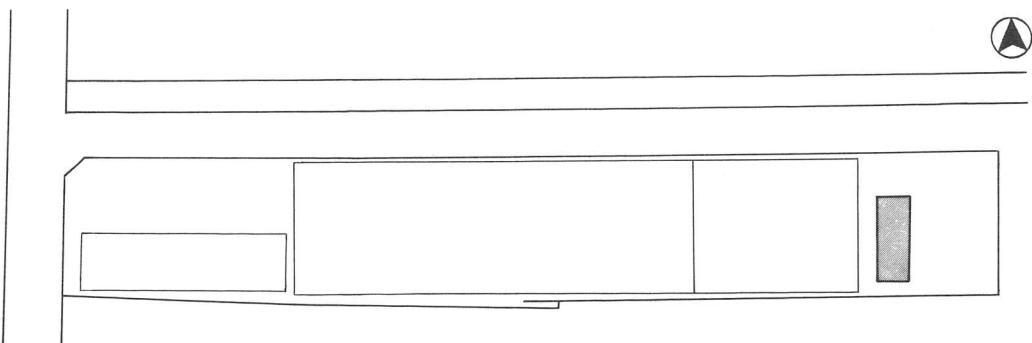
試掘調査を行なったところ、地表下1.0 mで弥生時代の包含層を確認した。さらに遺構を確認するため、盛土除去後、調査区を拡張して調査を行なったところ、弥生時代中期の土壌などを確認した。敷地の東側は削平が著しく遺構等を確認できなかった。また、調査終了後、工事立会を行なった。

5. 基本層序

厚さ0.2 m前後の盛土層を除去すると、すぐ弥生時代中期の遺構ベース面である暗茶灰色粘砂層となる。この層自体が弥生時代中期の包含層である。この層の下は茶灰色炭混粘砂層が約0.3 m前後堆積する。この層は北に向かって下がる。この層の下は茶黃灰色砂質土層をはさんで黃灰色粗砂層、その下に綠青灰色粗砂層が堆積する。



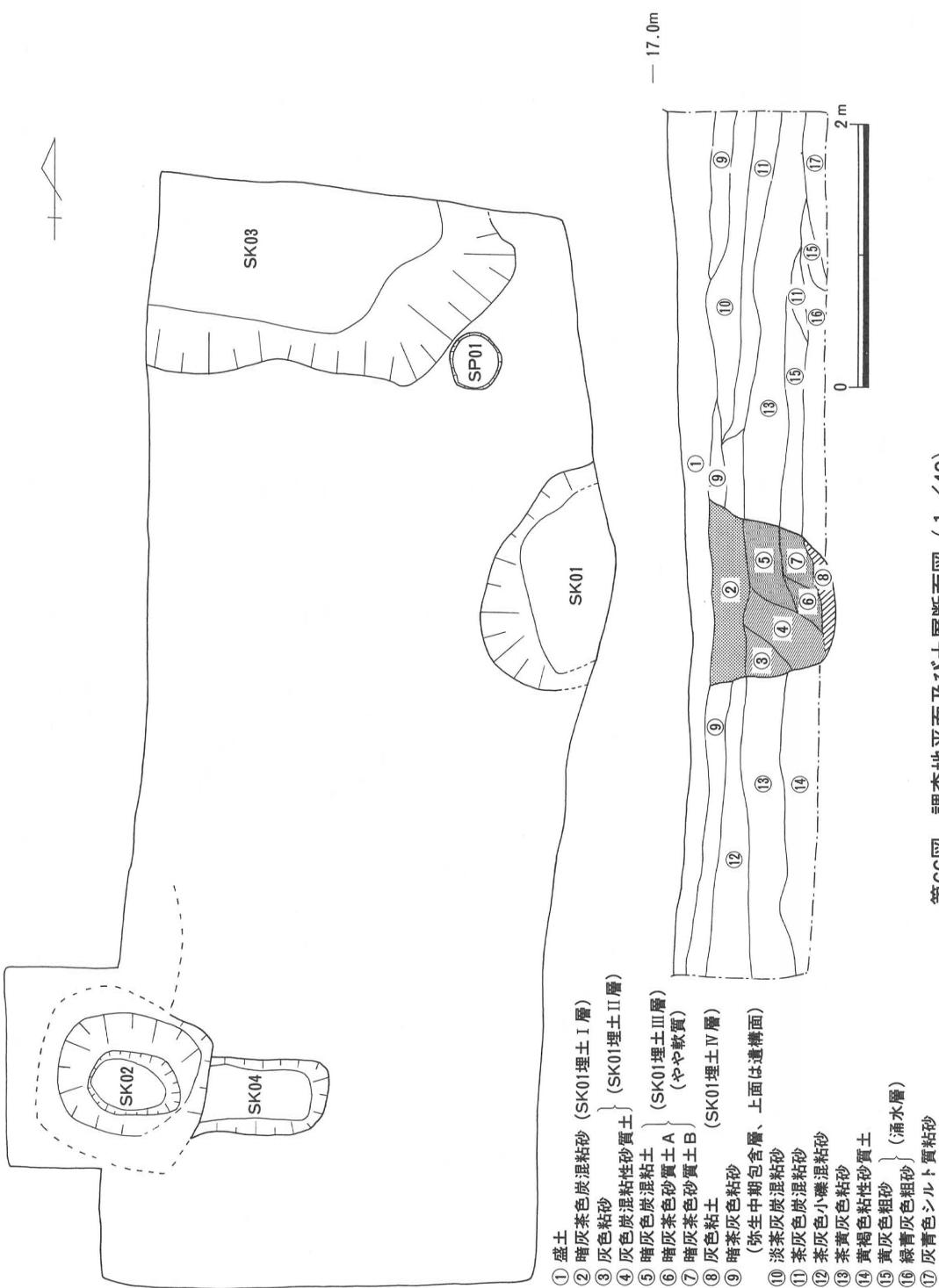
第64図 調査地周辺図 (1/5000)



第65図 調査区設定図 (1/800)

6. 調査概要

盛土層のすぐ下の暗茶灰色粘砂土層上面で弥生時代中期の土壙4基、ピット1基を検出した。SK01は調査区の東側で検出した土壙で、東半分はカクランにより壊されている。平面は不整橢円形を呈し、推定径1.7mを測る。深さは0.9mを測り、底面は湧水層である、緑青灰色粗砂層に達している。素掘りの井戸と思われる。埋土は何層かに分かれ。遺物のとりあげにあたっては、四つの層に大きく分けた。まず、最下層のIV層は灰色粘土でほとんど遺物は含まれていない。III層は暗灰茶色砂質土、暗灰色炭混粘土である。この上に灰色炭混粘性砂質土・灰色粘砂層であるII層が堆積する。最上層のI層は暗灰茶色炭混粘砂層で全体に約20cmの厚さで堆積する。SK02は調査区南西で検出した土壙である。当初、遺構の西側が調査区外となるため、拡張して全体の輪郭を検出したところ、西側の上端の一部は削平されているが、最大推定径1.25mを測り、不整円形を呈することがわかった。深さは0.64mを測る。埋土は暗茶灰色粘質土である。段状に掘りこまれており、底面は湧水層である黄灰色粗砂層に達している。これも素掘りの井戸になると思われる。SK04はSK02にきられる溝状の遺構で、深さは約12cmを測る。埋土は暗灰茶色粘質土層である。SK03は調査区北側で検出した落ち込み状を呈する土壙である。土壙の北及び東の肩は調査区外となるため不明であるが、遺構が深さは最も深い部分で0.27mを測る。埋土は暗灰茶色粘質土である。工事着手時の立会で、調査区の北壁から約1.3mは、同様の状態で遺構の埋土がつづくことを確認している。SP01はSK03の南東の肩に近接して検出した、最大径0.42mを測る円形のピットである。深さは約0.11mを測り、埋土は暗茶灰色粘質土層である。また、工事着手時の立会で、調査区の南側で東西に並ぶ土壙を2基確認した。西側のそれは上幅1.2m、深さ0.5m以上で、埋土は暗灰色粘砂層である。採集し得た土器はIV様式の古い段階に位置付けられる弥生土器である(96~99)。東側のそれは上幅0.7m、深さ0.6mを測り、埋土は炭を多く含む茶灰色粘砂層である。弥生土器小片が出土している。



第66図 調査地平面及び土層断面図 (1 / 40)

7. 出土遺物

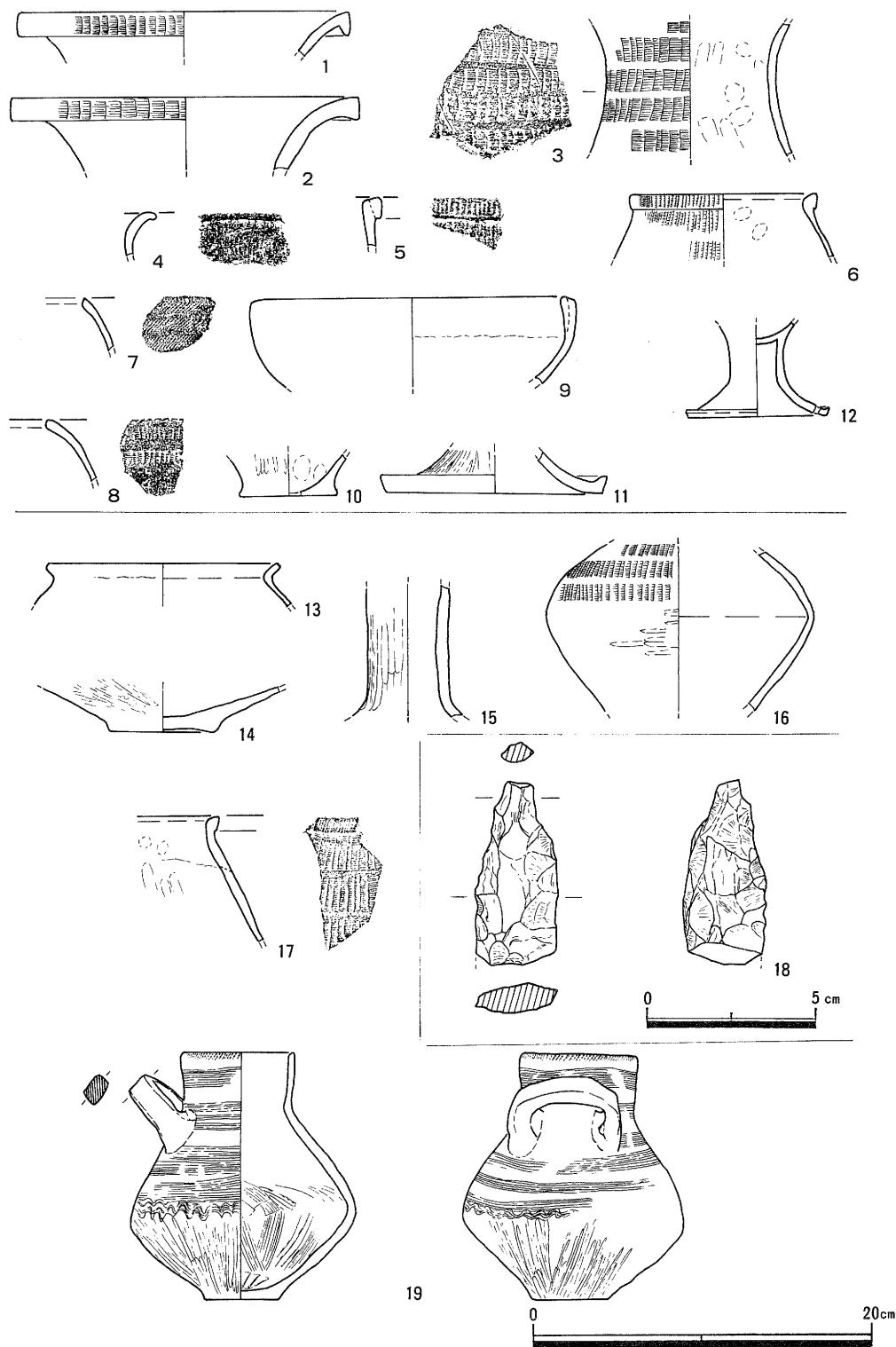
今回出土した弥生土器には壺、甕、鉢、高杯の器種があり、壺には広口長頸壺、無頸壺、水差形土器がある。甕は大型のものと、小型のものがあり、それぞれ口縁がくの字形に強く屈折し、肩の張るタイプと、口縁部がゆるやかに屈曲し、肩の張らないタイプとがある。ここでは便宜上、前者を甕A、後者を甕Bと仮称した。小型の甕は口径12~20cmに収まり、器壁は0.4cm~0.7cmに収まる。口径15cm前後、厚さは頸部で0.5cm前後のものが多い。大型甕は口径は25cm~40cm、器壁の厚さは頸部で0.9cm~1cmである。大型甕Aは口端部を下方に拡張させるものが多い。以下、まとまった遺物を出土したSK01、SK02、SK03の土器を中心に簡述する。詳細は観察表を参照されたい。

[SK01] 第67図、図版12上

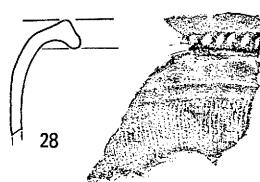
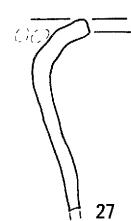
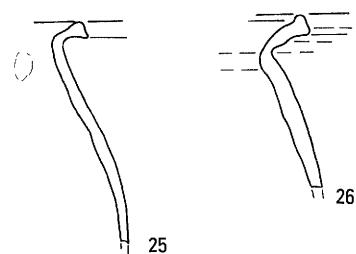
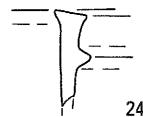
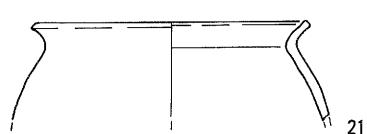
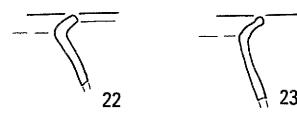
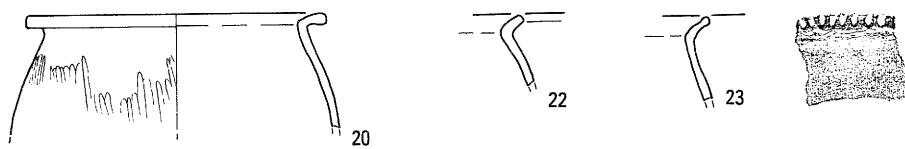
コンテナ半箱程出土した。実測し得たのは、小型甕Aが1点、小型甕Bが1点、甕底部1点、壺8点（このうち広口長頸壺3点、無頸壺3点）、水差形土器1点、鉢3点、高杯4点の計18点である。それぞれの出土層位は次のとおりである。1~3までの広口長頸壺、4・10の甕、7・8の無頸壺、5・6の鉢、9・11の高杯、100・101の砥石（第73図、図版16下）はI層出土である。13の甕・14の壺・15の高杯、そして19の水差形土器はII層出土である。17の鉢はIII層から、12の高杯、18の壺、16の石器未製品はIV層より出土した。広口長頸壺は口縁部、頸部に簾状文を施すもので（1~3）、口縁部は口端部を拡張もしくは垂下させて、施文する。無頸壺は球形の体部をもつもので、列線文を施すものと（7）、簾状文を施すもの（8）がある。鉢は口端部が段状になるもので、これも簾状文を施す（5、6、17）。高杯は部分破片でわかりにくいか、大型のものと（9）、小型のもの（11、12）があるようである。12は脚端部に穿孔がある。19は水差形土器ではほぼ完形である。II層より底部を上にした状態で出土した（図版7上）。算盤形の体部に把手がつく。体部に櫛描直線文、櫛描波状文を施し、口縁部には列点文を施す。この個体は色調は乳白燈色を呈し、胎土は角閃石を含まず、クサリ礫、はんれい岩を多く含む。他地域からの搬入品である可能性が高い^(註1)

[SK02] 第68、69図 図版12、13、17

コンテナ2箱程出土した。実測し得たのは、甕10点、壺7点（このうち確実な広口長頸壺2点、無頸壺2点）、鉢1点、甕もしくは壺の底部が3点の計23点である。甕は小型甕A（20~22）、大型甕A（25、26、29）、大型甕B（27）、大和型の甕（28）、加飾する甕（30）がある。23は口端部にキザミメを施す。30は口端部を簾状文、キザミメなどで加飾する。24はキザミメ突帯をもつ鉢である。広口長頸壺の36、37は2点とも部分破片からの復原図である。36は肩がほとんど張らず、頸部から腹部へなだらかに移行する丈高の器形になると思われる。櫛描直線文を施す。37は薄手で軟質、器面の摩滅が著しい。34は器面の摩滅が著しいが、櫛描直線文を頸部に施す長頸壺にな



第67図 SK01出土遺物実測図 (1 / 4)



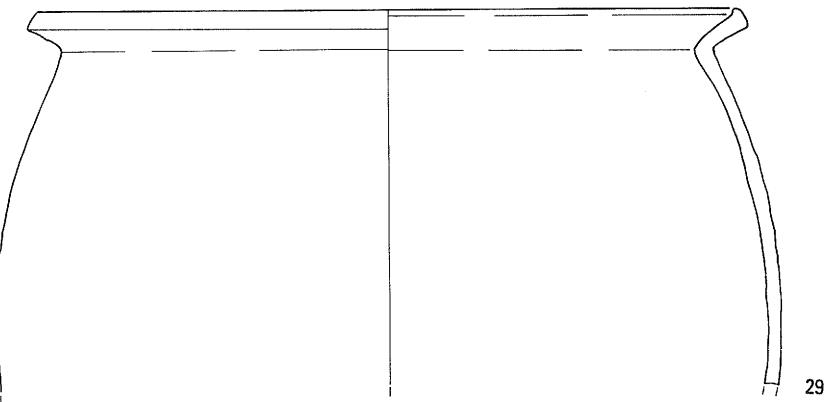
25

26

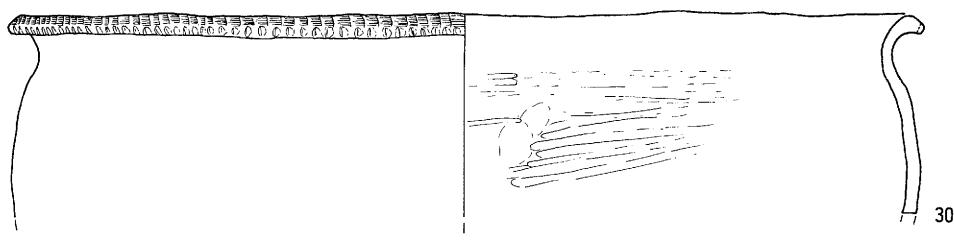
27

28

25



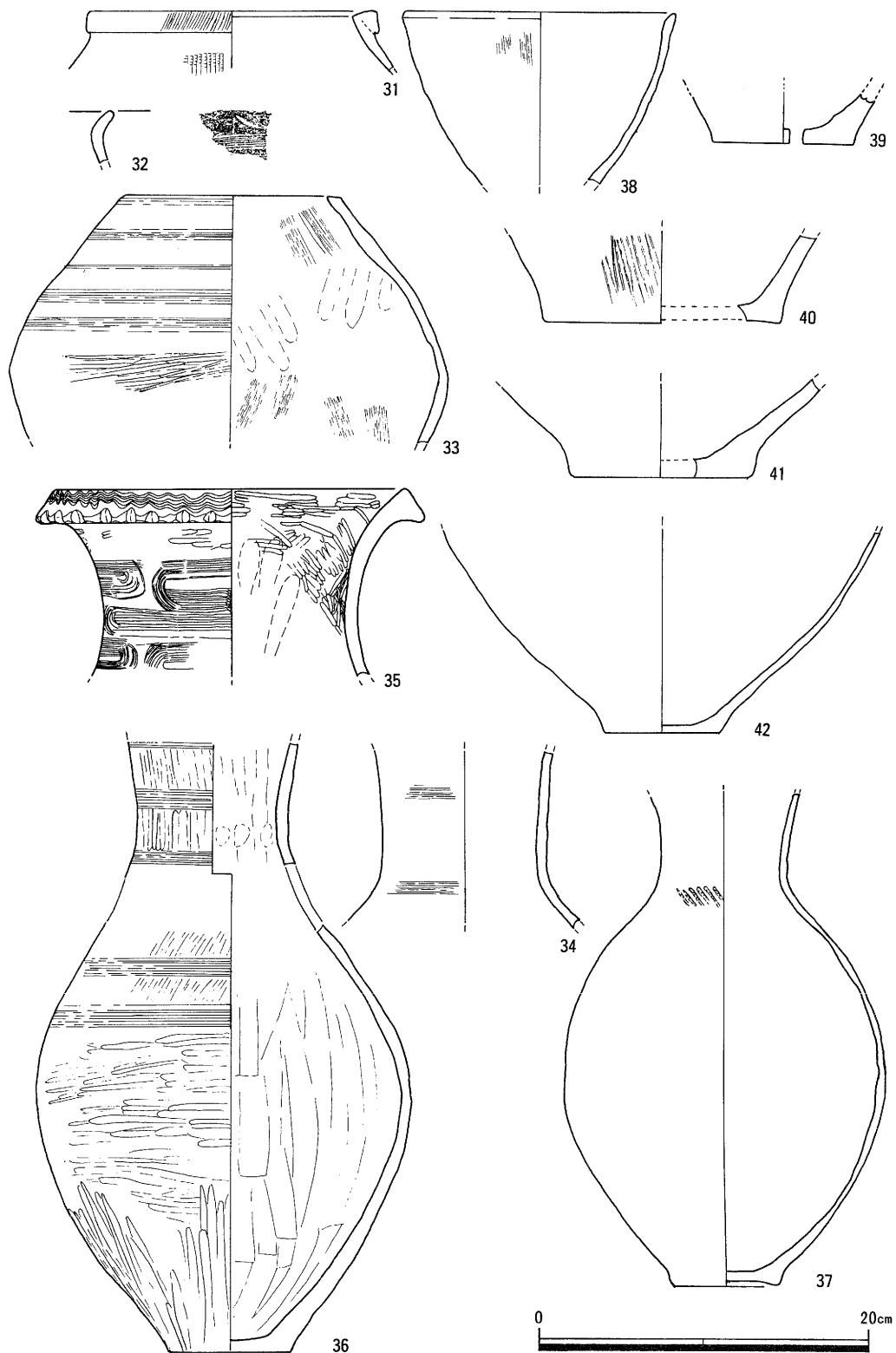
29



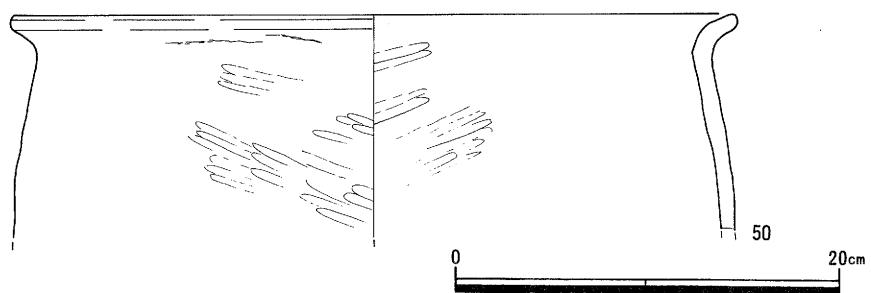
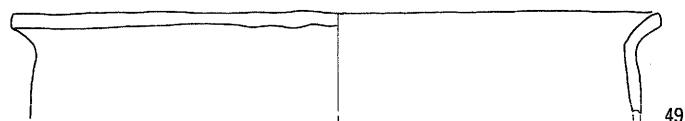
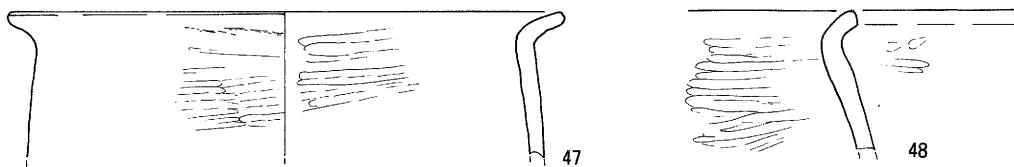
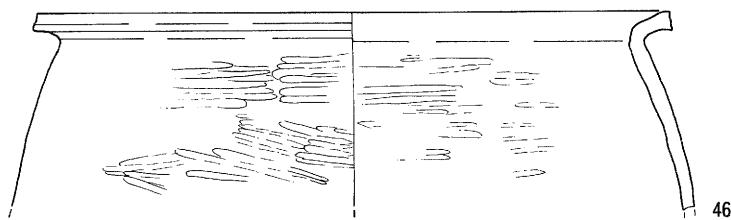
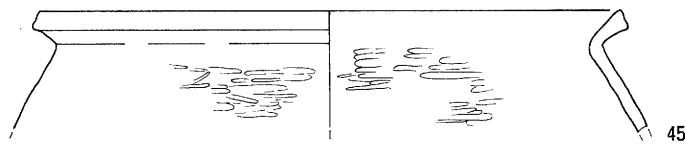
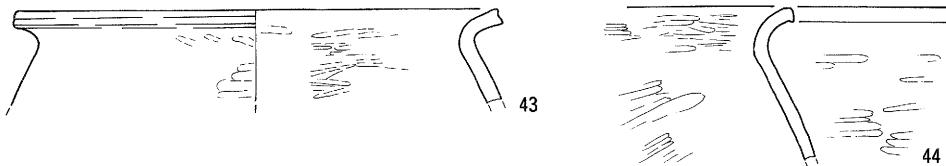
30



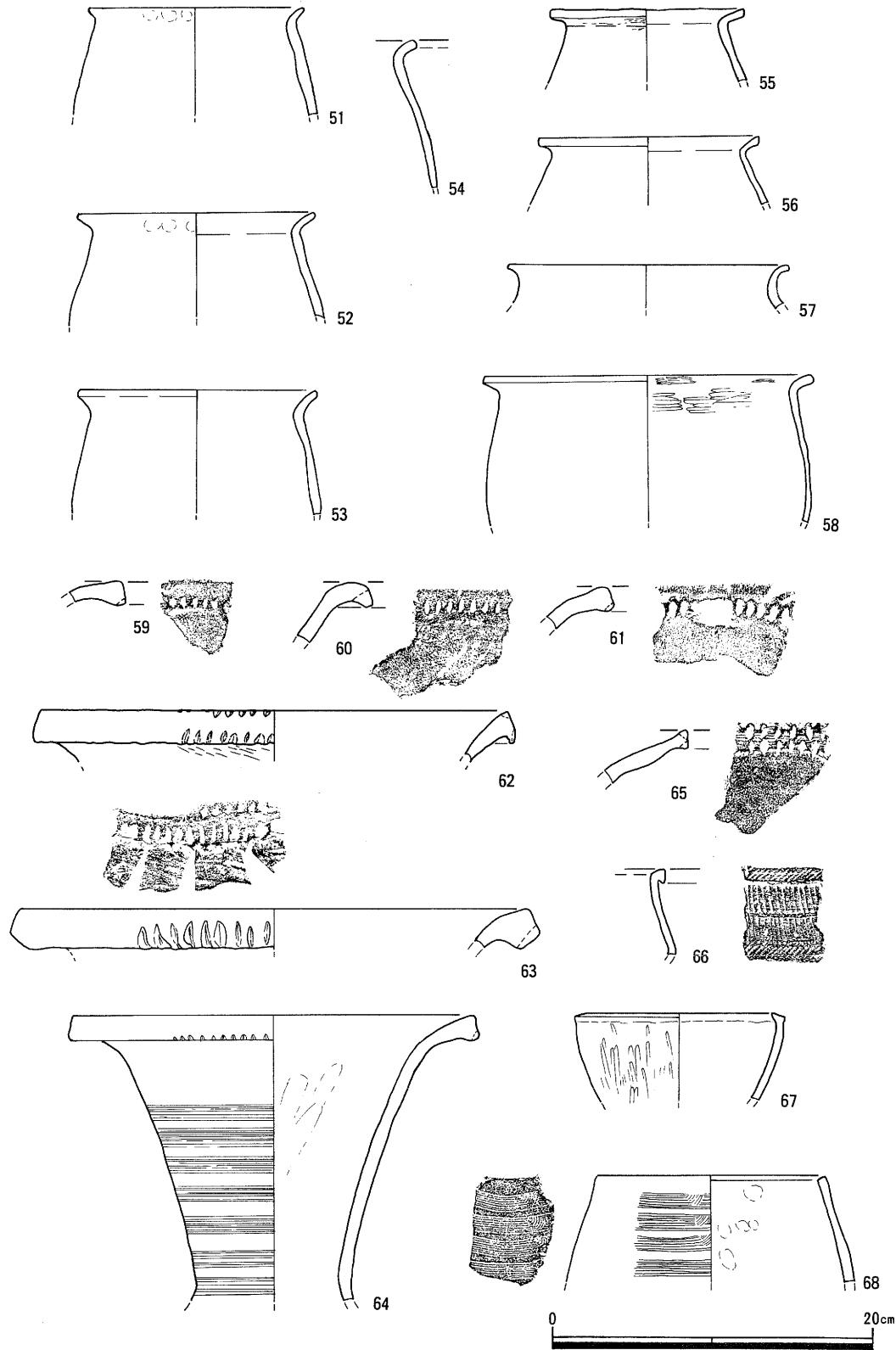
第68図 SK02出土遺物実測図（壺、鉢）（1／4）



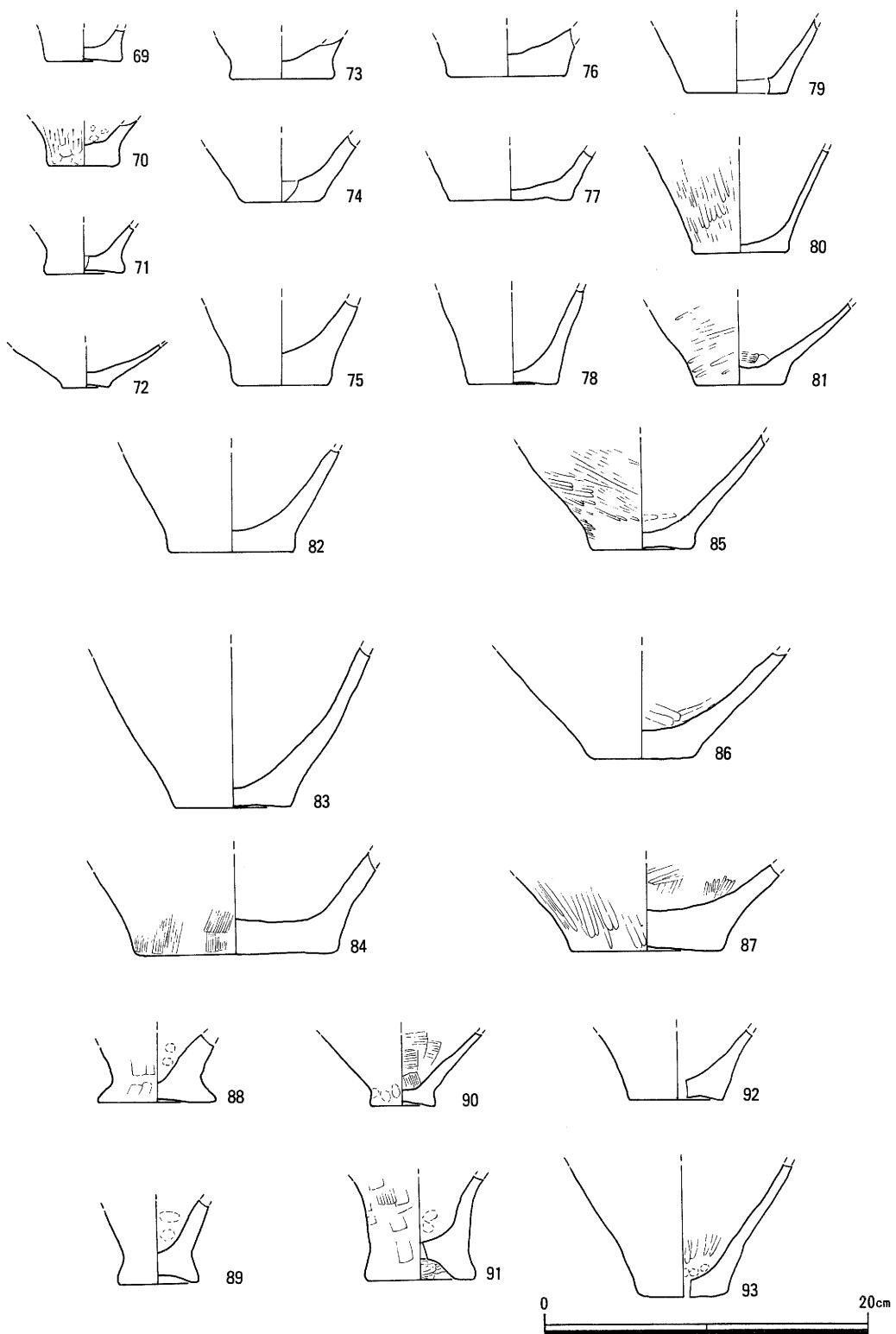
第69図 SK02出土遺物実測図（壺他）（1／4）



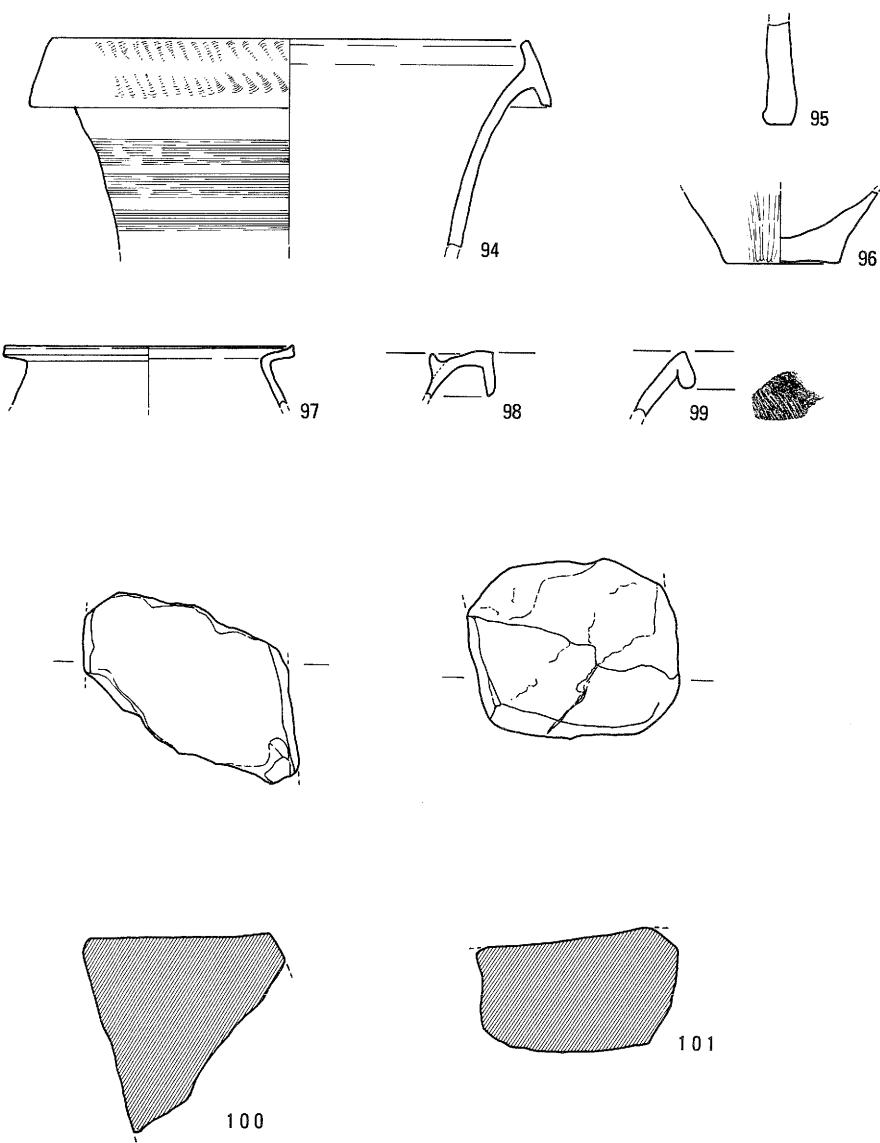
第70図 SK03出土遺物実測図（續）（1／4）



第71図 SK03出土遺物実測図（甕・壺）（1／4）



第72図 SK03出土遺物実測図（底部）（1／4）



第73図 出土遺物実測図（その他）（1／4）
 (94、95—包含層他、97～99—立会検出土壙、100、101—SK01)

ると思われる。35は頸部外面に扇状文と直線文をくみあわせる凝似流水文を施す広口長頸壺である。無頸壺は球形体部で櫛描直線文を施すものと（33）、口縁がやや外反するもの（32）がある。鉢は段状口縁で簾状文を施すもの（31）がある。36の広口壺、39の穿孔のある底部、42の壺の底体部は埋土の最も上で出土した（図版7下）。

[SK03]

コンテナ2箱程出土した。実測し得たのは、甕16点、広口長頸壺7点、無頸壺1点、鉢2点、底部25点、壺の底部1点の計42点である。甕は大型甕A（43～46）と大型甕B（47～50）、小型甕A（55～57）、小型甕B（51～54、58）とがある。59～65は緩やかに大きく拡がる口縁部をもつ広口長頸壺になる。口端部にキザミメを施す。65は口端部に直線文を施したのち、上下2段にキザミメをいれる。63は段状口縁となる。64はゆるやかに拡がる頸部に7帯の櫛描直線文を施す。66は折り返しの段状口縁の鉢で簾状文、列線文を施す。68は櫛描直線文のち扇状文を施す、無頸壺である。67は椀状を呈する鉢で、外面にミガキを行なう。69～93の底部は72以外は、壺になるか甕になるか判断できなかった。92、93は底部中央に焼成前の穿孔があり、甌のような用途で使われていた可能性がある。91は高いあげ底の底部である。

[その他]

94、95はあげ土内からの出土である。94は受け口状口縁をもつ壺である。95は円筒埴輪の底部片で、調整は不明ある。

[まとめ]

各遺構より出土した土器の器種別の数をだしてみた（表1）。SK01は遺構が半分しか残っておらず、良好な資料とはいえないが、敢えて行なった。甕または壺の底部については、口縁部と同一個体のものがある可能性があるため、個体数には含めていない。器種別の大まかな比率は、SK01では甕は19%、壺は43%、高杯・鉢は38%、SK02では、甕が73%、壺が18%、鉢・高杯が9%、SK03では、甕が72%、壺が22%、鉢が6%である。SK02、SK03は甕が圧倒的に多く、高杯、鉢はごく少ない。集落の廃絶などなんらかの理由で、一気に甕を中心とした土器を投棄している様相を示しているようである。SK02は素掘りの井戸と思われ、井戸の機能が停止したのちの投棄であろう。一方、SK01も素掘りの井戸と捉え得るが、壺が半分を占めていること、高杯・鉢が多いことが他と異なる。さらに出土している壺も小破片が多い。Ⅲ層で水差形土器がほぼ完形で出土していることも注意される。このことから井戸の機能が停止したのち、ごみ捨て穴などに使われるることなく、埋められた状況を示しているようである。SK01の埋土内に炭片が多く含まれており、I層内から火を受けた砥石が出土していることから、火災などの原因で廃絶したということも考えられる。

さて、各遺構の土器の時期であるが、まず、SK01では、広口壺は櫛描直線文を施すものはみら

遺構名	大型甕		小型甕		その他の甕	広口壺	無頸壺	水差形土器	鉢	高杯	不明土器	計
	A	B	A	B								
SK01	0	1	2	0	1	5	3	1	3	5	0	21
SK02	3	8	11	5	5	4	4	0	2	1	1	44
SK03	13	13	12	11	8	12	5	0	5	0	0	79
計	16	22	25	16	14	21	12	1	10	6	1	144

表1 器種別個体数一覧表

	西麓	西麓系	西麓？	非西麓	計
SK01	3	13	3	2	21
SK02	1	25	10	8	44
SK03	1	63	10	5	79
計	5	101	23	15	144

表2 胎土別個体数一覧表

れず、すべて簾状文である。簾状文の原体幅は2cm前後である。また、鉢はすべて段状口縁をもつ。水差形土器は搬入品と考えられるが、最大径が下方にあり、やや腰の張るプロポーションである。第Ⅲ様式の中頃から新しい段階の様相を示すものであろう。次にSK02は簾状文を施す壺はみられない。広口壺は36の緩やかに頸部から腹部へ移行し、直線文を施すもの、35の凝似流水文を施すものがあり、無頸壺は直口で直線文を施すものである。甕は大型品があり、端部をやや下方に拡張する大型甕Aがある。第Ⅲ様式の古い段階に位置付け得るが、一部第Ⅱ様式に遡る個体があるものと思われる。SK03では広口壺は直線文を施し、口縁端部にキザミメを施している。鉢は折り返しの段状の口縁部をもつ66があり、無頸壺は扇状文と直線文をもつ68がある。また、大型甕Aが出士している。第Ⅲ様式の古い段階でもやや新しい時期に位置付けられよう。

次に出土土器の胎土であるが、肉眼による観察を行ない、遺構毎に分類した（表2）。いわゆるチョコレート色を呈し、角閃石、金雲母、石英を非常に多く含むものを生駒西麓産とした。また角閃石、金雲母、石英がめだち、茶灰褐色や燈褐色系を呈するものを生駒西麓系とした。そして角閃石、金雲母、石英が少なく、乳白色や灰黄色を呈するものを、非西麓産とした。全体では、74%が生駒西麓産と生駒西麓系である。しかし、典型的な生駒西麓産はごくわずかで4%であることは注意される。このなかでもSK01は西麓産が14%と比較的多く、西麓系としたなかにも、やや色調は淡いが、胎土に角閃石、雲母を非常に多く含むものがみられた。西麓産とした土器は従来いわれているとおり、簾状文を伴うものである。SK02、SK03は簾状文をもつ土器自体が少ない。また、SK02は非西麓産の土器が18%と比較的多く、器種に甕、無頸壺、広口壺がある。このような遺構間の比率の変異は、時期的な要素を多分に含んでいるものと思われる。今後、時期別に山麓、平野部の各集落での産地別土器の比率を検討する必要があろう。弥生土器の胎土分類にあたっては、

客観的な分類基準を設定する必要あるが、今回はなしえず、多分に主観的な分類に留まってしまった。今後の課題としたい。

8、小結

今回の調査地からわずか南西へ30mの地点では、弥生時代中期の竪穴式住居、井戸、土壙などとともに、集落の東側を画していたと思われる大溝を確認している。^(註2)今回の調査では集落の一部となる遺構を確認したが、大溝との位置関係などは小調査のため、確認し得なかった。本調査で確認した遺構は、概ね弥生時代中期中葉に位置付けられるものである。調査地の東側の清友高校内での調査では、弥生時代中期の方形周溝墓などが確認されている。集落と墓域の関係を捉えることができ、興味深い。弥生時代後期の遺構も付近で確認されており、水越遺跡は、恩智遺跡とともに東部東部山麓で弥生時代中期に隆盛し、後期へとつづく集落と捉えられる。今後、本遺跡内の各調査地の遺構、出土遺物を相互に検証し、点の調査を有機的に結びつけていくことにより、面としての集落の実態の解明ができるものと考える。今後の調査・研究に期したい。^(註3)

(吉田)

註1 八尾市立曙川小学校教諭 奥田尚氏にご教示いただいた。また、SK01出土の砥石の石材についてもご教示いただいた。

註2 (財)八尾市文化財調査研究会 『八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度』 1991年

註3 註2文献。八尾市教育委員会『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書I』 1992年

SKO 1 (第67図、図版12上) I層出土

番号	器種	部位	法量(cm) 径 現高		形態	調整・文様	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	広口長頸壺	口縁部	19.8	2.8	口端部を下方に拡張する。	口端部外面一簾状文。 口縁部外面一ナデ。	明橙褐色	硬	やや粗	1 / 8	I層出土
2			20.6	4.4	口端部を拡張する。	口端部外面一簾状文	淡暗灰橙色	軟	粗	1 / 6	I層出土
3		頸部	10.0			外面一簾状文。内面 ナデ及びユビオサエ	淡灰茶色	やや硬	非常に粗	1 / 4	I層出土
4	甕	口縁部		2.6	ゆるやかに屈曲し、 端部やや肥厚。	外面一タテハケ。 内面一横ヘラミガキ。	淡灰橙色	やや硬	粗		I層出土
5	鉢	口縁部		3.0	口端部に突帯。	外面一簾状文	暗灰茶色	やや硬	粗		I層出土
6			11.2	3.8	口端部に突帯。	外面一簾状文。内面 ナデ及びユビオサエ	淡灰茶色	硬	非常に粗	1 / 5	I層出土
7	無頸壺			3.1	球形の体部。 口縁部は内面で 面をもつ。	外面一簾描列点文。 内面一ナデ	暗灰橙色	軟	粗		I層出土
8				3.8	球形の体部。 口縁部は内面で 面をもつ。	口端外面一キザミメ。 体外面一簾状文。 内面一ナデ	淡灰茶色	硬	やや粗		I層出土
9	高杯	口縁～ 体部	18.0	5.4	ゆるやかに上方に のびる体部から 直立する口縁。 口縁内面粘土 継ぎ足し。	内面一ナデ	暗橙褐色	やや軟	やや粗	1 / 4	I層出土
10	甕	底部	4.8	2.55		外面一ヘラミガキ。 ナデ。 内面一ユビオサエ	暗茶褐色	硬	粗	1 / 4	I層出土
11	高杯	脚部	12.9	2.6	脚は大きく拡がり、 端部はやや拡張す る。	外面一ヘラミガキ。 ナデ。 内面一ナデ。	暗橙赤色	軟	非常に粗	3 / 7	I層出土
12		脚部～ 脚台部	8.3	5.6	端部はやや拡張す る。脚柱部に穿孔。 復元で9孔。	脚端外面一線状キザ ミメ。	暗橙赤色	軟	非常に粗	1 / 1	I層出土 図版17

SKO 1 (第67図 図版12上) II～IV層

13	甕	口縁部	13.8	2.7	端部は外傾する面 をもつ	口縁内外面一横方向 ナデ	淡黒褐色	硬	やや粗	1 / 8	II層出土
14	壺	底部	6.3	2.8	ややあげ底ぎみの 底部から体部へ大 きく拡がる。	外面一ヘラミガキ。 内面一板オサエ。	淡茶灰色	硬	非常に粗	1 / 1	II層出土
15	高杯	脚柱部		8.2		外面一ヘラミガキ。	淡灰褐色	軟	粗	1 / 2	II層出土
16	壺	体部	最大径 16.2	10.1	体部は強く張り、 直線的に底部へ 移行。	上外面一簾状文。 下外面一ヨコヘラミ ガキ。	淡灰茶色	硬	非常に粗	1 / 4	IV層出土
17	鉢	口縁～ 体部		7.7	突帯をもつ口縁か ら直線的に体部へ 移行。	口縁端部外面一線状 ヘラキザミ。外面一 簾状文。内面一ユビ オサエ。ユビナデ。	淡灰茶色	硬	粗		III層出土
18	石器未製品		最大残長 5.5	最大幅 2.5	サヌカイト製。						IV層出土
19	水差形土器	ほぼ完 形	口径 6.7 底径 4.4	15.0	腹部は強く張り、 器高に対する最大 径の位置は低い。 口頸部は直線的に のび、端部は丸く 収める。断面長方 形の把手が付く。	口縁端部外面一籠描 列点文。 外面上半一櫛描直線文。 櫛描波状文。体外面 下半一タテヘラミガキ。 体内面上半一ナデ及 びユビオサエ。 体内下面下半一ナデ、 ハケ。	乳白橙色	やや軟	粗	ほぼ完 形	II層出土 図版17

S K 0 2 壺 (第68図、図版12下)

番号	器種	部位	法量(cm) 径 現高	形態	調整・文様	色調	焼成	胎土	残存率	備考
20	小型壺A	口縁～ 体部	16.0	6.3 口縁は強く外反し、 口端外面は明瞭な 面をもつ。	外面一タテヘラミガキ。 内面一ナデか。	暗淡橙色	やや硬	粗	1 / 4	
21			14.3	5.2 口縁部は屈曲し、 口端外面は外傾す る面をもつ。		暗灰白色	軟	粗	1 / 8	
22	小型壺	口縁部	4.75	口端部は屈曲し、 口端外面は外傾す る面をもつ。	内面一ナデか。	淡橙褐色	軟	粗		
23			4.55	口縁部はくの字に 屈折し、口端部は 丸く收める。	口端部外面一キザミメ	暗茶灰色	やや硬	粗		
24	鉢	大型壺A	4.75	口端部からやや下 がった位置に突帯 をもつ。口端部は 内面でやや肥厚する。	外面一突帯上方に 櫛描波状文。突帯下 方に櫛描直線文。 突帯にキザミメ。	橙色	やや軟	非常に粗		
25	11.9		口縁部は強く屈曲 し、口端部はやや 下方に拡張し、面 をもつ。	内面一部ユビオサエ。	淡橙乳白色	非常に軟	非常に粗			
26		大型壺B	9.5	口縁部は強く屈曲 する。口端部はや や下方に拡張し、 上方にややつまみ あげる。	外面一ナデ。 内面一ユビオサエか。	暗乳白色	硬	粗		
27	大型壺B		10.15	口縁部はゆるやか に屈曲し、口端部は 外方に面をもつ	口縁部内外面一ユビ オサエ	赤橙色	軟	きわめて 粗	1 / 4	口縁内面 粘土継ぎ
28	大和型壺	大型壺A	6.2	口縁部はゆるやか に屈曲し口端部は 下方に拡張し、外 方に面をもつ。	口端部外面一キザミメ。 体部外面一ハケメ	乳白色	硬	やや粗		
29	大型壺A		37.2	20.4 口縁部はくの字に 屈折し、口端部は 上方につまみあげ る。腹部はあまり 張らない		乳白色	軟	粗	1 / 2	図版17
30	大型壺		44.6	9.8 口縁部は強く屈曲 し、外反する。 口端部はやや拡張 ぎみで、外傾する 面をもつ。	口端部外面一簾状文、 キザミメ。	淡橙色	やや軟	非常に粗	1 / 4	図版17

S K 0 2 壺 (第69図、図版13)

31	鉢	口縁部	17.2	3.6	口端部に突帯。 端外面一キザミメ。 体外面一簾状文。	淡灰茶色	やや軟	粗	1 / 2		
32	無頸壺				口縁がゆるやかに 短く外反。	燈褐色	硬	やや粗			
33		口縁～ 体部	13.0	15.0	体部は強く張り、 口端部は上端で面 をもつ。	上半外面一櫛描直線文。 下半外面一ヨコヘラ ミガキ。内面一ハケメ、 ナデ。	灰白色	やや硬	やや粗	1 / 2	
34	長頸壺	頸部	10.0	11.0		外面一櫛描直線文	灰白色	やや軟	粗	1 / 3	
35	広口長頸壺	口縁～ 頸部	21.0	11.5	ゆるやかに外反す る頸部にわずかに 垂下する口端部が つく。	口端部外面一櫛描波 状文、キザミメ。 頸部外面一ヨコヘラ ミガキ後擬似流水文。 内面一ヘラミガキ、 ユビナデ	淡茶灰色	硬	粗	1 / 2 弱	図版17
36			底径 7.5	36.0	丈高な感を与える 体部にやや外傾ぎ みに立ち上がる頸 部がつく。体部高 に対する腹部最大 径の位置はほぼ中 位に位置する。 頸部から腹部へは 比較的なたらかに 移行する。	頸部～上半外面一縦 ヘラミガキのち櫛描 直線文。中位～下半 外面一ヨコヘラミガキ。 下半～底部外面一 タテヘラミガキ。 内面一板ナデ。	淡橙赤色	硬	粗	底径 1 / 1	図版17
37		頸部～ 体部	底径 6.25	30.2	丈高な感を与える 体部にやや外傾ぎ みに立ち上がる頸 部がつく。体部高 に対する腹部最大 径の位置はほぼ中 位に位置する。 肩部はやや張る。 底部はややあげ底 ぎみである。	頸部外面に櫛描列点文。 他 調整不明	暗赤灰色～淡 暗灰茶色	きわめて 軟	非常に粗	底径 1 / 1	

SK02 (第69図、図版13)

番号	器種	部位	法量(cm) 径 現高		形態	調整・文様	色調	焼成	胎土	残存率	備考
38	鉢	口縁～体部	16.6	10.6	口縁部から直線的に体部へ移行	調整不明	淡赤橙色	軟	非常に粗	1 / 2	図版17
39	壺	底部	8.7	3.1	底部中央に穿孔あり。		淡茶褐色	硬	やや粗	1 / 1	
40	壺		14.4	5.3	底部ややあげ底ぎみ。	外面一タテヘラミガキ。 内面一ナデ。	暗橙灰色	硬	非常に粗	1 / 8	
41			10.9	6.1		調整不明	淡赤橙色	軟	非常に粗	1 / 3	
42		底～体部	7.0	12.5	やや小さい底部から、腹部に向かって強く張りだしてたちあがる。		乳白色	軟	やや粗	1 / 1	

SK03 (第70.71図、図版14)

番号	器種	部位	法量(cm) 径 現高		形態	調整・文様	色調	焼成	胎土	残存率	備考	
43	大型壺A	口縁部	25.3	5.1	口縁部は屈曲し、口端部は外傾する面をもち、ナデにより凹線状をなす。	口縁部上方内外面一横方向ナデ。頸部外面一ユビオサエ。 ヨコヘラミガキ。 頸部内面一ヨコヘラミガキ。	淡燈褐色	普通	非常に粗	1 / 11		
44		口縁～肩部	不明	8.2	口縁部は屈曲し、口端部は外傾する面をもち、下方にややつまみだす。	口縁部上方内外面～口縁部外面一横方向ナデ。肩頸部外面一ヨコヘラミガキ。 口縁部下方内面～肩部内面一ヨコヘラミガキ。	淡灰茶橙色	硬	非常に粗			
45				31.0	6.8	口縁部はくの字に屈折し、口端部はやや拡張し、外傾する面をもつ。	口縁部内外面～頸部横方向ナデ。肩部外～肩部内面一ヨコヘラミガキ。	淡燈褐色	硬	粗	1 / 8	
46				33.6	10.8	口縁部強く屈曲、外反し、口端部は下方につまみだして拡張し、外傾する面をもつ。	口縁部内外面一横方向ナデ 肩部内外面一ヨコヘラミガキ。	淡燈褐色	硬	非常に粗	1 / 8	外面にスヌ付着
47	大型壺B			29.0	7.9	口縁部は屈折し、口端部は外面上方でやや肥厚し、丸く収める。肩部はまったく張らず、直線的に腹部へ移行	口縁部内外面一横方向ナデ 肩部内外面一ヨコヘラミガキ。	淡灰黃茶色	硬	粗	1 / 12	黒斑あり
48				不明	7.9	口縁部はゆるやかに短く屈曲し、口端部はやや面をもつ。肩部はまったく張らず、直線的に腹部へ移行	口縁部外面一横方向ナデ。頸部外面一ユビオサエ。 肩部外面一横方向ナデ。その他一調整不明	淡燈褐色	硬	粗		
49				34.4	5.9	口縁部は弱く屈折し、口端部はやや面をもつ。肩部はまったく張らず、直線的に腹部へ移行	口縁部外面一ユビオサエ。 肩部外面一横方向ナデ。その他一調整不明	暗燈褐色	やや軟	非常に粗	1 / 9	
50				38.0	11.9	口縁部は弱く屈折し、口端部は丸く収める。肩部はほとんど張らず、直線的に腹部へ移行。	口縁部内外面一横方向ナデ。肩部内外面一ヨコヘラミガキ。	暗燈褐色	硬	粗	1 / 4	
51	小型壺B			13.4	7.0	口縁部は弱く屈折し、短い。口端部は丸く収める。肩部はあまり張らない。	口縁部外面一ユビオサエ。 その他一調整不明。	暗橙褐色	硬	やや粗	1 / 8	
52				14.8	6.8	口縁部は屈曲し、口端部は外傾する面をもつ。肩部はあまり張らない。	口縁部外面一ユビオサエ。 その他一調整不明。	暗茶褐色	硬	やや粗	1 / 4	
53				14.8	8.1	口縁部はゆるやかに屈折し、口端部はやや面をもつ。肩部はほとんど張らない。	調整不明	淡橙褐色	硬	やや粗	1 / 6	

S K 0 3 壺・壺（第71図、図版14下）

番号	器種	部位	法量(cm) 径 現高	形態	調整・文様	色調	焼成	胎土	残存率	備考	
54	小型壺B	口縁部～ 腹部	不明	9.5	口縁部はゆるやかに屈曲、口端部はやや面をもち外傾する。肩部はほとんど張らない。	調整不明	暗灰茶色	硬	非常に粗		
55			12.2	4.7	口縁部強く屈曲、外反し、口端部直立する面をもつ。肩部は直線的に腹部にむかってはりだす。	口縁部内外面～横方向ナデ 肩部内外面～ナデ。	淡灰橙色	普通	非常に粗	1／4 弱	
56			13.8	4.4	口縁部は強く屈曲する。口端部は拡張し、直立する面をもつ。肩部は直線的に腹部にむかってはりだす。	口縁部内外面～肩部 外面～横方向ナデ。 肩部内外面～ナデ。	暗茶灰色	硬	普通	1／6	
57			17.4	2.5	口縁部は強く屈曲し、口端部はやや面をもつ。	調整不明	淡茶灰色	やや軟	粗	1／8	
58			20.4	9.5	口縁部は屈曲し、口端部にやや面をもつ。肩部はほとんど張らず、ゆるやかに腹部へ移行する。	口縁部外面～横方向ナデ。 口縁部～頸部内面～ヨコヘラミガキ。 その他一調整不明。	淡黒褐色	硬	粗	1／6 弱	
59			1.55	口端部は下方に拡張し、下端外面にヘラキザミ。	調整不明	淡橙色	硬	粗			
60	広口壺	口縁部	3.8	口縁部は如意形に屈曲し、下端外面にヘラキザミを行なう。		淡灰茶色	硬	粗	1／8		
61			2.6	口縁部はゆるやかに外反する。口端部はやや下方に拡張し、下端外面にヘラキザミを行なう。	口端外面～横方向ナデ もしくは櫛描直線文。	淡赤橙色	やや軟	非常に粗			
62			28.7	3.2	口縁部は外上方にのびる。口端部は下方へ大きく拡張し、外側する面をつくる。上端と下端の外面にヘラキザミを行なう。	口端部外面～頸部内面 ～横方向ナデ。頸部 外面～ヨコヘラミガキ。	淡橙黄色	硬	非常に粗		
63			31.2	2.4	口縁部はゆるやかに外反する。端部には厚さ0.7cmの突帯がつき、下端面にヘラキザミを行なう。	調整不明	淡灰茶色	硬	粗	1／12	
64	広口長頸壺	口縁～ 頸部	25.0	18.15	頸部はしまり、ゆるやかに外上方にのびる。口縁部はゆるやかに外反する。口端部は下方に拡張し、外傾する面をなす。下端面にヘラキザミを行なう。	頸部外面～7条1帯 の櫛描直線文を7帯施す。内面～ユビナデ。	淡橙褐色	硬	粗	1／3	図版17
65	広口壺	口縁部	不明	3.3	口縁部は大きく外反するようである。口端部は下方に拡張し、端面をなす。端面に櫛描直線文を施した後、上と下にヘラキザミを行なう。	口縁部外面～横方向ナデ	淡橙茶色	硬	粗		
66	鉢	口縁～ 体部上半	不明	5.6	突帯をもつ口縁部から直線的に体部へ移行。	口端部外面～線状キザミメ体部外面～簾状文。体部内面～ユビナデ。	暗灰茶色	硬	粗		
67			11.6	5.6	口端部からやややまみをおびて、体部下方へ移行。口端部は内上方にややつまみあげて拡張し、端部わざかに外傾する。	口端部～ナデ。体部 外面～タテヘラミガキ。 内面～調整不明	淡灰茶褐色	硬	粗	1／6	口端部に粘土紐の継目
68			12.2	6.8	口端部から直線的に外方に張る体部へ移行。口端部はやや面をなし、内傾する	外面～8条1帯の櫛 描直線文を施したのち、 扇状文。内面～ユビ オサエ。	淡灰茶褐色	やや軟	やや粗	1／8	

SK03 底部 (第72図、図版15)

番号	器種	部位	法量(cm) 径 現高	形態	調整・文様	色調	焼成	胎土	残存率	備考
69		底部	4.6 2.0	ややあげ底ぎみ。	調整不明	暗橙褐色	やや硬	粗	1 / 1	
70			3.7 2.85		外面一タテヘラケズリ。 底面一ナデ。内面一 ユビオサエ。	淡灰橙色	硬	粗	1 / 1	
71			4.8 3.1	あげ底。	底面、内面一ナデ。 外面一不明。	淡灰褐色	やや軟	非常に粗	1 / 1	
72	壺		2.8 2.7	あげ底の底部から 外上方に大きく張 りだす。	調整不明	淡赤橙色	非常に 軟	非常に粗	1 / 1	
73			5.7 2.7			乳白色	普通	非常に粗	1 / 1	
74			5.4 4.1			淡橙褐色	硬	やや粗	1 / 3	
75			5.4 5.3			暗橙褐色	やや軟	非常に粗	1 / 3	
76			7.2 2.9			淡灰黄色	軟	非常に粗	1 / 4	
77			7.4 3.2	底面外側にやや粘 土を足し、あげ底 ぎみになる。		淡暗橙色	軟	非常に粗	1 / 4	
78			5.4 6.1	ややあげ底ぎみ。		淡暗赤褐色	軟	非常に粗	1 / 1	
79			6.2 4.65			淡暗橙褐色	やや軟	非常に粗	1 / 6	
80			5.4 6.4		外面一タテヘラミガキ。 底内面一ナデ。 その他一調整不明	暗乳灰色	非常に 軟	やや良	1 / 2	
81			5.2 5.1	底部からゆるやか に外上方に張りだす。	外面一ヨコヘラミガキ。 上方内面一ナデか。 下方内面一横方向板 ナデ。	暗橙褐色	やや軟	非常に粗	1 / 1	
82			7.6 6.4		外面一調整不明。 内面一ユビナデ。	暗橙褐色	硬	非常に粗	1 / 2	
83			7.0 9.9	あげ底の底部から ゆるやかにややま るみをおびて、た ちあがる。	調整不明	橙褐色	硬	非常に粗	1 / 1	
84			11.2 6.3		外面一ハケメ。 内面一調整不明	淡橙黄色	普通	非常に粗	1 / 1	
85			6.0 7.1	あげ底の底部から やや直線的に外上 方にたらあがる	外面一ヨコヘラミガキ。 内面一ナデ。	灰橙黄色	やや軟	粗	1 / 2	
86			5.6 7.25		外面一調整不明。 内面一ユビナデ。	淡橙褐色	普通	きわめて粗	1 / 1	
87			9.2 5.4	ややあげ底ぎみ。	内外面一ヘラミガキ。	淡暗茶灰色	硬	きわめて粗	3 / 4	
88			7.2 4.25	底面はややあげ底 ぎみ。外方に強く 張りだす台状の底 部より強く屈曲し て外上方にたちあ がる。	外面一板ナデ。内面一 ユビナデ。ユビオサエ。	淡赤橙色	軟	非常に粗	1 / 1	
89			4.8 5.2	底面はあげ底。外 方に張りだす台状 の底部よりゆるや かに屈曲し、外上 方にたちあがる。	外面一ユビナデ。 内面一ユビナデ、 ユビオサエ。	淡赤橙色	軟	非常に粗	3 / 4	

SK03 底部（第72図、図版16上）

番号	器種	部位	法量(cm) 径 現高		形態	調整・文様	色調	焼成	胎土	残存率	備考
90		底部	3.8	4.8	底面はあげ底。直線的に強く外上方へ張りだす。	外面—ユビナデ、ユビオサエ。内面—ハケメ。	乳橙色	軟	やや良	1／1	
91			6.3	6.45	高いあげ底の底部から直立してたちあがったのち、ゆるやかに外上方へ張りだす	外面—ハケメ。底面—強い横方向ナデ。内面—横方向ナデ、ユビオサエ。	淡灰茶色	硬	非常に粗	1／1	
92			5.6	4.35	あげ底ぎみの底部からゆるやかに外上方にたちあがる。底部中央に穿孔あり。	内外面—ナデ。	暗茶灰色	硬	普通	1／6	
93			4.0	8.2	平底の底部からゆるやかに外上方にたちあがる。底部中央に穿孔あり。	底面—ナデ。上方内面—ナデ。下方内面—ユビオサエ	暗赤橙茶色	硬	非常に粗	2／3	

その他（第73図、図版16上）

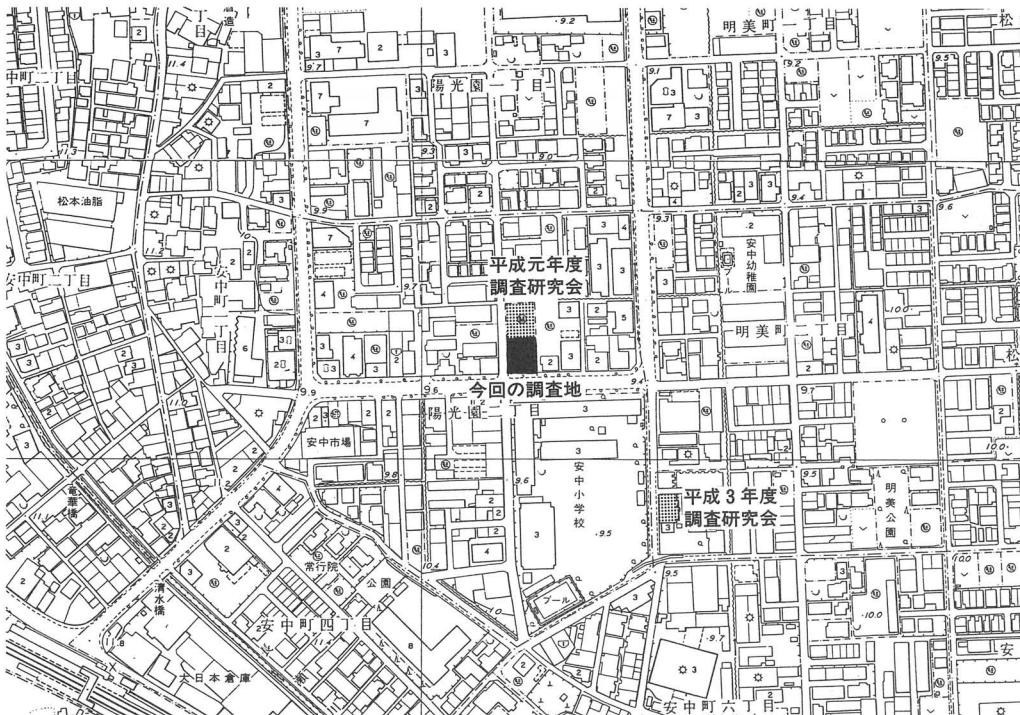
94	広口長頸壺	口縁～ 頸部	25.2	11.2	頸部はゆるやかに外上方にのびる。内傾する垂下口縁	口縁外面—二段の扇形文。頸部外面—12条1帯の櫛描直線文。内面—調整不明。	暗橙褐色	軟	非常に粗	1／6	出土地不明
95	埴輪	底部		5.5		外面—調整不明。内面—ナデ。	明乳白色	硬	非常に粗		出土地不明
96	弥生土器 甕または壺	底部	6.0	3.8		外面—タテヘラミガキ。内面—調整不明。	暗橙褐色	やや硬	粗	1／6	立会検出 西側土壤
97	小型甕	口縁部	15.4	3.1	口縁部は強く屈曲し、口縁部は上方へややつまみあげる。	内外面—ナデ	淡黒灰茶色	硬	非常に粗		
98	高杯			2.4	垂下口縁になる。	調整不明	黒灰色	軟	粗		
99	長頸壺			3.2	口端部は下方へ折り返して垂下する。	外面—ハケメ。内面—横方向ナデ。	乳灰橙色	軟	粗		
100	砥石		最大幅 10.7	最大長 7.8	黒雲母花崗岩製	火を受けた痕跡あり					SK01 I層
101			最大幅 10.6	最大長 9.3	黒雲母花崗岩製	火を受けた痕跡あり					

(註記) 残存率は、径を計測した部位のそれである。

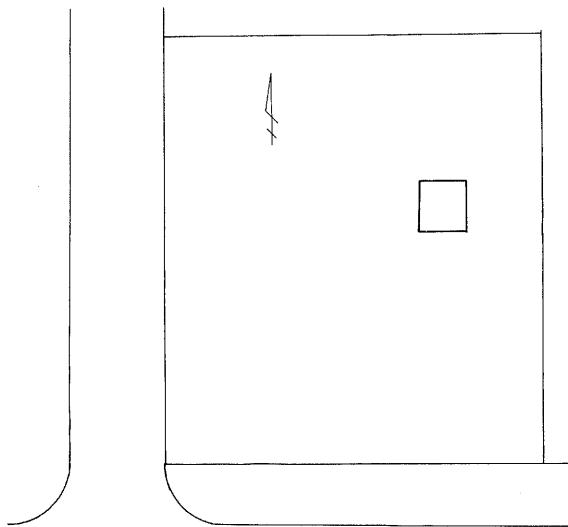
16. 竜華寺跡（93-177）の調査

1. 調査地 陽光園2丁目34-1, 2, 3
2. 調査期間 平成5年8月23日
3. 調査契機 共同住宅建設
4. 調査方法 2.5m×2.5mの調査区を設定し、地表下2.7mまで掘削、調査した。
5. 基本層序 地表下0.9m前後で旧耕作土がみられる。遺物を包蔵している土層は地表下1.3mの暗緑灰色粘質シルト以下、およそ2.25mまで出土している。しかし地表下1.75mの暗灰色粘砂には植物遺体が多く含まれており、またこの土層以下では砂～シルトが堆積していることから溝、あるいは堀などの遺構を推定できるものである。
6. 遺構・遺物 遺構は確認できなかったが、遺物は碎片であるが土師皿、瓦器、須恵器、瓦片がいずれの層でも出土しており、羽釜のミニチュアなども暗灰色粘質シルト層から見つかっている。

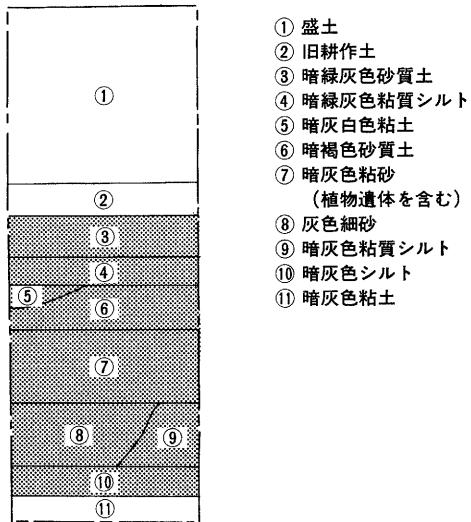
7. 備考 竜華寺は『続日本記』に記述されており、奈良時代には建立されていたと



第74図 調査地周辺図（1/5000）



第75図 調査区設定図（1／400）



第76図 基本層序模式図（1／40）

されるが、これまでの調査では奈良時代まで遡る遺構は検出されていない。今回の調査でも鎌倉時代後半の遺物を確認したのみである。平成元年に(財)八尾市文化財調査研究会により本調査地の北隣が調査されており、室町時代に2度掘りされている東西方向の溝を検出しているが、今回の溝状の土層堆積もそれらとの関連が推定される。

(道)

報告書抄録

ふりがな	やおしないいせきへいせい5ねんどはくつちょうさほうこくしょ						
書名	八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書Ⅰ						
副書名	平成5年度国庫補助事業						
巻次							
シリーズ名	八尾市文化財調査報告						
シリーズ番号	29						
編著者名	道斎・吉田野乃						
編集機関	八尾市教育委員会						
所在地	〒581 大阪府八尾市本町1丁目1番1号 TEL0729-91-3881						
発行年月日	西暦 1994年 3月31日						
所収遺跡名	所 在 地	コード 市町村・遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
跡部遺跡	大阪府 八尾市 春日町	27212	34° 36' 50"	135° 35' 25"	19930519	12.5	共同住宅建設に伴う遺構確認調査
老原遺跡	八尾市 老原町	27212	34° 36' 10"	135° 36' 30"	19931014	18.0	共同住宅建設に伴う遺構確認調査
太田遺跡	八尾市 太田	27212	34° 35' 120"	135° 35' 25"	19930510～ 19930525～ 19930524～ 19930525	207.0 27.0	共同住宅建設に伴う遺構確認調査
恵智遺跡	八尾市 恵智中町	27212	34° 36' 20"	135° 38'	19930519～ 19930521	3.12	住宅浄化槽設置に伴う遺構確認調査
久宝寺遺跡	八尾市 筒久宝寺	27212	34° 37' 20"	135° 35' 15"	19930706	18.0	遊戯場建設に伴う遺構確認調査
郡川遺跡	八尾市 郡川	27212	34° 37' "	135° 38' 20"	19930720, 19930804～ 19930811	37.5	共同住宅建設に伴う遺構確認調査
神宮寺遺跡	八尾市 神宮寺	27212	34° 35' 55"	135° 37' 50"	19930305	8.5	共同住宅建設に伴う遺構確認調査
高安古墳群	八尾市 山畑	27212	34° 37' 20"	135° 38' 5"	19930528～ 19930617	170	住宅建設に伴う遺構確認調査
東郷遺跡	八尾市 庄内町	27212	34° 37' 40"	135° 36' 25"	19930830 19930831 19940114	18.75 12.8 13.0	共同住宅建設に伴う遺構確認調査
中田遺跡	八尾市 八尾木北 荆部	27212	34° 36' 45"	135° 37' 10"	19930406 19930427	18.75 18.0	共同住宅建設に伴う遺構確認調査
水越遺跡	八尾市 手塚	27212	34° 37' 45"	135° 38' 35"	19921221, 19930108～ 19930119	25.0	工場建設に伴う遺構確認調査
竜華寺跡	八尾市 陽光園	27212	34° 37' "	135° 36' 05"	19930823	6.25	共同住宅建設に伴う遺構確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
跡部遺跡	集落	古墳時代 弥生時代	土器集積	土器類、須恵器、 弥生土器、石器		平成元年度に同遺跡より銅鏹が出土している。	
老原遺跡	集落	鎌倉時代	溝あるいは壇状遺構	瓦器、土師皿			
太田遺跡	集落	中近世	ピット	陶磁器、土師器、瓦器、黒色 土器、須恵器、砥石、動物骨片			
恵智遺跡	集落	平安時代後期 古墳時代	井戸1、溝1 土坑2、溝2	弥生土器、石器			
久宝寺遺跡	集落	弥生中期	落ち込み	鐵内V様式～庄内期土師器、石器			
郡川遺跡	集落	弥生時代末					
神宮寺遺跡	集落	近世 中世	土坑2 土坑3、ピット3	陶瓶器、瓦器、土師器、瓦			
高安古墳群	古墳	古墳時代	古墳	弥生土器、土師器、須恵器、埴輪			
東郷遺跡	集落	中世 古墳前期	溝	須恵器、土師器		200基前後遺存している古墳群の なかの1基	
中田遺跡	集落	古墳前期	落ち込み	土師器、須恵器			
水越遺跡	集落	弥生中期	土坑4、ピット1	弥生土器、石器			
竜華寺跡	社寺	鎌倉時代	溝あるいは壇状遺構	土師器、瓦器、須恵器			

図版

図版1 太田遺跡（92-585）・郡川遺跡（93-075）



井戸（南から）



調査全景（南から）



石室全景（南西より）



奥壁

図版3 高安古墳群 (93-70-73)



右側壁



左側壁

図版4 高安古墳群
(93—70—73)



石室全景（西から）



石室全景（東から）

図版5 高安古墳群（93—70—73）



第2トレンチ



裏込め除去後



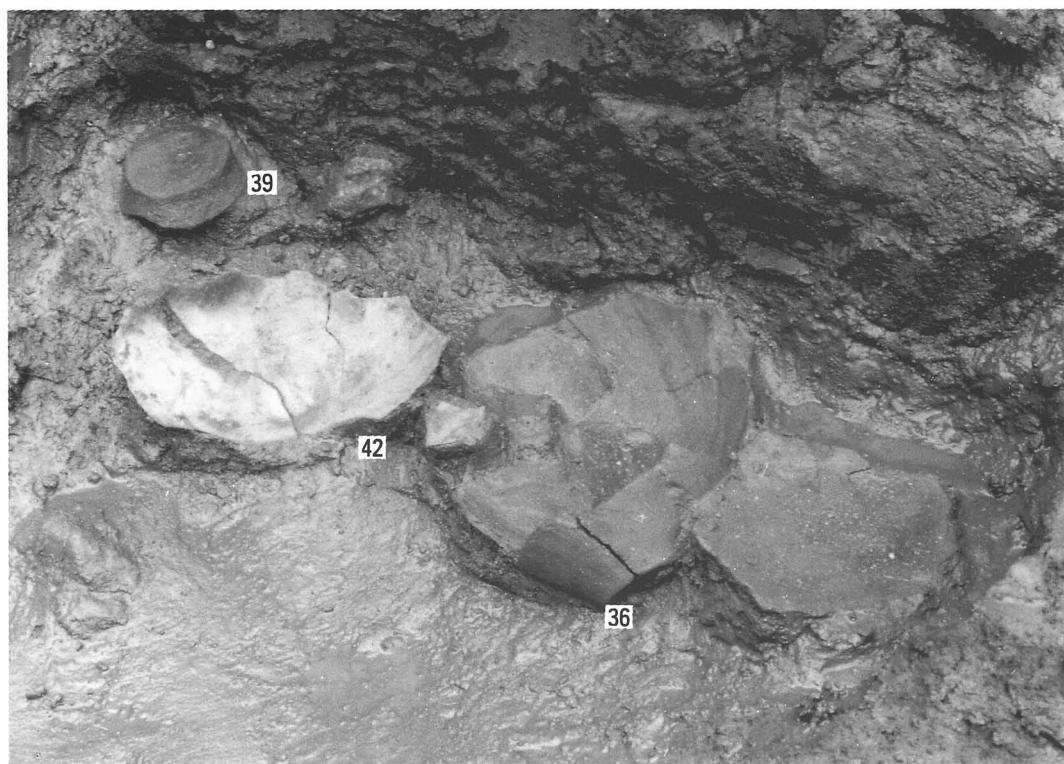
調査地南から



S K 02北東から

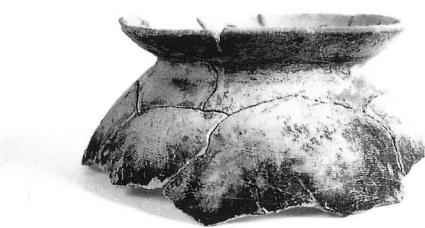


S K01水差形土器出土状況



S K02土器出土状況

図版8 中田遺跡
（92—645）・跡部遺跡
（92—623）



5



8

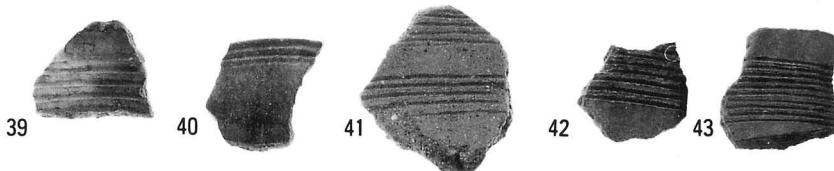


10



11

出土遺物



39

40

41

42

43

44

45

46

47

48



51

52

53

54

49

弥生土器

1

2



3



10



24



58



22



14

古墳時代遺物（58を除く）

跡部遺跡 (92—623)

・恩智遺跡

(92—640)

・神宮寺遺跡

(92—307)

石器

1



2



4



3

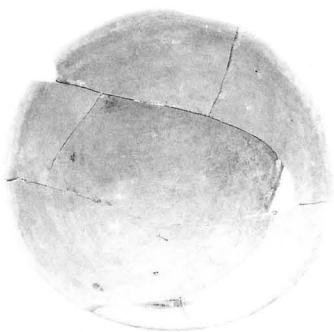


307-8



6





13



上から 16

上から



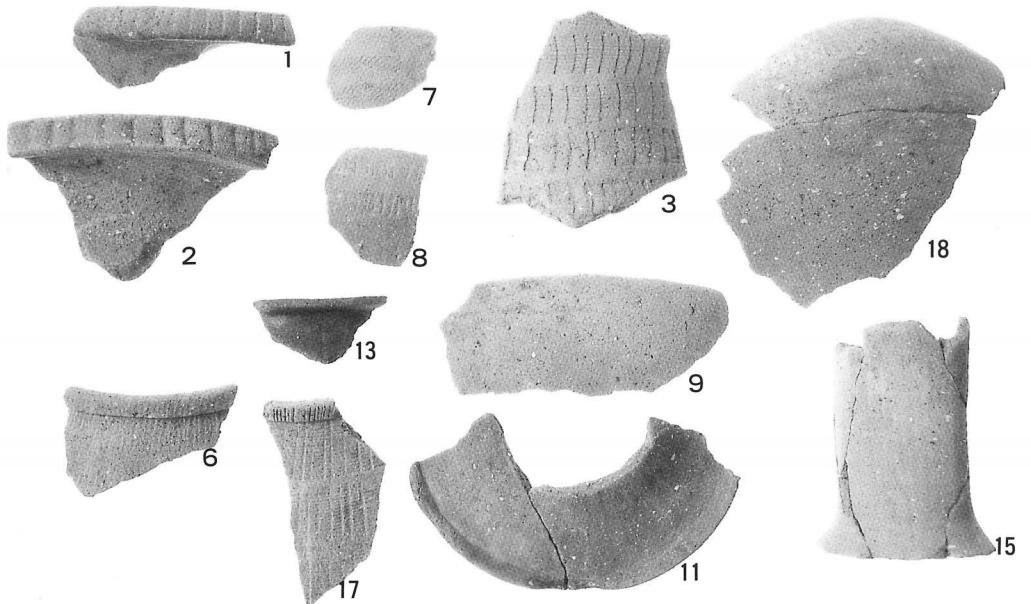
13



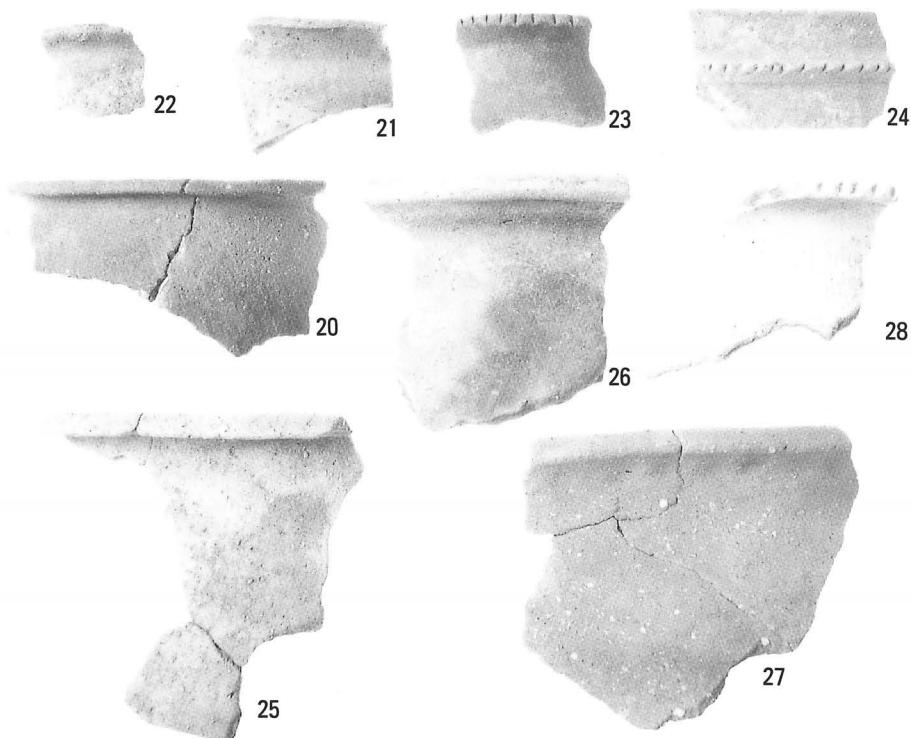
16

出土遺物

水越遺跡
(92—
602)



S K 01土器

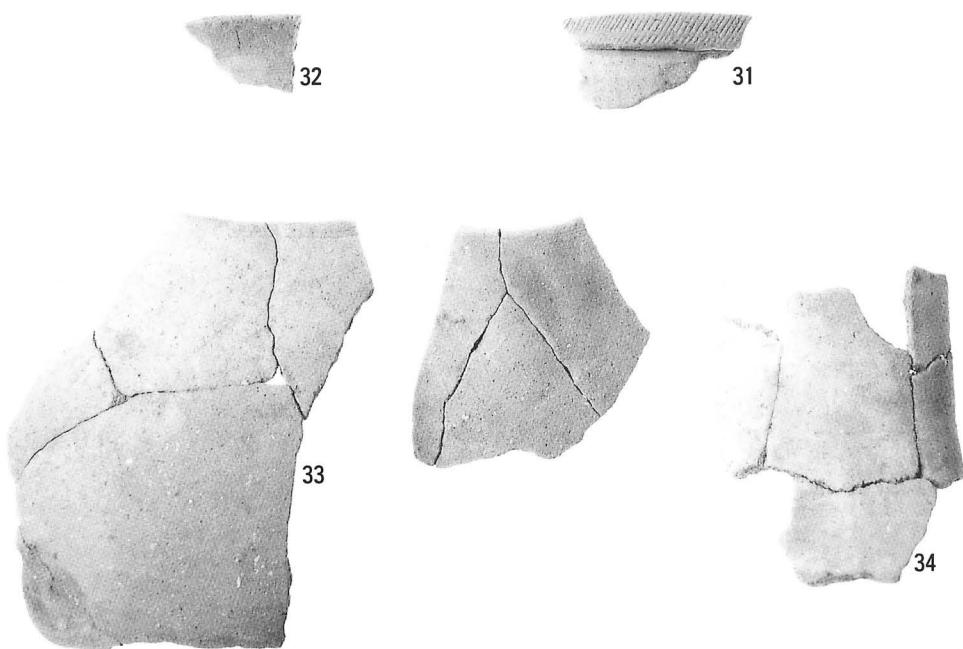


S K 02甕

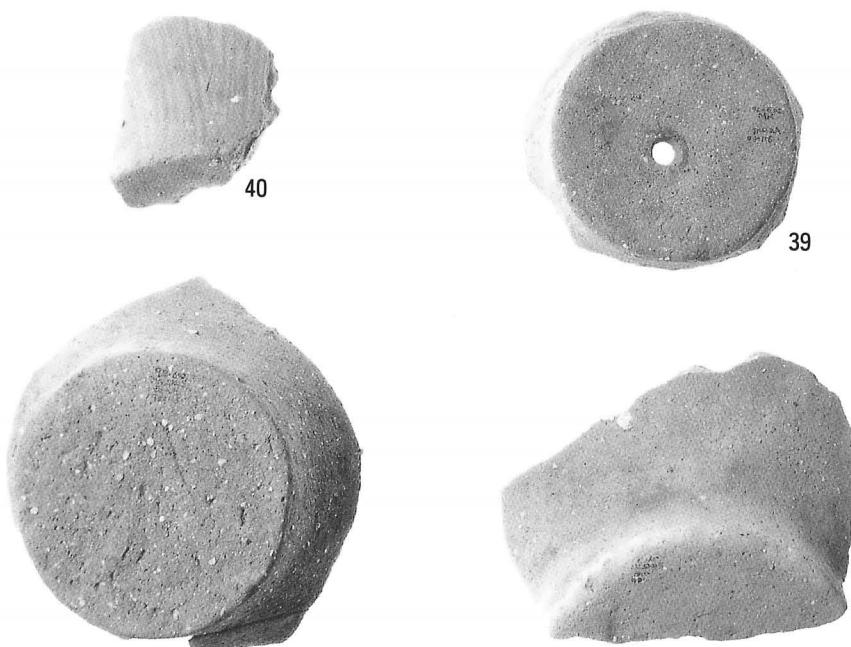
図版
13

水
越
遺
跡

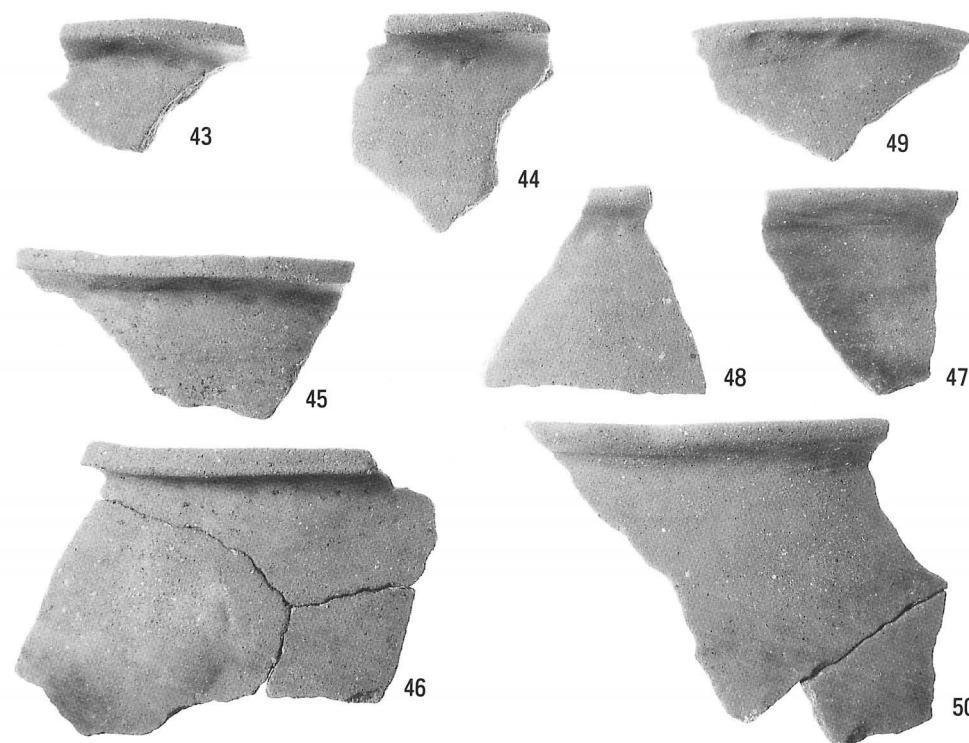
(
92
—
602
)



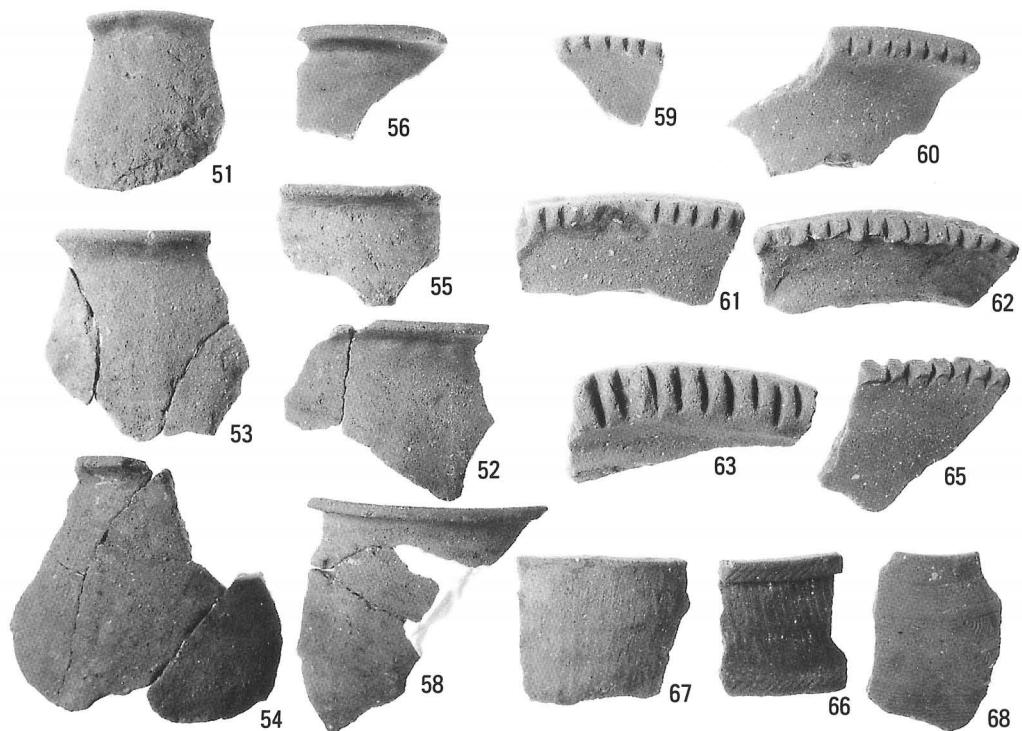
S K 02壺



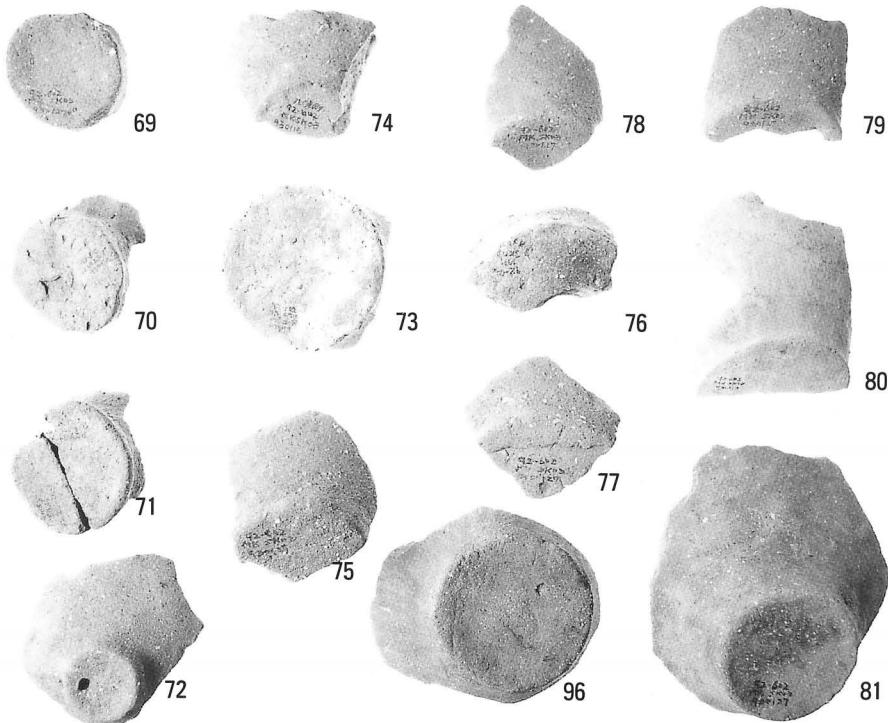
S K 02底部



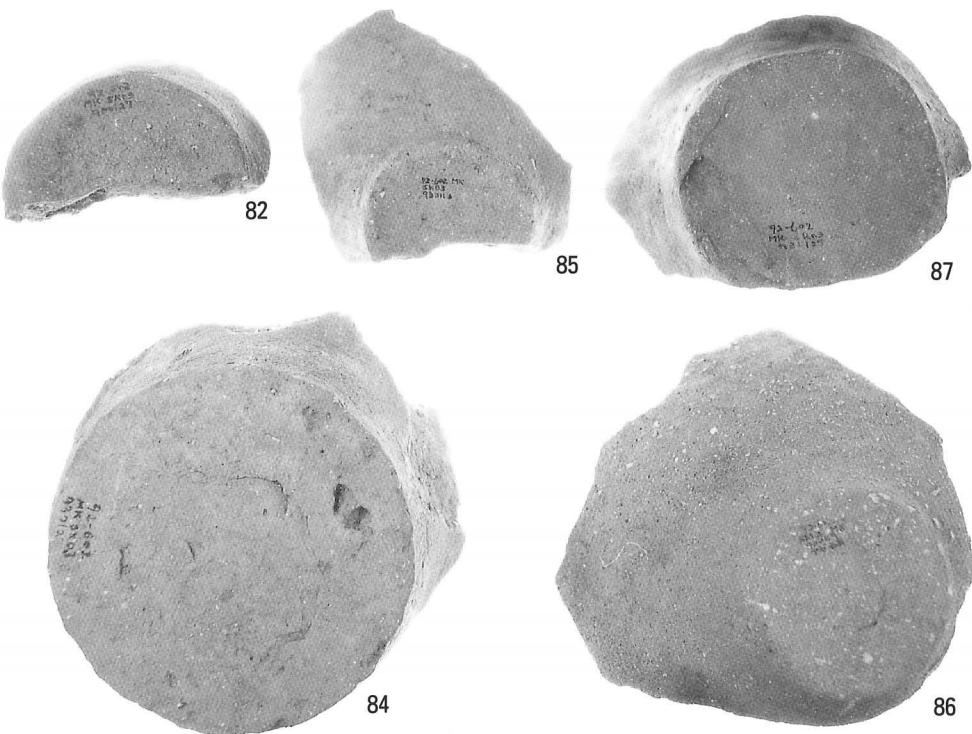
S K 03壺



S K 03壺・壺



S K 03底部

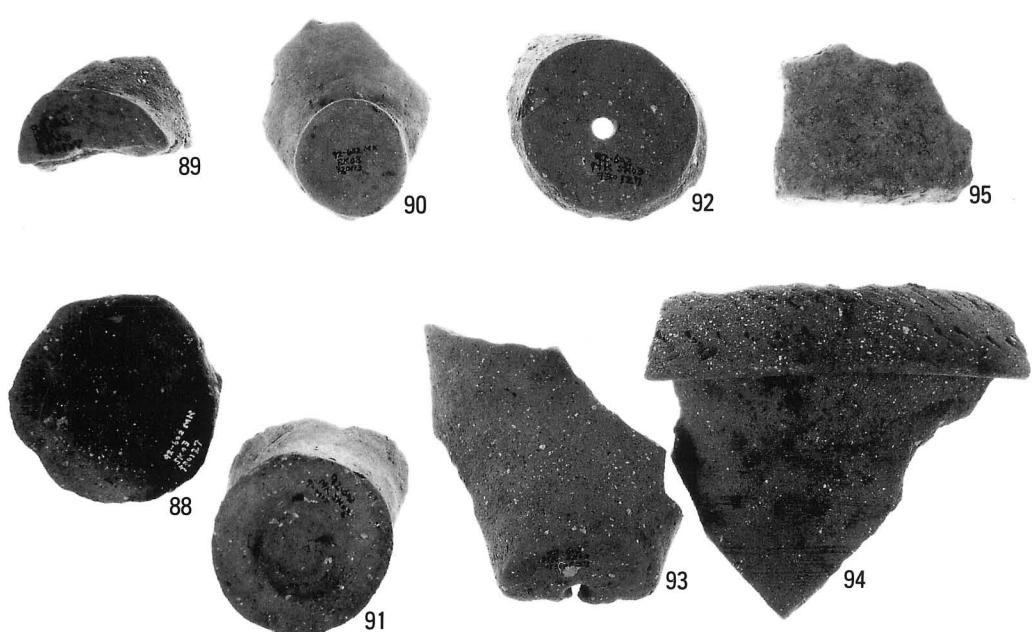


S K 03底部

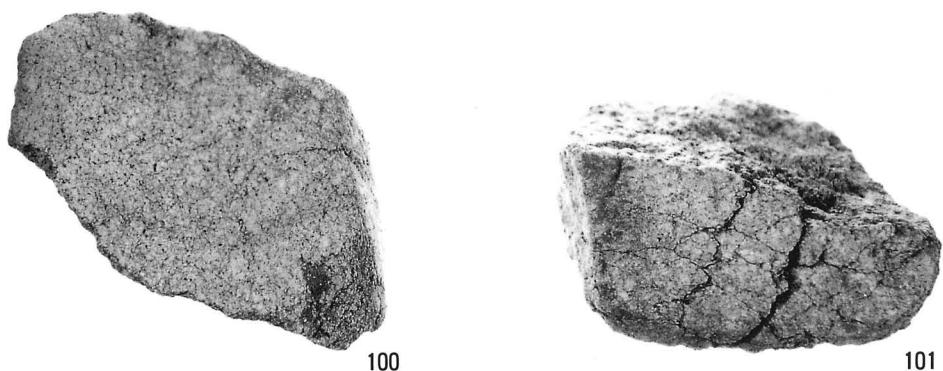
図版
16

水越遺跡

(92
—
602)



S K 03底部他



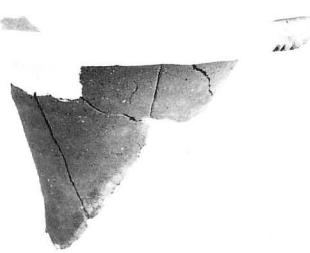
S K 01砥石



19



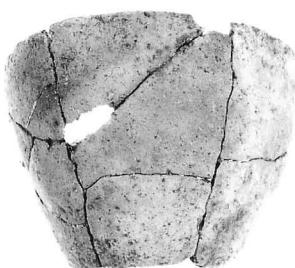
12



64



35



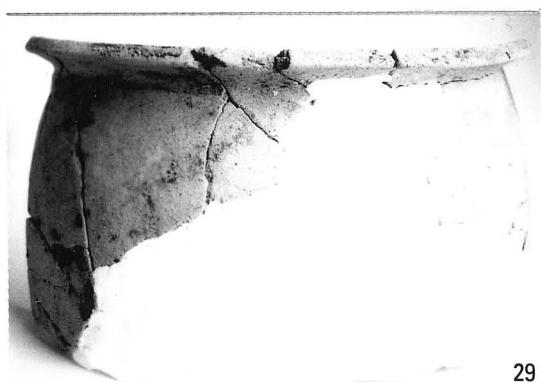
38



30



36



29

八尾市文化財調査報告書29
平成5年度 国庫補助事業

八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書Ⅰ

発行日 1994年3月

発行所 八尾市教育委員会

印 刷 (株)ヨーヨー 21

